

とうこうじ  
東光寺遺跡

一般県道木城高鍋線（坂本工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

宮崎県埋蔵文化財センター



(1) 遺跡遠景（調査地上空より蚊口浦方向を望む）



(2) 調査区全景（上方が北）

## 序

宮崎県教育委員会では、平成21年度に児湯郡高鍋町において、一般県道木城高鍋線（坂本工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した東光寺遺跡では、13世紀から15世紀にかけての土器、国産陶器、輸入磁器、滑石製石鍋再加工品など、東は東海地方から、西は中国大陆に至るまで広範な地域の遺物が出土しました。また、遺跡からは200点以上におよぶ鉄滓が出土しており、人々が活発に鍛冶作業を行っていたことも明らかになりました。これらの遺物は、持田地域に住んでいた当時の人々が、東アジア規模での交易路の一端を担っていたことを教えてくれます。また、ここに報告する内容は、持田古墳群や高鍋城と並んで、持田地区だけでなく、広く高鍋地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に対して、厚くお礼申しあげます。

平成23年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 森 隆茂

## 例　言

- 1 本書は、一般県道木城高鍋線（坂本工区）道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県児湯郡高鍋町大字持田字東光寺に所在する東光寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、高鍋土木事務所の依頼を受けて、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成 21（2009）年 6 月 1 日から 8 月 31 日まで行った。
- 3 発掘調査は、加藤徹、福田光宏、川越宏之、二宮満夫が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影については、調査担当者が行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、加藤が整理作業員の協力を得て行った。
- 5 空中写真撮影業務は九州航空株式会社に、基準点測量等の測量業務は有限会社進藤測量設計事務所にそれぞれ委託した。
- 6 本書で使用した遺物等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳（2008 年度版）』による。
- 7 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）、標高は海拔絶対高である。
- 8 本書で使用している土層は、ローマ数字が遺跡の基本土層を、アラビア数字が各遺構等の土層を示している。また、土層は実測時の観察によるが、土層の数字は必ずしも堆積の順番を示しているわけではない。
- 9 石器石材と器種の同定については、調査第一課調査第二担当松本茂の協力を得た。
- 10 本書の執筆は、第 I 章第 1 節を堀田孝博が行い、その他の執筆および編集は加藤が行った。
- 11 出土遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 本文目次

序	i
例 言	ii
目 次	iii
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡周辺の地理的環境	3
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	7
第1節 基本土層からみた遺跡の立地環境	7
第2節 検出遺構	10
第3節 出土遺物	19
第Ⅳ章 総括	38
第1節 遺構からみた東光寺遺跡の変遷	38
第2節 遺物からみた東光寺遺跡	39
第3節 中世における東光寺遺跡の歴史的位置づけ	40

## 付表目次

出土遺物観察表1 (土師質土器等)	41
出土遺物観察表2 (磁器等)	46
出土遺物観察表3 (中世須恵器・陶器等)	47
出土遺物観察表4 (古墳時代以前の土器・須恵器等)	48
出土遺物観察表5 (土製品・石製品・石器・金属器等)	50
出土遺物観察表6 (鉄滓)	51

## 挿図目次

図 1 調査区グリッド配置図	2
図 2 高鍋町の地形断面図	3
図 3 東光寺遺跡の位置と周辺の主な遺跡の分布図	4
図 4 調査区北東壁および南西壁土層断面図	7
図 5 調査区南東壁土層断面図	8
図 6 遺構分布図 1	9
図 7 遺構分布図 2	10
図 8 遺構分布図 3	11
図 9 1号・2号溝状遺構土層断面図	12
図 10 遺構分布図 4・流路断面図	14
図 11 遺構分布図 5	15
図 12 3号・4号溝状遺構土層断面図	16
図 13 煉冶炉・粘土塊・土坑・ピット実測図	18
図 14 土師質土器（壺・小皿）実測図 1	20
図 15 土師質土器（壺・小皿）実測図 2	21
図 16 土師質土器（壺・小皿）実測図 3	22
図 17 その他壺等実測図	24
図 18 瓦質土器等実測図	25
図 19 磁器実測図 1	25
図 20 磁器実測図 2	26
図 21 陶器・中世須恵器等実測図 1	27
図 22 陶器・中世須恵器等実測図 2	28
図 23 陶器・中世須恵器等実測図 3	29
図 24 古墳時代以前の土器等実測図	31
図 25 土錘・羽口実測図	32
図 26 石器・石製品実測図 1	33
図 27 石器・石製品実測図 2	34
図 28 石器・石製品実測図 3	35
図 29 石器・石製品実測図 4	36
図 30 銅錢実測図	37

## 図版目次

- 卷頭図版 (1) 遺跡遠景（調査地上空より蚊口浦方向を望む）  
(2) 調査区全景
- 図版1 (1) 遺跡遠景（調査地上空より小丸川・高鍋市街地方向を望む）  
(2) 遺跡遠景（調査地上空より鬼ヶ久保の台地方向を望む）
- 図版2 (1) 1号・2号溝状遺構の掘削状況（南より）  
(2) 3号・4号溝状遺構の掘削状況（南より）
- 図版3 (1) 1号溝状遺構土層断面（南西より） (2) 2号溝状遺構土層断面（北より）  
(3) 3号・4号溝状遺構土層断面（南より）  
(4) 3号溝状遺構土層断面（南西より）  
(5) 1号・2号鍛冶炉検出状況（南より） (6) 1号鍛冶炉半裁状況（南西より）  
(7) 1号鍛冶炉焼結部検出状況（南東より）  
(8) 2号鍛冶炉焼結部検出状況（南東より）
- 図版4 (1) 白色粘土塊検出状況（北東より） (2) 白色粘土塊断割状況（南西より）  
(3) 流路検出状況（北西より） (4) 流路内の疊堆積状況（北より）  
(5) SH4半裁および遺物出土状況（南西より）  
(6) SH13遺物出土状況（南東より）  
(7) SH86断割および遺物出土状況（南より）  
(8) SH66半裁状況（南より）
- 図版5 出土遺物1（土師質土器1）
- 図版6 出土遺物2（土師質土器2）
- 図版7 出土遺物3（土師質土器3）
- 図版8 出土遺物4（土師質土器4）
- 図版9 出土遺物5（土師質土器5）
- 図版10 出土遺物6（土師質土器6）
- 図版11 出土遺物7（土師質土器7・陶器（坏）・瓦質土器1）
- 図版12 出土遺物8（瓦質土器2・磁器1）
- 図版13 出土遺物9（瓦質土器3・磁器2）
- 図版14 出土遺物10（磁器3・陶器1）
- 図版15 出土遺物11（陶器2・中世須恵器）
- 図版16 出土遺物12（陶器3・須恵器（底部）・繩文土器・弥生土器1）
- 図版17 出土遺物13（弥生土器2・土師器・須恵器）
- 図版18 出土遺物14（土鍤・羽口）
- 図版19 出土遺物15（石製品・石器1）
- 図版20 出土遺物16（石器2）

- 図版21 出土遺物 17（銅錢・鉄器・鉄滓 1）
- 図版22 出土遺物 18（鉄滓 2）
- 図版23 出土遺物 19（鉄滓 3）
- 図版24 出土遺物 20（鉄滓 4）
- 図版25 出土遺物 21（鉄滓 5）
- 図版26 出土遺物 22（鉄滓 6）
- 図版27 出土遺物 23（鉄滓 7）
- 図版28 出土遺物 24（鉄滓 8）
- 図版29 出土遺物 25（鉄滓 9）
- 図版30 出土遺物 26（鉄滓 10）
- 図版31 出土遺物 27（鉄滓 11）
- 図版32 出土遺物 28（鉄滓 12・実測図未掲載資料）

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道10号線は宮崎県を南北に貫く物流の大動脈であるが、県央部では東九州自動車道が未開通ということもあり、各所で慢性的な渋滞が発生している。地方道路交付金事業木城高鍋線建設工事は、こうした国道10号線の渋滞を緩和し、また東九州自動車道高鍋ICへのアクセス向上を図るために計画された事業で、このうち坂本工区（計画総延長900m）の計画路線が周知の埋蔵文化財包蔵地である東光寺遺跡にかかり、同じく持田遺跡に近接するため、平成16（2004）年より高鍋土木事務所と文化課（現文化財課）との間で協議を行い、用地買取等の状況に応じて試掘・確認調査を実施してきた。

平成18（2006）年12月4・5日に持田遺跡隣接地の試掘調査を、平成20（2008）年10月27・28日に東光寺遺跡および隣接地の試掘・確認調査を実施した結果、東光寺遺跡のうち1,000m<sup>2</sup>において埋蔵文化財が影響を受けると判断されたため、その取り扱いについて協議を行い、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

調査は高鍋土木事務所の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成21（2009）年6月1日から8月31日までの期間で実施した。

## 第2節 調査の組織

東光寺遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

### 平成21年度 発掘調査・整理作業

所長 福水展幸

副所長兼総務課長 長友英詞

総務担当リーダー 主幹 高山正信

調査第二課長 石川悦雄

調査第二課調査第三担当リーダー 副主幹 福田泰典

調査第二課調査第三担当 主事 加藤 撫（調査・整理担当）

調査第二課調査第三担当 調査員 福田光宏（調査担当）

調査第二課調査第四担当 主査 川越宏之（調査担当）

調査第二課調査第四担当 主任主事 二宮満夫（調査担当）

調整担当（文化財課主任主事） 堀田孝博

（発掘作業員）

鈴川照男、井上ミドリ、岩切俊文、内山民生、櫻原久男、柏田チミ子、古谷信一、小松若子、

白坂征子、添田ヤエ子、津郷雪男、中城澄子、橋口忠義、橋口敏子、浜本京子、矢野耕作

（整理作業員）

近藤美千代、黒木由美子、垂水美穂、浜砂麻由美

## 平成22年度 整理作業

所長	森 隆茂
副所長	北郷泰道
総務課長	矢野雅紀
総務担当リーダー	副主幹 長友由美子
調査第二課長	永友良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹 吉本正典
調査第二課調査第三担当	主事 加藤 哲 (整理担当)
調整担当 (文化財課 主任主事)	堀田孝博
(整理作業員)	
近藤美千代、武野美智子、長田博子、松本静香	

### 第3節 調査の経過

調査は平成21（2009）年6月1日より、重機による表土掘削を開始するが、安全確保と試掘結果とを考慮し、掘削面積を約650m<sup>2</sup>とする。上下段に分かれた畠地が調査区のため、下段部分の浅い箇所で15～20cm、上段部分の深い箇所で70～80cmを除去する。また、6月9日には委託により、調査の基準となる座標および5m間隔のグリッドを設定する（図1）。その後、11日より作業員を雇用し、人力による掘削を開始する。22日より調査区中央付近で自然流路を検出し、その掘り下げを行う。一部で地表下1m付近にて湧水を確認する。24日には、その前日に降った雨により調査区北東部の一部が冠水する。

7月15日より1・2号溝状遺構の掘削、21日からは白色粘土塊および調査区内のピットの掘削を行う。調査区北東部と同様に、溝状遺構内には調査区壁面から水が流れ込み、水が貯まっている状態が多くなる。22日には皆既日食に近い部分日食が起り、気温が5℃ほど下がった（現場設置の温度計による）ため夏日でありながら肌寒さを感じる。

8月13日に空中写真撮影を行い、調査区および周辺の遠景写真を撮る。18日より3号・4号溝状遺構の掘削を始める。調査の比較的早い段階からこの溝状遺構の上面まで掘り下げており、この時点では周辺よりも凹むものの、溝とは認識していなかった。また、2条の溝状遺構と同時に、1号・2号鍛冶炉の掘削を始める。31日に全調査を終了する。

このほか、8月2日には現地説明会を行い、33名の見学者があった。また、地元の中学校・高校の生徒・教諭の訪問が8月3日、26日、27日にそれぞれあった。

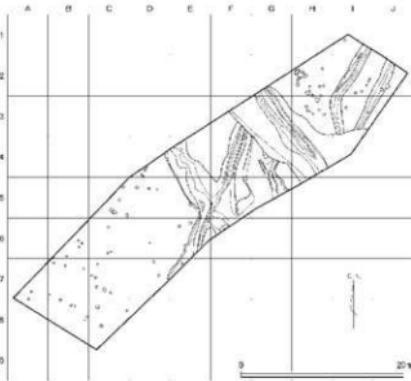


図1 調査区グリッド配置図 (S=1/600)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡周辺の地理的環境

児湯郡高鍋町は南北に長い宮崎県の中央付近に位置しており、町の中心は標高10m以下の沖積平野にあり、北・西・南の三方を標高50~70mの台地に囲まれている（図2）。そして、九州山地に源を発する小丸川が、この台地と沖積平野を西から東へと貫流して、蚊口浦を経て日向灘へ流れ込んでいる。

東光寺遺跡は児湯郡高鍋町持田字東光寺に位置しており、小丸川の北岸、標高10m付近の沖積平野端にあり、西から延びてきた鬼ヶ久保の台地裾に立地している。遺跡から南側の小丸川まで約1km、南東の海岸部まで約1.5kmの距離がある。北側は台地上から流れ出た鳴野川によって形成された谷部が、東側には床家台地が迫っているものの、南東方向には平野が広がっており、現在は水田地帯となっている。夏場の穀の生育時期には緑豊かな光景を見ることができる。遺跡の付近には鳴野川の他にも、遺跡の裏手の台地上から流れ出してきた小川があり、水が豊富に存在している。また、遺跡はこの小川が流れる谷筋の出口付近に位置している。

明治17年に宮崎県に提出された『日向地誌』の「高鍋村」および「持田村」の「地味」の項をみると、「高鍋村」では「水利ハ便ナラス十餘日雨フラサレハ必ス旱災ニ罹ル」、「持田村」では「水利ハ便ナラス十餘日雨フラサレハ多ク旱災ニ罹ル」とある。このように、高鍋町の平地部では水の便がそれほど良くなかったようである。しかし、遺跡周辺については「持田村」の「地勢」に「南涯ハ一段低シテ水田アリ」と記されており、当該地域においては水の便は比較的良かったと考えられる。このほか、同じく『日向地誌』「持田村」の「地勢」の項には、「運輸便利」とあり運輸には適した場所であったことをうかがうことができる。

### 第2節 遺跡周辺の歴史的環境

東光寺遺跡が位置する持田地区は、台地上の国指定史跡持田古墳群（図3-3）が全国的に有名である。また、中世以降は南の高鍋市街地に位置する高鍋城がこの地域の中心として知られている。これらの遺跡の存在からは、持田地区にとどまらず、その周辺地域と一体とした歴史的な変遷を知る必要があ

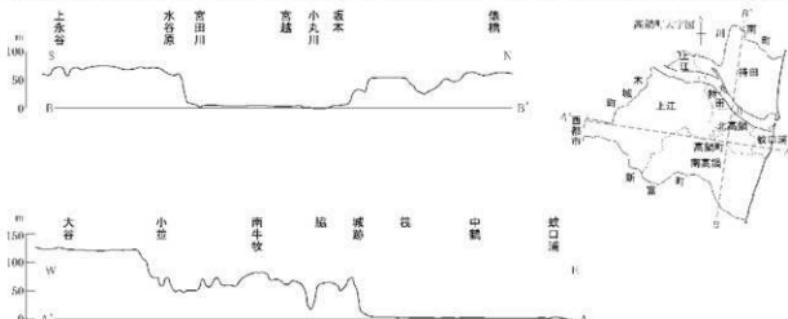


図2 高鍋町の地形断面図（高鍋町史編さん委員会編 1987 第4図を改変・再トレース）



図3 東光寺遺跡の位置と周辺の主な遺跡の分布図 (S=1/25,000)

- 1: 東光寺遺跡 2: 十三仏板碑・東光寺跡 3: 持田古墳群 4: 持田中尾遺跡 5: 上ノ別府遺跡 6: 龜塚古墳  
7: 高鍋城跡 8: 大戸ノ口第2遺跡 9: 尾花A遺跡 11: 西ノ別府遺跡

るが、ここでは、持田・高鍋地区を中心とし、東光寺遺跡周辺の歴史的環境について概観していく。

東光寺遺跡周辺における人々の生活の痕跡は、古くは旧石器時代から確認することができる。旧石器時代の遺物が出土した遺跡としては、高鍋町内には東光寺遺跡周辺の持田中尾遺跡（高鍋町教育委員会 1982）（図3-4）のほか、代表的な遺跡として野首第1遺跡、野首第2遺跡などがある。持田中尾遺跡は、東光寺遺跡から西へ500mほど離れた丘陵上に位置する遺跡であるが、三稜尖頭器・ナイフ形石器・スクレイパーなどが出土している。野首第1遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）、野首第2遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2007b）は、AT火山灰を挟んで層位的に遺構と遺物が確認されており、多くの礫群や多量の旧石器が検出されている。このほか、近隣の遺跡として、礫群のほか、ナイフ形石器・角錐状石器・細石器など多くの石器が出土した川南町の尾花A遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2009a）（図3-9）などがある。ここで挙げた遺跡のほかにも、小規模ながら台地上に遺跡が存在しており、旧石器時代には台地を中心に広く人々の生活が営まれていたことをうかがうことができる。

縄文時代の遺跡も旧石器時代と同様に台地上を中心に分布している。縄文時代の遺物が出土した遺跡は多いが、まとめた量の遺物・遺構が確認されている代表的な遺跡として、高鍋町の老瀬坂上第3遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2005b）、大戸ノ口第2遺跡（高鍋町教育委員会 1991）（図3-8）、崩戸遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2005a）、下耳切第3遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）、野首第1遺跡、野首第2遺跡などのほか、川南町内の尾花A遺跡、国光原遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2007a）がある。老瀬坂上第3遺跡、崩戸遺跡で縄文時代草創期の遺物が確認されているほか、多くの遺跡で縄文時代早期や後期・晚期の遺構・遺物などが確認されている。この中で、下耳切第3遺跡では類例があまり多くない縄文時代中期の、住居などの遺構と土器がまとめて出土している点で特筆される。東光寺遺跡周辺では、旧石器時代の遺物が出土した持田中尾遺跡において、縄文土器や石器が少數ながら確認されている。縄文時代早期の遺構・遺物が検出された遺跡では旧石器時代の遺構あるいは遺物が確認されているものが多く、引き続き台地上が人々の生活の中心であるのに対して、沖積地における人々の生活の痕跡はあまり確認されていない。

弥生時代の代表的な遺跡として、持田中尾遺跡を挙げることができる。持田中尾遺跡では遺構として、区画された溝の内側で2軒の竪穴建物跡のほか、土坑・集石・焼土面などが確認されている。遺物としては、弥生時代前期から中期にかけての土器とともに、（抉入）柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、石剣、石製紡錘車など多様な石器が出土している。このほかに、大戸ノ口第2遺跡では、持田中尾遺跡と同じく弥生時代前中期のほかに後期末頃の住居址が合計12軒確認されており、それに伴う土器もみつかっている。また、出土遺物はないものの、毛作第4遺跡（高鍋町教育委員会 2003）では、720mの調査区内から弥生時代に属すると考えられる8軒の竪穴建物跡が密集して検出されている。川南町側では弥生時代後期の遺跡が多くみつかっているが、前期末までさかのぼる遺跡は現在までのところほとんどない。弥生時代は、持田中尾遺跡にみるように沖積地に近い丘陵上などに集落をかまえ、湧水地点に近い平野部で水田開発を行うようにして遺跡の形成が始まり、生活領域が次第に沖積地へも広がっていったと考えられる。

古墳時代では、全国的に有名な国指定史跡である持田古墳群がある。東光寺遺跡の北側丘陵上にある持田古墳群の主群は前方後円墳9基のほか、多数の円墳で構成される。県内でも屈指の規模を誇る持田古墳群の存在から、この地域の中心が持田地域にあった可能性を考えられるが、古墳が営まれた頃の集

落については明らかになっていない。古墳が位置する台地と谷を挟んで東側に位置する台地上に、古墳時代後期の住居址が9軒みつかっている上ノ別府遺跡（宮崎県教育委員会1979）（図3-5）が知られている程度である。近年では、野首第1遺跡、野首第2遺跡、下耳切第3遺跡や川南町の尾花A遺跡や湯牟田遺跡などで古墳時代の集落の調査例がみられるものの、縄文時代や旧石器時代のように当時の様相を一挙に明らかにする事例は少ない。

古代以降では当時の生活の様子を明らかにできる遺跡はほとんど知られていない。この中で、中世においては、東光寺遺跡から200mほどの場所が、文禄元（1592）年に中興された東光寺跡（高鍋町史編さん委員会1987）として知られ、永禄五（1562）年に建立された十三仏板碑（町指定文化財）（高鍋町史編さん委員会1987）が現存している。また、東光寺跡からは一字一石経がみつかっており（宮崎県立博物館1966）、少なくとも16世紀にはこの付近が寺という宗教的なセンターとして小地域の核をなす場所であったと考えられる。このほか、中世から近世以降の遺跡として高鍋城跡がある。高鍋城の築造時期は明らかではないが、15世紀から16世紀にかけて領有関係がたびたび変化していることが知られている。まず、長禄元（1457）年にそれまで在地の勢力であった土持氏から伊東氏へと変わり、その後、天正五（1577）年に伊東氏から島津氏へ、さらに天正十五（1587）年に島津氏から秋月氏へと領主の交代が起こっている。領主の交代は、それまでに存在していた様々なネットワークの変化を想定させ、その変化が遺物や遺構に対しても影響を与える可能性がある。しかし、これまで高鍋城の調査は少なく、それを確認できるような状況にはいたっていない。

以上のように、弥生時代以前の古い時期については、人々の生活の様相がかなり明らかになってきている。これに対して、古代以降については、現状では調査事例が少なく必ずしも明らかになっているとは言い難い状況である。

#### （引用・参考文献）

- 高鍋町教育委員会 1982『持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』  
高鍋町教育委員会 1991『大戸ノ口第2遺跡』高鍋町文化財調査報告書  
高鍋町教育委員会 2003『町内遺跡発掘調査報告書』高鍋町埋蔵文化財調査報告書第9集  
高鍋町史編さん委員会 1987『高鍋町史』高鍋町  
半部嶋南 1976『日向地誌』（復刻版）青潮社  
宮崎県教育委員会 1979『上別府遺跡』お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
官崎県教育委員会 1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ詳説編  
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『野首第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2005a『崩戸遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第103集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2005b『老瀬坂上第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2007a『国光原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第149集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2007b『野首第2遺跡 第一分冊』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第158集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2009a『尾花A遺跡 I 旧石器時代～縄文時代編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第185集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2009b『高鍋城三ノ丸跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第186集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2010『野首第2遺跡（二・三次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第188集  
宮崎県立博物館 1966『宮博館報』第13号

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 基本土層からみた遺跡の立地環境

調査によって、基本土層として5つの層（I～V）を確認している（図4・5）。調査区は畠地として利用されていたこともあり、表土およびI層はしまりのない耕作土が堆積しており、厚さは10～20cmである。II層は灰色のシルト質の土層であるが、表土・I層と同様にしまりは弱い。厚さは10～45cmである。II層の下部には鉄分の沈着層と考えられるほど水平に延びる淡い赤褐色のラインが観察されるので、II層は水田に伴う土層であると考えられる。II層の下には暗褐色土のIII層、黒色土のIV層を確認している。III層が17世紀以降の土層であるため、II層は近世以降の水田耕作土である。水田や畠地として利用され始めた近世頃には、現在に近い景観が周辺に広がっていたと考えられる。III層とIV層は、一部で両者の区別が難しい箇所がある。この2つの層は遺物包含層であるが、III層中の遺物は細片が多い。さらにその下に橙褐色土のV層があるが、この層に遺物は含まれておらず、他の土層の堆積・切り合いの状況から、自然堆積層であると考えられる。したがって、V層の上面が、遺跡が形成され始めた頃の基盤的な面であると考えられる。

ところで、I層からIII層およびIII層下面の堆積は水平に近いが、V層の上面では地形に起伏がみられる。遺跡が台地裾部および谷の出口付近に位置しているということもあり、基本的に西から東、南から北に向かってゆるやかに傾斜している。しかし、調査区北東部ではV層の堆積は安定しておらず、一部

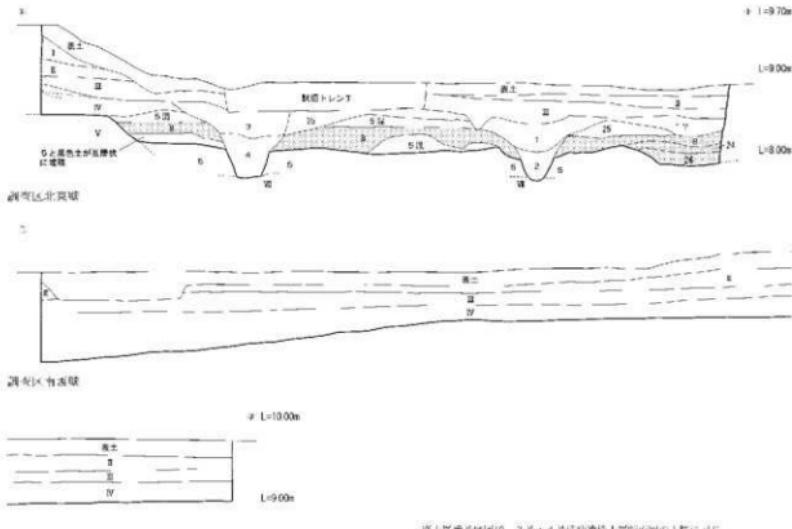


図4 調査区北東壁および南西壁土層断面図 (S=1/60)

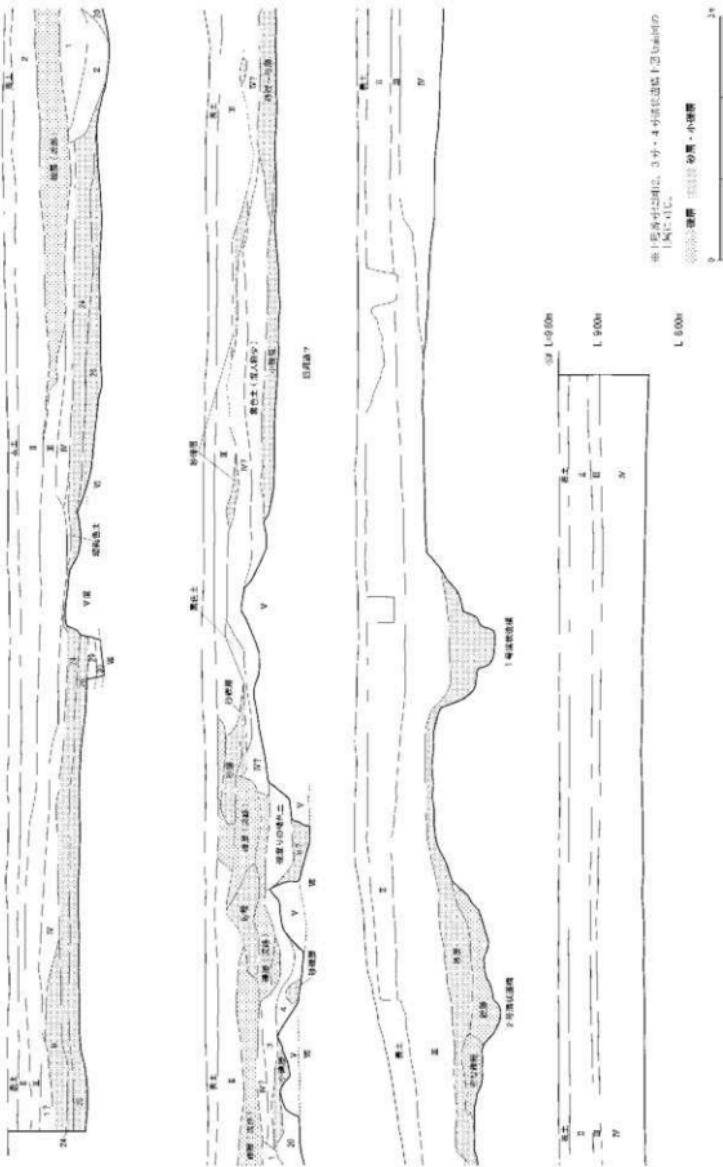


図5 調査区南東壁土層断面図 (S=1/60)

1-1000

1-1000

1-1000

1-1000

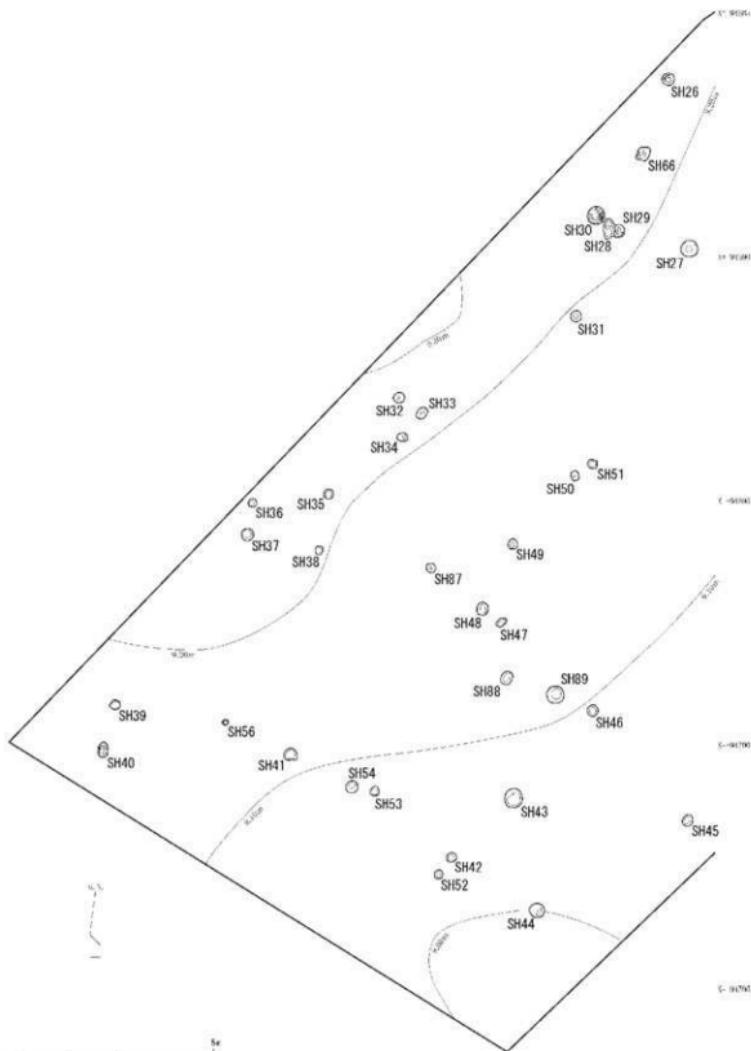


図6 遺構分布図1 (S=1/100)

ではさらに下層の白色粘土質の土層であるVI層、あるいはさらに下の、礫を含む濃黄褐色から白色を呈する粘質土のVII層が露出している。このような部分では、VI・VII層の上に礫や砂が堆積しており、一部ではこれらが互層をなしている。このような堆積状況は、河川などによる水成堆積によるものであると考えられる。この水成堆積と考えられるような砂や礫の部分からは、弥生土器(図24-252)や土師器(図24-266)がわずかに出土している。

これらの状況から、遺跡の最も古い形成時期には調査区の北東部を河川が通っていたと考えられ、人々が生活を始めた頃の環境は、河川が流れる台地帯という状況であったと想定できる。

## 第2節 検出遺構

### (1) 溝状遺構と流路

調査区中央部と北部において4条の溝状遺構を検出している。これら溝状遺構のほか、旧河道および自然流路の痕跡と考えられる溝状の凹みなどを検出している<sup>10)</sup>。

#### 1号・2号溝状遺構(図8・9)

調査区中央部で検出した溝状の遺構で、1号溝状遺構(以下溝状遺構については「○号溝」と略)は北東から南西方向へ、2号溝は北西から南東方向へ延びており、両者は調査区中央や南側で交差している。ともにV層を掘り込んで作られている。

1号溝の幅は検出面でおよそ1.5mあり、1つあるいは2つの段を付けて掘削されており、深くなるにつれて幅が狭くなっている。最下段では幅が0.3~0.4mとなる。深さは検出面から1.0~1.2m、底面のレベルでは標高7.8~7.9mと溝の傾斜はそれほど大きくない。2号溝の幅は検出面付近で1.5~3.5m、底面で0.5~1.0mと差が大きい。深さは、1号溝との合流地点より北側では1.1~1.2mであるが、南側では1.0m程度とやや浅くなっている。レベルでみると、合流地点より北側の底面は標高7.8m

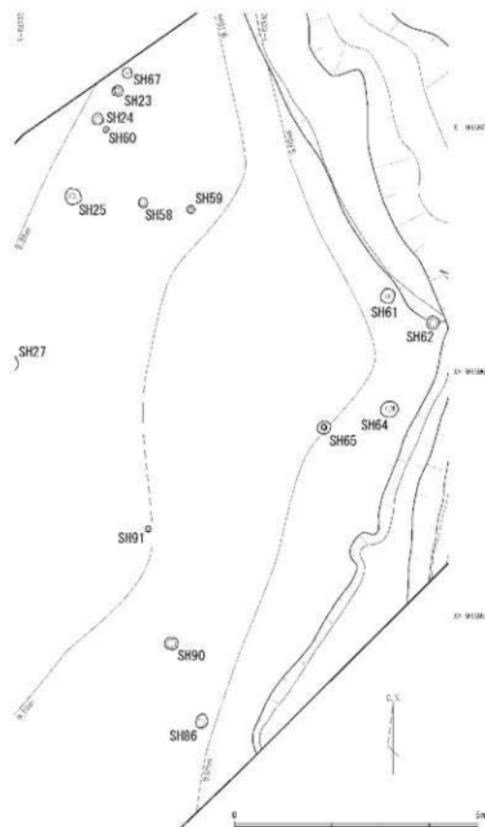


図7 遺構分布図2 (S=1/100)

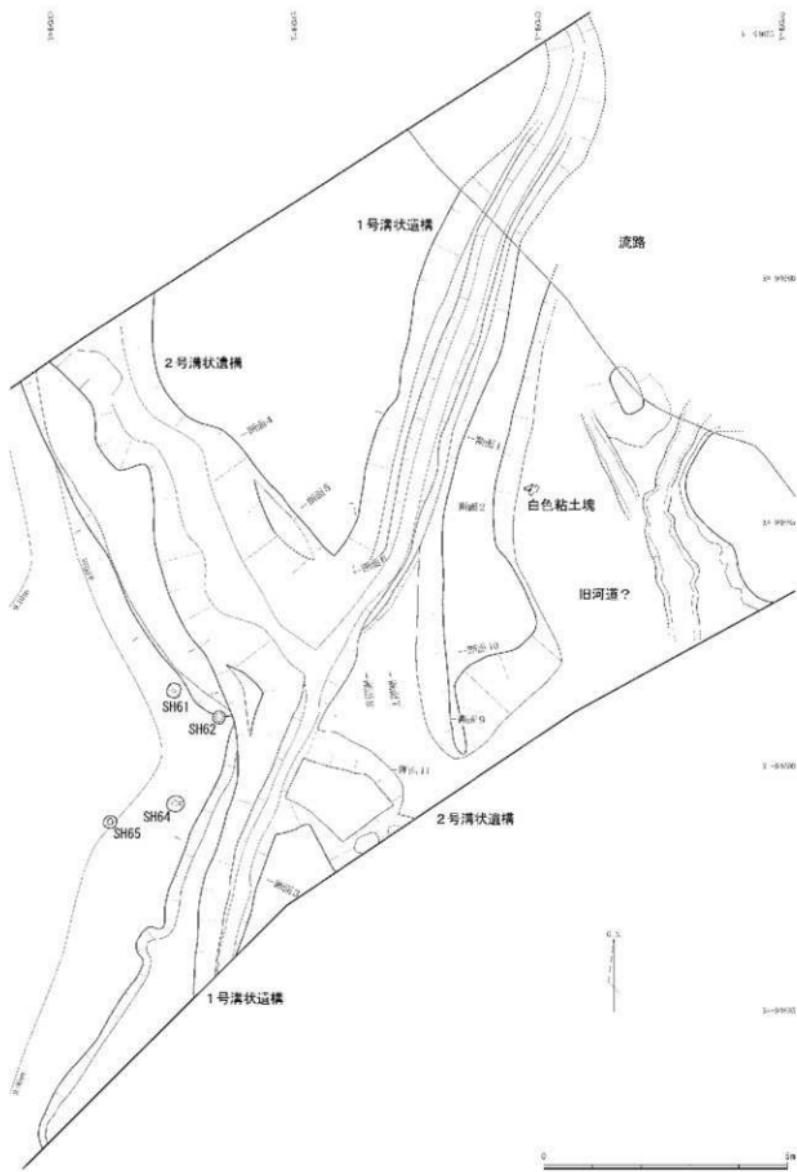
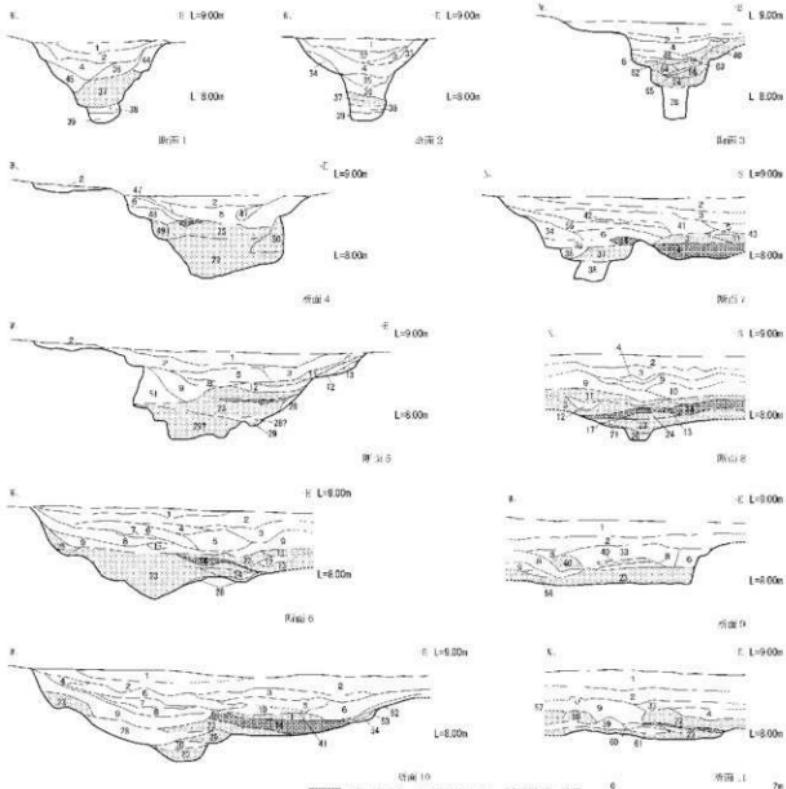


図8 遺構分布図3 (S=1/100)



- 1: 黒褐色土層。厚さ約1.5mの深部の壤状黑色および  
赤褐色色の土を含む。基本-1図のIV-Aに記す。
- 2: 黄褐色土層。約5cm程度の浅部黑色および赤褐色  
の土を含む。\*の1号、\*の3号の表面黑色土の  
ブロックを含む。
- 3: 植生1群。黒褐色土上にロック状に入れる。  
4: 黄褐色土上に、粘土質で、腐葉物少ないと。  
5: \*の3号。植生1群。黒褐色土上に、5.0cm  
木炭の土塊を含む。細粒土含む。
- 6: 植被1群土層。粘土質。表面(?)に黒褐色土(?)  
へと変化する。
- 7: 黑褐色土上性。粘土質。希にビーチ上の軟土が堆  
積する。
- 8: 黄褐色土上層。粘土質。黒褐色土のブロックと砂  
を含む。砂利多く。
- 9: 黑褐色土上層。粘土質。本土(?)はやや粗く、細  
かい砂利を含む。
- 10: 黄褐色土上層。粘土質。これおおよ5cm程度の特點  
色付く比較的多く含む。また、約3.0mの「の白壁  
」を形成する。
- 11: 黄褐色土。約3.0mほどの小丘陵を形成する。
- 12: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 13: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 14: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 15: 黑褐色土層。第1段。黒褐色土のブロックを含む。
- 16: 黑褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 17: 黑褐色土。
- 20: 黄褐色土。

- 21: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 22: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 23: 黄褐色土。
- 24: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 25: 黄褐色土。
- 26: 黑褐色土層。数cm程度の砂利を含むほか、一部  
に枯枝の土をブロックで含む。
- 27: 黄褐色土。
- 28: 黄褐色土。約1.0mの「の白壁」を形成する。
- 29: 黄褐色土。
- 30: 黄褐色土。
- 31: 黄褐色土層。表面(?)に砂利を含む。
- 32: 黄褐色土層。砂利多く。
- 33: 黄褐色土層。砂利多く。
- 34: 黄褐色土層。砂利多く。
- 35: 黄褐色土層。砂利多く。
- 36: 黄褐色土層。砂利多く。
- 37: 黄褐色土層。砂利多く。
- 38: 黄褐色土層。砂利多く。
- 39: 黄褐色土層。砂利多く。
- 40: 黄褐色土層。砂利多く。
- 41: 黄褐色土層。砂利多く。
- 42: 黄褐色土層。砂利多く。
- 43: 黄褐色土層。砂利多く。
- 44: 黄褐色土層。砂利多く。
- 45: 黄褐色土層。砂利多く。
- 46: 黄褐色土層。砂利多く。
- 47: 黄褐色土層。砂利多く。
- 48: 黄褐色土層。砂利多く。
- 49: 黄褐色土層。砂利多く。
- 50: 黄褐色土層。砂利多く。
- 51: 黄褐色土層。砂利多く。
- 52: 黄褐色土層。砂利多く。
- 53: 黄褐色土層。砂利多く。
- 54: 黄褐色土層。砂利多く。
- 55: 黄褐色土層。砂利多く。
- 56: 黄褐色土層。砂利多く。
- 57: 黄褐色土層。砂利多く。
- 58: 黄褐色土層。砂利多く。
- 59: 黄褐色土層。砂利多く。
- 60: 黄褐色土層。砂利多く。
- 61: 黄褐色土層。砂利多く。
- 62: 黄褐色土層。砂利多く。
- 63: 黄褐色土層。砂利多く。
- 64: 黄褐色土層。砂利多く。
- 65: 黄褐色土層。砂利多く。
- 66: 黄褐色土層。砂利多く。

図 9 1号・2号溝状構造土層断面図 (S=1/60)

前後であるのに対して、南側の底面は標高 8.0 m と、合流地点を境に 20cm 程度高くなっている。この南側部分については、幅が広く、旧河道に連接するような形状を呈しており溝とは雰囲気が異なる。ただし、この部分が溝よりも古い状況は確認できなかった。

溝埋土の堆積状況は、合流地点より手前ではそれぞれ比較的安定しているものの、合流地点を越えると乱れが大きく、同一層の判定が困難な部分が多い。両者の先後関係については、2 号溝最下層の疊層よりも下層に 1 号溝の埋土が堆積しているため、1 号溝が古いと考えられる。ただし、2 号溝の掘削は、1 号溝の底が埋まり始めた頃に行われているので、1 号溝の掘削とそれほど時間的な間隔はない可能性が高い。ところで、2 号溝の壁面および底面の形状は、1 号溝と比べると、非常に不整形であり、自然に形成されたようにもみえる（図版 3 参照）。しかし、1 号溝の掘削前には存在しておらず、深さ 1.2 m ある凹みが一気に生じるほどの土石流が発生したとも考えにくいため、人工的に掘削されたと考えられる。埋土は細かな層に分かれており、その中には有機物の腐植土層であると考えられる黒色土層が数層確認できるので、埋没は徐々に進んでいったと考えられる。また、合流地点より西側の溝上面では 1 つの段を形成しているが、この段の埋土（2 層）は溝まで続いているので、溝が埋没した頃に一度整地をされている可能性が高い。

溝の底面からの出土遺物は少なく、合流地点で黒色土器（図 17 - 132）、2 号溝で横長剥片に形状が似た剥片（図 27 - 307）が出土している程度である。その他の遺物は標高 8.9 m 前後の溝検出面に近い IV 層の最下層に相当する部分からの出土であり、溝が埋まる最終段階、あるいは埋没後の段階のものである。これら上層出土の遺物には糸切り底の土師質土器（図 14）や龍泉窯系青磁や白磁（図 19）、東播系須恵器（図 22）などがある。これらの底面と上層との間からはほとんど遺物は出ていない。1 号溝の掘削時期は、底面から黒色土器以外に新しい時期の土器が出土していないため、10 世紀頃と考えられ、2 号溝もそれに近い時期が考えられる。完全な埋没時期は、上層の遺物から 13 世紀～14 世紀前半頃と考えられる。

### 3 号溝状遺構（図 11・12）

調査区北部で検出した、途中で屈曲しながら南北方向へと延びている溝状の遺構<sup>⑦</sup>で、IV 層を掘り込んで作られており、およそⅧ 層上面を底にしている。溝の幅は検出面付近で 1.0 ～ 1.5 m、底面で 0.3 ～ 0.5 m であり、横断面は不整形な逆台形状を呈する。深さは検出面から 0.8 ～ 0.9 m、底面のレベルは標高 7.6 ～ 7.8 m で、中央付近（断面 4 ～ 断面 5 の間）でやや高くなっている。この変化は疊を多量に含むⅧ 層の上面の堆積状況に起因すると考えられる。埋土は大きく 2 層に分けることができるほか、IV 層類似の黒色土が埋土の上層にみられることから、非常に短い時間で埋まった、あるいは埋められた可能性がある。また、断面 5 からは一度掘り直されている可能性が考えられるが、その他の箇所では確認することができなかった。

遺物は、埋土中から土師質土器・陶器などが出土している。体部内面にロクロ目を残すものがみられるため、14 世紀～15 世紀頃の可能性が考えられる。

なお、図 12 中に示した SH78 ～ SH80 は溝が重なっているが、これらは溝が完全に埋没した後に掘られている。

### 4 号溝状遺構（図 11・12）

調査区北部で検出した、南北方向にほぼまっすぐに延びている溝状の遺構で、3 号溝に平行して延び

ているが、南側では3号溝を切っており、3号溝埋没後に掘削が行われている。3号溝と同様に、IV層を掘り込んで作られており、底面は基本的にVII層上面である。ただし、断面1にみるように、北側ではVII層に達していない。また、断面2の東壁の堆積土も他の箇所とは異なっており、この部分も古くは河道であった可能性がある。この付近からは石鏃や土師器、須恵器などが出土しており、流されてきたものと考えられる。1・2層が溝の基本的な埋土と考えられるが、1層の上面は広がりが大きいため、溝の上端での幅は明らかでない。1層下面での幅は0.7～1.2m、底面での幅は0.3～0.5mである。溝の横断面は3号溝と同様に逆台形状を呈する。深さは検出面から0.5～0.7m、2層上面から0.2～0.7mで、底面のレベルは標高7.5～7.7mで南側が低い。3号溝と同様に、底面はVII層の堆積状況に起因していると考えられる。

埋土は基本的に2層に分かれるが、1層の堆積状況から上部は掘り直されている可能性がある。また、調査区北端付近では1層と同様な黒色土が北東に延びているが、掘り込みは明確でない。

4号溝埋土の出土遺物は、土師質土器のほかに、常滑焼と考えられる陶器（図21～189）があり、

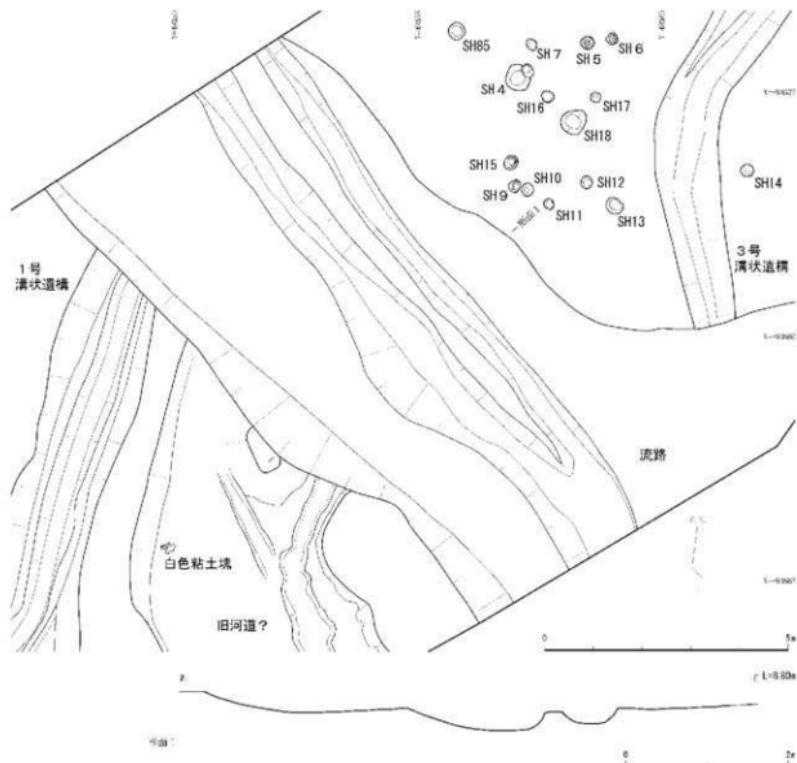


図10 遺構分布図4・流路断面図（分布図S=1/100、断面図S=1/60）

これらの出土遺物から、溝の掘削時期は14世紀後半～15世紀頃と考えられる。

#### 旧河道（図8）

調査区の中央付近で検出した旧河道と考えられる幅の広い溝状の凹みである。北から南へ延びており、流路の下を通じて調査区北側まで続いている可能性が高い。調査時には人工的な溝の可能性も考えて掘り下げを行ったが、明らかにすることはできなかった。検出面付近での幅は4～5mあり、調査区東壁付近では2号溝付近まで延びており、ここまで含めると幅は8m近くになる。ただし、全体に不整形である点や幅の広さなどから、自然の河道であった可能性が高いと考える。調査区壁面の土層（図5）をみると限りでは、埋没過程は1号溝や2号溝と併行していたようである。底から弥生土器の細片がわずか

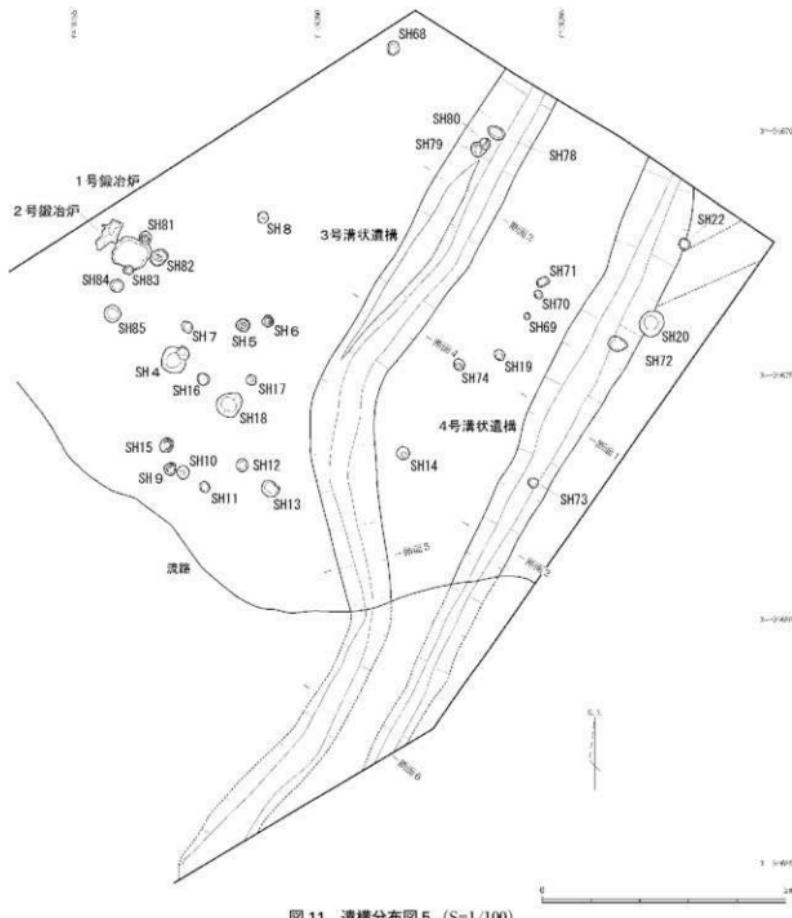


図11 遺構分布図5 (S=1/100)

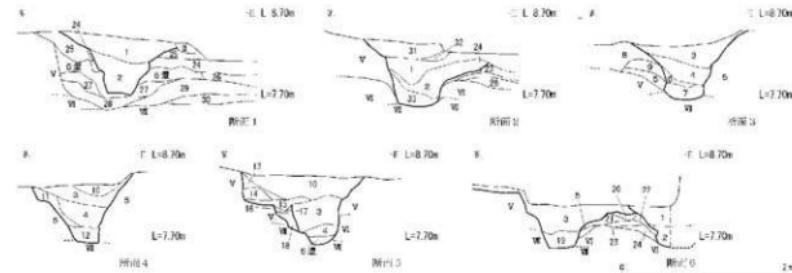
に出てゐるが、その他に目立った遺物がみられないことから、時期的にさかのほる可能性もある。

### 流路 (図 10)

調査区中央よりやや北側で検出した土石流あるいは洪水の痕跡と考えられる自然の流路跡である。流路内には径が10～20cmの礫が密に堆積しており、中には径が50cmに近い礫も含まれている。北から南へ延びており、Ⅲ層の下部に位置している。幅は6m前後で、調査区東側では10m近くまで広がっている。中央部分には幅2m前後で一段凹んだ部分があるが、この部分では特に礫が密集している。調査区壁面の観察から、少なくとも2回は土石流などの災害が起こっていると考えられる。

流路内からは、時期的、種類的に多くの遺物が見つかっているが、特徴的であるのは、多量の鉄滓（図版 21～31）である。鉄滓は、流路の南側を中心出土しているが、付近は銹化が著しく、周辺の礫を巻き込んでいる。鉄製品も含まれていたと考えられるが、原形をとどめていないものがほとんどである。縄文時代の石器も散見することから、これらの遺物の供給源とみられる丘陵上部に縄文時代の遺跡が存在する可能性が高い。鉄滓を除けば、全体的に遺物の風化の度合いが低く、常時水が流れで遺物が水磨されるような環境ではなかったと考えられることからも、この流路が土石流によって形成されたと想定できる。

この流路の形成時期は、国産の染付（図20）を含むことから、少なくとも17世紀以降と考えられる。流路はⅢ層下部に位置づけられるため、Ⅲ層はそれよりも新しい時期に位置づけることができる。



15: 深紅色の葉片。葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。葉の裏面は白く、毛がない。

16: 鮮紅色の葉片。葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

17: 茎葉。葉の裏面は白く、毛がない。

18: 鮮紅色の葉片。葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

19: 街頭の樹木。葉の裏面が白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

20: 鮮紅色の葉片。葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

21: 鮮紅色の葉片。葉の裏面は白く、毛がない。

22: 鮮紅色の葉片。葉の裏面は白く、毛がない。

23: 鮮紅色の葉片。葉の裏面は白く、毛がない。

24: 鮮紅色の葉片。葉の裏面は白く、毛がない。

25: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

26: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

27: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

28: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

29: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

30: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

31: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

32: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

33: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

34: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

35: 枝葉。葉の裏面は白く、葉の先端が2-3mmの鋸歯状で構成される。

図 12-3号：4号灌状遺構土層断面図 (S=1/60)

## (2) 鋳冶炉

調査区北東部の壁際で、近接した2基の鋳冶炉を検出している。残存状況からⅢ層の造成によりいずれも上部が削られている可能性が高い。

### 1号鋳冶炉（図13）

検出面で東西67cm、南北60cm、底面で東西57cm、南北51cm、検出面からの深さ8cmの鋳冶炉である。大きさに対して非常に浅いため、上部は削平を受けていると考えられる。検出面で羽口片が2点（1点は図25-277）出土しているが、鋳冶作業後の廃棄状況を保っている可能性は低い。鋳冶炉の埋土は濃黄褐色土を基本として、一部北東部付近で炭を含む層があるが、炭を充填しているというほどではない。北東部では濃黄褐色土が焼結した部分が壁面沿いにあるほか、それに隣接して鉄滓<sup>③</sup>が出土しているため、輪は北東辺側に設置していたと考えられる。

周辺でビットを検出しているが、鋳冶炉を切っており、建物を復元できるような配置のものはない。

### 2号鋳冶炉（図13）

1号炉の北東側で検出した鋳冶炉である。大きさは検出面で南北69cm、東西18~36cm、底面で南北30cm、東西18cm、検出面からの深さは5cmである。平面形は不整形である点と、炭を多く含む点で1号炉と異なる。一方で、濃黄褐色土を基本としており、焼結部分が壁面沿いにある点は共通している。この焼結部の位置などから、輪は北東側にあったと想定できる。鉄滓状のものが出土しているが、位置は離れている。形状から上部は削平されている可能性が高い。

1号炉と2号炉は位置的に近接しており、また、輪の想定位置などから、同時期に操業していた可能性は低い。IV層上面に近い位置にあるため、15世紀頃の時期が考えられる。

## (3) 白色粘土塊（図13）

調査区中央付近で検出した白色粘土の塊とそれに含まれる礫で構成される。上部の礫（図28-316）は焼けて黒く変色している。この粘土は、VI層の白色粘土質であると考えられる。調査で出土した鉄滓の中には底部や側面に白色の粘土が付着したものが散見される。また、1号鋳冶炉検出面の羽口2点はいずれも他の羽口よりも白味が強い粘土を使用している。これらの状況から、この白色粘土は、鋳冶炉の底部に貼り付けたり、羽口を固定する目的、あるいは羽口の胎土として掘削・採集されたものである可能性が高いと考えられる。理由は明らかではないが、炉や羽口に使用されずに残されたのであろう。

この粘土の周辺からは糸切り底の坏（図14-23・24）や瓦質焼成の甕（図19-140）などが出土している。時期は13世紀後半~14世紀頃であると考えられる。

## (4) ビット

調査区内ではビットを多数検出しているが、建物が復元できる配置になるものは確認できなかった。遺物が出土しなかったものも多く、時期は明らかでない。ただし、溝より南側のビットについては、SH86の底から弥生土器片が出土していることや、土層の堆積状況や立地環境などからも、北側のビット群よりも古いものが存在すると考えられる。埋土内から土器の破片が出土しているものがあるが、それらの多くは破片で底面から浮いた状態にあり、流れ込みである可能性が高いので、ここでは底面から遺物が出土したものを挙げておく。埋土内から破片が出土した遺構としては、他にSH18、SH25、

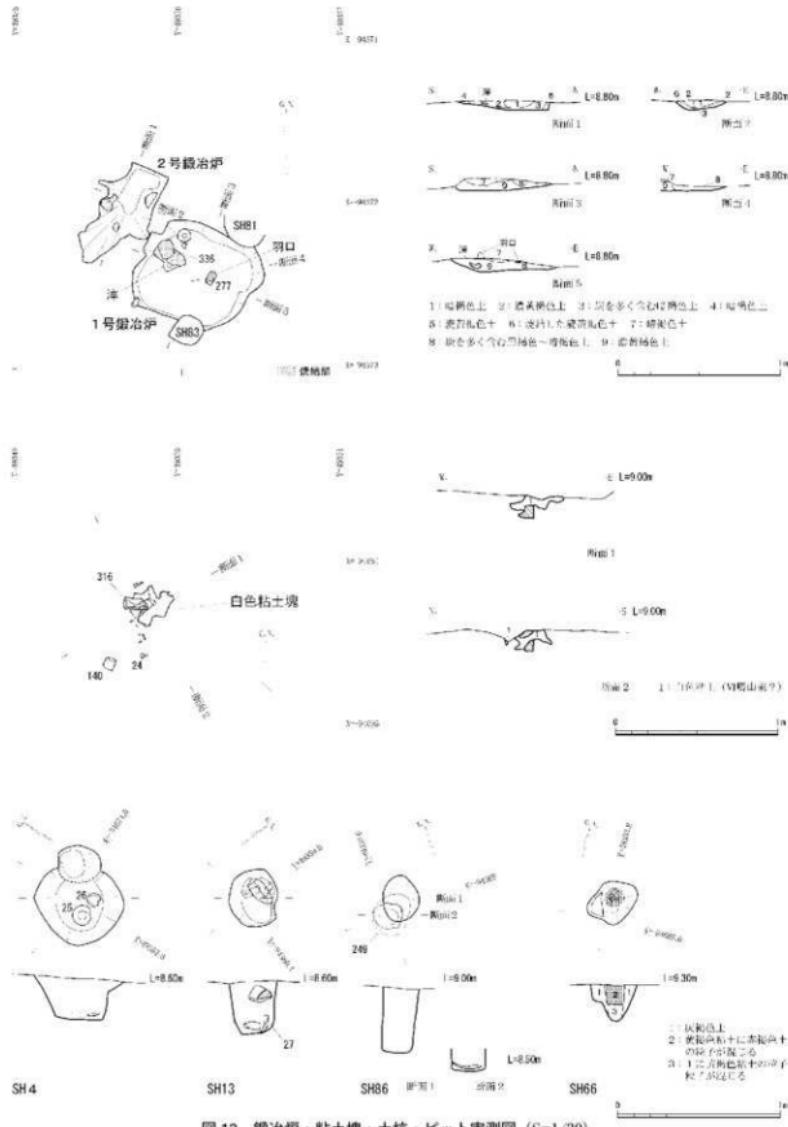


図 13 鍛冶炉・粘土塊・土坑・ピット実測図 (S=1/30)

SH32、SH62、SH64、SH74などがある。このほかに、黄褐色の粘性が強い土が充填された柱穴状のピット SH66（図 13）を検出している。

#### SH 4（図 13）

調査区北側のⅣ層中で検出した、長さ 50cm、幅 47cm、検出面からの深さ 25～27cm の土坑である。底面には土師質土器 2 点（図 14～25・26）が置かれていた。14世紀～15世紀頃のものと考えられる。埋土は暗灰褐色土である。調査区北側のピットや土坑の多くは類似しているので、これらは SH 4 と近接した時期のものであろう。

#### SH13（図 13）

SH 4 と同様に、調査区北側で検出した、長さ 35cm、幅 30cm、検出面からの深さ約 30cm のピットである。埋土内には上層に礫が、底面に礫と土器が落ち込むような形で出土している。

#### SH86（図 13）

調査終盤に検出した、長さ 27cm、幅 21cm、検出面からの深さ 40～50cm のピットで、垂直軸は北東方向にずれており、斜めに掘り込まれている。底には弥生土器の胴部片（図 24～249）が内面を上にして置かれていた。弥生時代に掘削されたピットの可能性がある。埋土は黒褐色土の単層で、柱の痕跡などは確認できなかった。

#### SH66（図 13）

調査区南側で検出した、長さ 32cm、幅 25cm、検出面からの深さ 22cm のピットで、西側は段を有する。また、中央には径約 13cm、深さ 12cm の粘性の強い黄褐色土が充填されていた。

### 第3節 出土遺物

#### （1）土器・陶磁器

##### 土師質土器（环・小皿）（図 14～16）

図 14～図 16 は土師質土器の环・小皿である。本報告で図示した資料の多くは破片・小片であるが、ここで図示していない細片も多く、本来の個体数はさらに多かったと考えられる。

1～16 は 1 号溝および 2 号溝の埋土上層から出土した土器で、1～12 は底部系切り、13～16 は底部ヘラ切りを行っている。15・16 の底部外面には圧痕が残る。环の多くは破片であるが、体部にロクロ目を明瞭に残す資料はみあたらない。14～16 は底部内面に仕上げのナデがみられる。17～19 は 3 号溝出土の环で、底部はいずれもヘラ切りを行っている。17・19 は内面にロクロ目、17 は底部外面に圧痕が残る。特に 19 は工具を用いているためか、ロクロ調整による螺旋状の凹みが稜をもっている。21～22 は 4 号溝出土の环で、20 は外面、21 は内・外面、22 は内面にそれぞれロクロ目が顕著に残る。20 はロクロ目の間に平坦な部分があり、一度整形した後に意図的に凹凸をついていると考えられ、このほかにも、ロクロ目を顕著に残すものの中には同様な資料が散見される。

25～43 は各遺構内および遺構埋土出土の环・小皿であるが、23・24 は遺構付近から出土したものである。白色粘土塊周辺から出土した 23・24、流路内出土の 39・40 が系切りである以外は、すべて底部にヘラ切りを行っている。25・27・28・30・31 は外面に、29 は内・外面にロクロ目を残すが、27 を除く資料はロクロ目の凹凸が顕著である。特に 29 の内面のロクロ目は後を持つことから、調整に工具を用いていると考えられる。このほか、25・29 の底部外面に板目の圧痕が残る。また、26 の底部内面に仕上げナデが



图 14 土師質土器(环・小皿)実測図 1 (S=1/4)



図 15 土師質土器(環・小皿)実測図 2 (S=1/4)



90~117: 泥合器(Ⅲ・Ⅳ期)出土

119~121: Ⅱ層出土

122~131: 滝丘区出土

0 20cm

図 16 土師質土器(盆・小皿)実測図 3 (S=1/4)

みられる。

44～131は包含層・Ⅱ層・調査区内出土の資料である。44～57・130・131が糸切りで、それ以外は底部にヘラ切りを行っている。ヘラ切り底の中で、62・73・76・90・96・127に板目の圧痕が残る。また、58～62が内・外面に、63～69・122～124が外面に、71～81・83・126が内面にロクロ目が残り、60と64の内面・67～69・72・80・122を除くといずれも凹凸が顕著である。特に73～83は内面のロクロ調整時に工具を用いている、あるいはその可能性が高い。

土師質土器の坏・小皿では、以上のような特徴のほか、底部内面や外面に最終調整時の直線的なナデを施しているものもあるが、数的には少数である。また、底部切り離し時に粘土が周囲にはみ出したり、26にみられるように、切り離しの技術が粗いためか斜めに切り離している例もみられる。色調や胎土はおよそ類似しているが、色調が大きく異なるものがわずかに存在している。色調では淡い灰黄褐色系の色を呈するものがほとんどである中で、16・35・68・123が橙褐色系、37・45が灰褐色系の色を呈しており、異なっている。45については作りも他のものと比較すると薄手である。これらについては搬入品の可能性がある。

本遺跡で出土した土師質土器は、形態的なバリエーションがみられるため、その特徴から編年できる可能性もあるが層位的な検証が難しいため、ここでは行わない。ただし、1号溝・2号溝埋土上層の資料が土師質土器の中ではもっとも古く位置づけられるので、底部切り離し技法は別として、その形態を参考にすると、底部と体部の境界が明瞭なものからあいまいなものへの変化を想定しておきたい。また、体部にロクロ目を残すものも、指押さえの痕跡がゆるく残る程度のものと、平坦部が広くなり、凹みが少なく工具を用いて明瞭な段を形成しているものがある。都城市都之城跡では、体部外面の指押さえの痕が残るもののが14世紀後半頃～15世紀にかけて出土しており（都城市教育委員会1991）、大分県大分市の豊後府内遺跡では内面に工具を用いたロクロ目をもつものが15世紀の終わりから16世紀頃（大分県教育庁埋蔵文化財センター2006）の目安にされている。時間的・空間的な距離の隔たりは大きいが、これらの状況を考慮すると、本遺跡出土の資料からは、ロクロ調整時の技法として、体部外面指ナデ→体部内外面指ナデ→体部外面指ナデ・内面工具ロクロ目→体部内面工具ロクロ目のような変化の方向性が考えられる。

土師質土器の時期については、Ⅳ層を本遺跡の生活の中心として捉えると、後述する出土陶磁器などから13世紀～15世紀頃のものであると考えられる。遺構に伴う資料は25～27のみであり、ほかの多くは包含層からの出土であることに加えて、Ⅲ層が整地層である可能性が高く層位的な編年は難しい。古い1号溝・2号溝埋土上層の土師質土器を基準とすると、これらの土器と包含層に含まれる土器とで最も異なるのは底部切り離し技法で、前者は糸切り、後者はヘラ切りが多数を占める。宮崎県内では、12世紀中頃に糸切り底が導入され、都城市以南では普及するが、西都市以北ではヘラ切り調整が残ったままで、宮崎市周辺では両者が混在していることが指摘されている（岡本2004）。糸切り底のものが搬入品である可能性もあるが、その可能性は低いと考えられる。このことから、土器の時期は仮に古くさかのぼっても12世紀中頃である。出土した陶磁器の時期を評価するならば、一度底部の糸切り技法を導入したものの、13世紀後半～14世紀前半には再び底部ヘラ切り技法に戻ったと想定できる。

一方、下限については、内面・外面にロクロ目を残す坏が目安になり、16世紀にまで下る可能性があるが、およそ15世紀代と考えられる。ヘラ切り底という技術的な特徴から、本遺跡で出土した



図 17 その他坏等実測図 (S=1/4)

資料は在地品である可能性が高い。

#### その他坏類 (図 17)

図 17 - 132 ~ 139 は、その他の坏などであるが、136 のみ陶器である。132・133 は黒色土器で、133 は内面にのみ炭素を吸着させているが、焼き締めの状態はよい。132 は「ハ」字状に開く短い高台を貼り付けており、粘土の接合を明瞭に観察することができる。133 は拓本による図示をしていないが、底部外面には糸切り痕がみられる。132 は 1 号溝と 2 号溝の合流地点の底面から出土しているが、10 世紀頃のものと考えられる。133 については、小片であるため、帰属時期は明らかでない。134 は細片であるため、全体の形状は明らかでないが、短い逆台形状の高台をもつ坏と考えられるものである。内面は灰色に近く、外側は黒味を帯びている。古代のものである可能性がある。135 は形態が不明であるが、胎土・焼成などが土師質土器に類似するため、ここで挙げておく。外側はナデであるが、細かな点状の凹みが存在しており、調整に伴う痕跡と思われる。内面には當て具状の痕跡に似た凹凸がみられ、欠損箇所には穿孔が施されているのを確認することができる。土器ではなく、土製品である可能性もある。136 は淡い緑色系の自然 Z がかかった、山茶碗と考えられる瀬戸系の陶器である。底部外面には糸切り痕がみられる。13 世紀後半頃のものと考えられる。137・138 は合子と考えられる。逆「L」字状に口縁部が短く屈曲している。137 は口縁部の上面に二条の凹線状の浅い凹みが巡るが、138 は平滑に納めている。137 の底部外面には糸切り痕を確認することができる。138 は表面に炭素を吸着させているためか黒色を呈しているが、焼き締めの状態は良い。管見では類例が見あたらなかったため、帰属時期は明らかでない。細片で図示していないが、別個体とみられる同様な資料がみられるため、在地のものとすれば、137 が糸切り底であるため、13 世紀頃のものと考えられる。139 は岡山県津寺遺跡（岡山県古代吉備文化財センター編 1994）で多くみられる小型鉢あるいは脚台に類似している。底部は糸切りである。13 世紀～14 世紀前半頃と考えられる。

#### 瓦質土器（甕・鍋・釜類）(図 18)

図 18 - 140 ~ 158 は 158 を除いて、表面に炭素を吸着させた瓦質焼成の土器である。IV 層を中心として出土しているが、土師質の 158 のみ流路出土である。140 ~ 143 は、外側に平行タキキを有する甕の破片である。内面の大部分は剥離しているものの、一部でハケメを確認することができる。外側の風化度はそれほど強くないため、内面の著しい剥離は、使用方法と関係している可能性がある。144 ~ 150 は外側に格子目のタキキを有する甕である。タキキの他に、一部にハケメが施されている。内面はハケメ、またはその後ナデを行っている。このような表面に格子目のタキキをもつ瓦質土器は、高鍋城の調査（宮崎県埋蔵文化財センター編 2009）においても出土している。151 ~ 153 は鍋の破片と考えられる。内面は全体に粗いハケメを施したのち、口縁部のみナデ消しており、頸部には稜をもっている。154 は片口鉢の注口部の破片である。155 ~ 158 は釜であるが、158 のみは土師質焼成であり、形態とともに他の 3 点とは異なっており、体部から鋤まで直線的に延びてきた後、口縁部はやや丸く収めている。155・156 は口縁部外側に明瞭な段を持ち、河内型（奥井 2007）とされる釜に類似した形態である。鋤よりも上部の小破

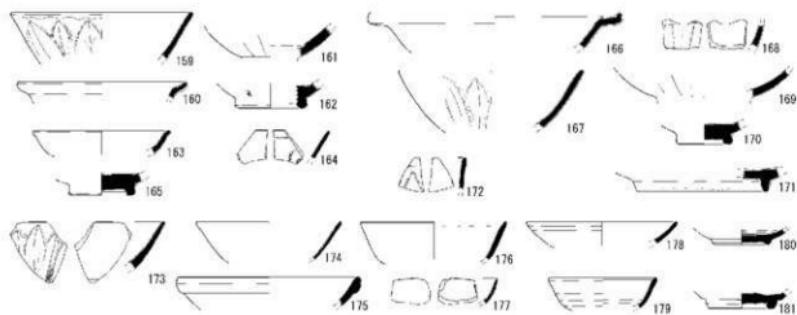
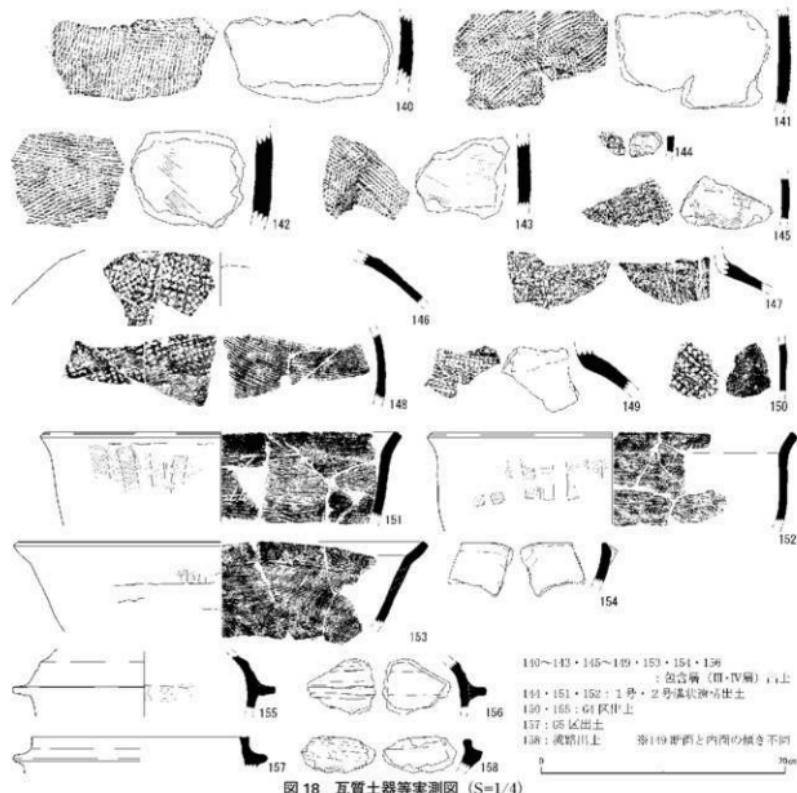


図 19 磁器実測図 1 (S=1/4)



図20 磁器実測図2 (S=1/4)

片であるため、河内型の特徴とされる外面のケズリなどは確認できない。157は口縁部が短く、端部はやや凹む。瓦質土器については、ここで図示した以外にも、同一個体の可能性がある破片が出土している。

#### 磁器 (図19・20)

図19～159～173は青磁、174～181は白磁、図20は染付である。159～173は龍泉窯系の青磁と考えられる。160・166・171が壊、163は浅形椀か皿と考えられるほかは、椀と考えられる。また、159・161・162・167・169・172・173には外面に萬葉文あるいは蓮弁文の一部がみられるほか、164は内面に草花文と考えられる文様がわずかに確認できる。また、171の内面には、わずかであるが貼付文の可能性がある突部がある。そのほかは無文である。166が明るい褐色であるほかは、濃淡はあるもののおおよそ青味がかった緑色を呈する。大宰府編年の指標の柱となっている底部については、162・165・170はいずれも高台疊付と内部が露胎しており、底部は内厚であり大宰府分類II類の特徴を有している。171は高台が細く、端部を周辺の釉は搔き取られ、露胎部との境界付近は褐色を呈しており、大宰府分類III類の特徴を持っている。出土した青磁のほとんどは大宰府分類II類・III類に属すると考えられ、時期的には13世紀から14世紀初頭に該当する。これらの中で、159については胎土が他のものに比べ粗く、釉も不透明に近い点から大宰府分類IV類に属する可能性がある。ただし、蓮弁の簡略化は進んでいないことと、1号溝埋土上層から出土しているため、時期的にはさかのほる可能性がある。

一方、174～181の白磁は、174～176・179・181が椀、177・180が皿、178が碗または皿と考えられる。釉の色調は、175が白色、178・180がわずかに青味がかった白色であるほかは、174・176・179・181がやや青味がかった暗い白色を呈している。174・176・179はいわゆる「口禿け」で、大宰府分類IX類にあたる。174・176は露胎部と釉の境界付近が淡い明褐色を呈し、179は破片下位が露胎している。175は口縁部が玉縁状を呈し、大宰府分類IV類にあたると考えられる。177は破片下部に沈線状の段をもち、ほかの白磁よりも透明度の高い釉がかかる。小片のため明らかでないが、大宰府分類XI類の可能性がある。178については、小片で該当する分類は明らかでない。180は底部内外面が露胎しており、破片の上部付近にわずかに釉が確認できる。181は底部内面蛇の目釉剥離しており、残存している底部はすべて露胎し橙褐色を呈する。底部の整形は鋭く、外面見込み部には調整時の痕跡と考えられる凹みが巡る。181は新垣・瀬戸の福建・広東系白磁E類（新垣・瀬戸2005）に該当すると考えられる。以上のように、出土した白磁には時期的なばらつきがみられ、11世紀後半～16世紀までと幅広い時期に該当する。

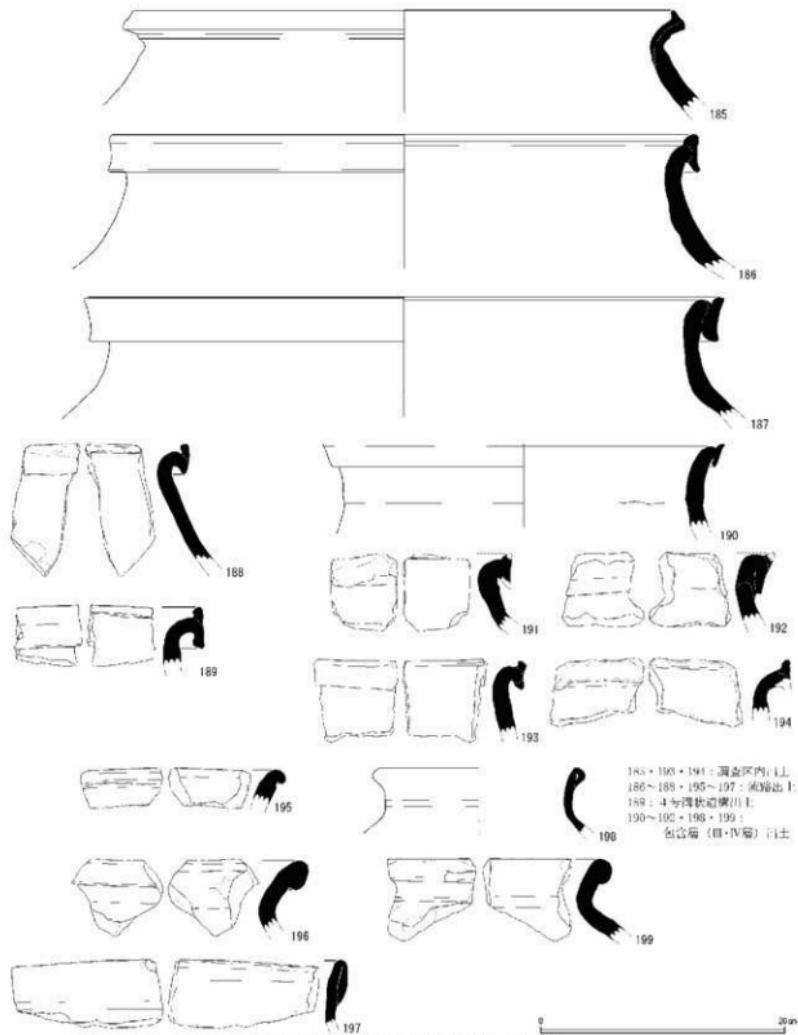
182～184は流路から出土した染付の椀である。182は内面無釉である。183は高台内にわずかに文様がみえる。ここで図示した以外にも、各種磁器の細片が出土している。

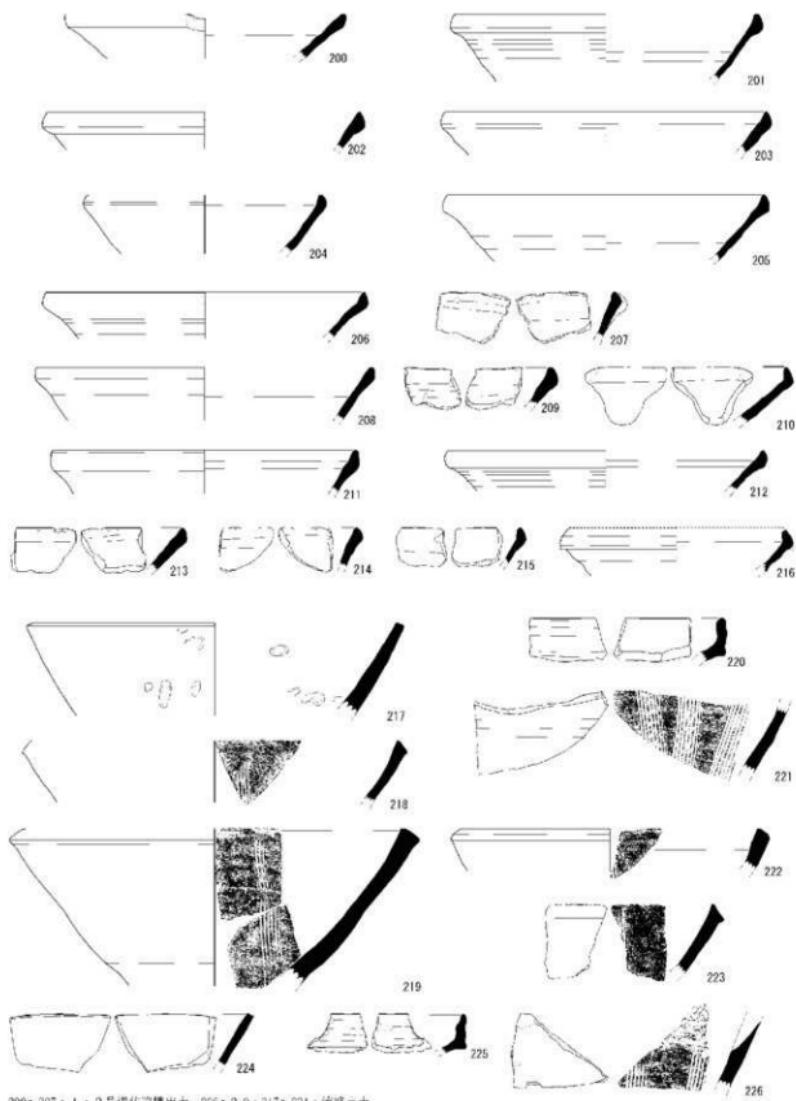
#### 陶器・中世須恵器 (図21～23)

図21～185～199は壺・壺、図22～200～226は片口鉢・擂鉢である。185～194は常滑焼で、流路以外では造構に伴うものは189のみである。185が口縁部を「L」字状に上方へ拡張し、188が「N」字状を呈し、192が拡張した口縁部が頸部と一体化している以外は、口縁部を「T」字状に上下に拡張したものである。色調は若干バリエーションがみられる。185～188は褐色に緑色系の自然釉がかかるが、188は釉の厚さは薄い。189は内面が暗灰褐色、外表面は淡橙褐色、同様に194は内面暗褐色、外表面淡橙褐色と内外面で色が異なる。190は須恵器に似た暗青灰色、191は黄褐色、192は灰褐色である。193は暗赤

褐色と、他のものに比べると大きく色が異なる。時期的な要因のほかに、窯、産地などの要因が考えられる。これらの資料は、口縁部の形態から、13世紀後半～15世紀前半に位置づけることができる。

195～199は備前焼であるが、色調と形態差が大きい。195は玉縁状に口縁を折り返すが、折り返しきれておらず、沈線状の凹みがみられる。色調は黄灰色である。196は暗赤褐色で、口縁部を玉縁状に大き





200~207: 1・2号横状縫構出土 208~216・217~221: 波端凸十  
217~218、222~224: 波谷縫(Ⅳ部)出土 225、226: 蔵内出土上

图 22 陶器・中世須恵器等実測図 2 (S=1/4)

く折り返す。197は赤褐色～淡赤褐色で、口縁を大きく折り返して肥厚させている。198は須恵器に似た青灰色で、口縁部を短く折り返してわずかに肥厚させおり、折り返しが明瞭に観察できる。199は黄灰色を呈し、他のものに比べると軟質である。口縁部は玉縁状に折り返して肥厚させる。形態的特徴から、時期は14世紀～15世紀頃に位置づけられる。

200～216は東播系須恵器の片口鉢で、200～207は1号溝・2号溝埋土上層、208～210は流路、211～216が包含層（Ⅲ・Ⅳ層）から出土している。他の器種に比べると、1号溝・2号溝埋土上層からの出土数が多い。これらには口縁端部の整形や釉の状態に差がみられる。200～202・208は端部をヨコナデするが、上方への拡張は弱く内面は平坦に近い。203～205・209・211～214は端部を強くヨコナデすることで、ねあげるようにして端部を上方へ拡張させている。206・207・210・215・216は端部を「L」字状に折り曲げて上方への拡張を行っており、216は欠損しているものの下方への拡張もみられる。重ね焼きの痕跡を示す口縁部の釉については、203・209・215は薄く、207・208・214・216は濃く、そのほかは釉がみられない。色調では多くは青灰色系の色をしているが、210のみ黄灰色を呈し、やや焼成が弱いようである。口縁部の形態などから12世紀末頃～14世紀後半頃に位置づけられよう。

217～226は備前焼の鉢であるが、流路以外遺構に伴うものはみられない。色調としては赤褐色系のもの（218・219・226）と青灰色系のもの（217・220・222・223・224・225）がある。ただし、223や

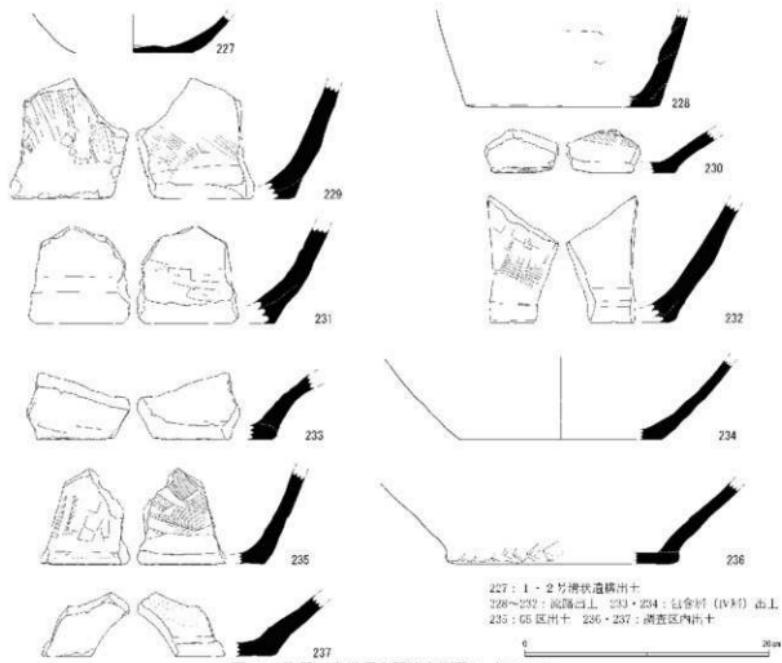


図23 陶器・中世須恵器等実測図3 (S=1/4)

225の断面は赤褐色を呈する。また、221は全体に鉄錆が付着しているためか、外面は褐色であるが、内面は黄灰色を呈している。形態的には、217・224のように内面に鉗し目を持たない可能性をもつものから、220・225のように端部を上方へ拡張させたものまであるため、13世紀～16世紀の時期が考えられる。

図23～227～237は須恵器・陶器の底部である。図21・22で示した常滑焼や備前焼の底部が考えられるが、接合しないため明らかでない。237には内面に緑色の釉が見られ、常滑焼の底部であると考えられる。このほか、図示していないが、胴部と考えられる資料も出土している。

#### 古墳時代以前の土器・須恵器（図24）

図24～238～266は古墳時代以前の土器である。258を含む須恵器については、古代に属するものもあるが、時期的には古墳時代に後続する時期のものであるため、ここで扱っている。238～242は繩文時代晚期土器で、238は孔列文、239は刻目突帯文を施し、240～241は無文である。238は孔が貫通していないほか、孔上部に突帯状の隆起がわずかにみられる。243～251は弥生土器である。243・244は逆「L」字状の貼付口縁をもつ中期前半頃の壺、245は後期の二重口縁壺の口縁である。246～249は前期末～中期前半頃の壺・壺の胴部で、246は3条以上のヘラ描沈線を、217・248は刻目突帯を施す。249は胴部中央に4条のヘラ描沈線を巡らせるほか、上半には縦位にやや粗い櫛描文を施す。250・251は3条の貼付突帯を巡らせており、中期の壺胴部と考えられる。252は高杯で、下方にやや聞く脚部から屈曲してさらに裾部へ広がる。脚部下半の四方に外側から穿孔を施している。脚部内面下半分は上半より厚く粘土を付加しており、この部分にはケズリを施している。杯部と脚部は別作りで、接合部は擬口縁をなす。弥生時代後期後半～古墳時代前期に属すると考えられる。253・254は土師器の壺・壺と考えられる資料であるが摩滅が著しい。255～258が須恵器であるが255・256が壺、257・258が壺蓋である。256は焼成が土師質に近い。258は7世紀代のものと考えられるが、他は細片のため時期はあきらかではない。259～266は弥生土器あるいは土師器の底部と考えられる資料である。このほかにも弥生土器の細片が比較的多く出土している。

#### （2）土製品（図25）

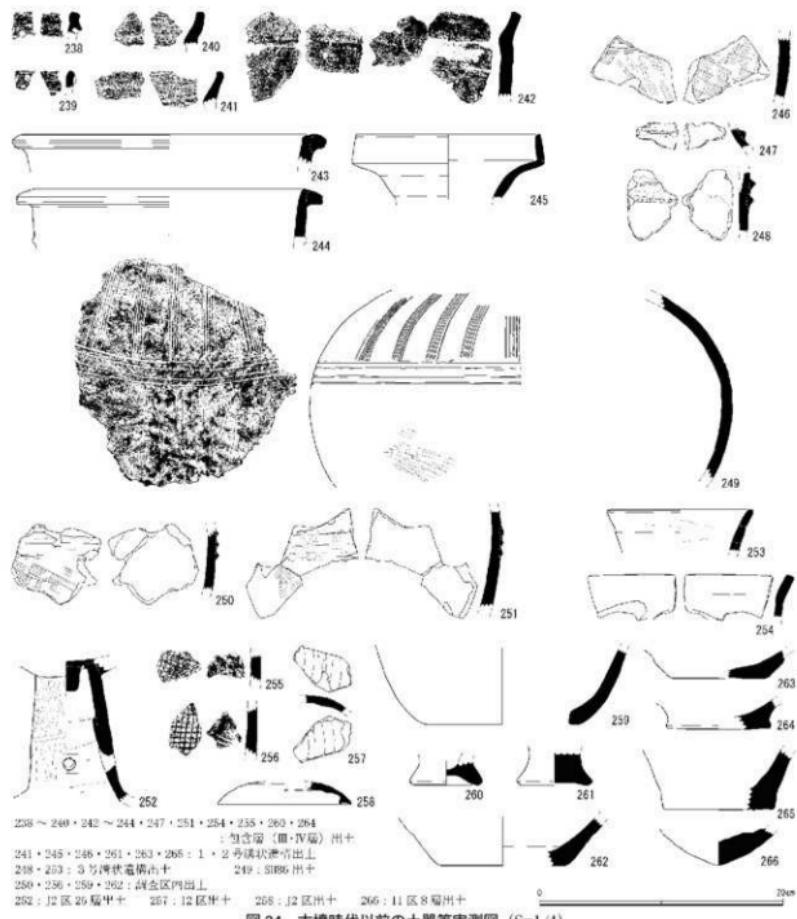
図25～267～276は土鍤で、267～269が100～150gの大型、270～276が5g前後の小型品である。遺跡の近くに小丸川や日向灘があるので、漁労対象によって使い分けていると考えられる。流路を除くと、大型品・小型品ともに確実に遺構に伴うものはない。

277～289は輪の羽口片で、277が1号鍛冶炉検出面であるほか、278～282が流路から出土している。ほとんどが先端付近の小片であり、全体を復元できるものはみられなかった。その中で、279は先端部分のみであるがほぼ完全に復元することができた。羽口先端部に滓が付着したもの（278・279・280・282・288）やガラス質に変化したもの（287）、先端が熱により細かく発泡したような状態のもの（285～287）などがみられる。特に278と279は付着している滓の量が多い。このような先端部の状態の違いは、温度や作業時間の長さの違いに起因しているものと考えられる。このほか、羽口自体の胎土には、スサを混ぜたもの（283・285）、細かな白色砂粒を多量に含むもの（288）などがみられる。また、284の内面には、糊痕と考えられる痕跡が残っている。色調はほとんどが橙褐色系で類似しているが、277のみ白味を帯びている。VI層とした白色粘土を用いている可能性がある。これに加えて277の厚さは、ほかのものにくらべて2cm程度厚くなっている。技術的な差異がみられる。

羽口片は1号鍛冶炉のほか、IV層内からも出土しているので、14世紀～15世紀を中心とする時期にこの付近で鍛冶が行われていたと考えられる。図示したほかにも、羽口の細片が多く出土している。

### (3) 石器・石製品 (図26～29)

図26～289～292は滑石製石鍋の破片と再加工品である。289・290は石鍋の形状を保っているが、それぞれ一方の破面に壓痕と考えられる整形痕がみられるため、加工を行う途中であった可能性がある。291は、一面を除く他の面に何らかの加工が施されており、図正面には花文が陽刻されている。図の花文の左側にも花文を刻もうとした痕跡が残されている。裏面には摺り切ろうとしたためか、溝状の加工



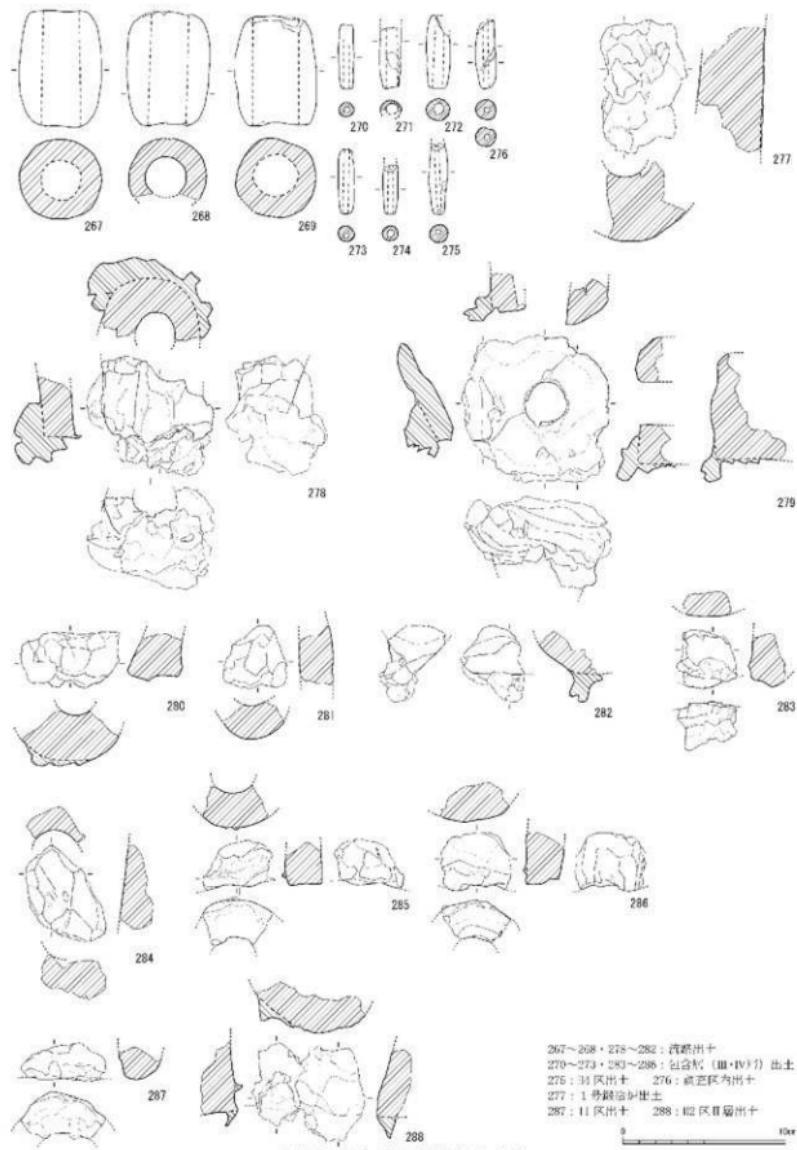


図 25 土錘・羽口実測図 (S=1/3)

267~268・278~282: 洗掘出土  
 270~273・283~286: 包含物 (III・IV) 分出土  
 275: 31 区出土 276: 痛苦区内出土  
 277: 1 号鍛冶炉出土  
 287: 11 区出土 288: E2 区Ⅱ層出土

0 10cm

痕が残っており、側面はきれいに研磨が施されている。このほか、正面と左側面部分には穿孔が途中まで施されている。この用途は明らかでないが、花文が陽刻されていることからスタンプのような機能を持ったものであると考えられる。瓦器などには花文が押されているものがみられるが、それらの原体は本資料とは花文の突部が逆転しているものが多いようである。293は上部に穿孔が施されており、温石であると考えられる。破面と裏面の凹んだ部分を除いて、各面に研磨が施されている。

293は碧玉製の管玉である。片側から穿孔が施されている。流路上面で出土したが、遺存状態は良好である。丘陵上の持田古墳群に関係するものと考えられる。294は四基式のチャート製石鏡である。J区のII層から出土しているが、遺存状態は良い。295は姫島産黒曜石の楔形器削片と考えられる剥片である。296は南九州産黒曜石の分割砾である。二重バティナがみられ、正面の割れは比較的新しいが、その他の面はかなり風化が進んでおり、剥離に時期差が存在している。

297～299は砥石である。299は製作時の痕跡が残っている。この他にも図示していないが、砥石の小片が出土している。300～303は石斧である。300が打製石斧である以外は、蝶を利用してしたものである。304・305は石錘である。304は風化が著しい。306は砥石である。全体が赤変しており、被熱後に使用をおこなっており、研磨面は赤変部分が消失している。309は横長剥片に形状が似た剥片であるが、剥離の方向が異なる。図の上辺に調整剥離が細かく行われている。弥生時代の石庖丁素材の可能性があ

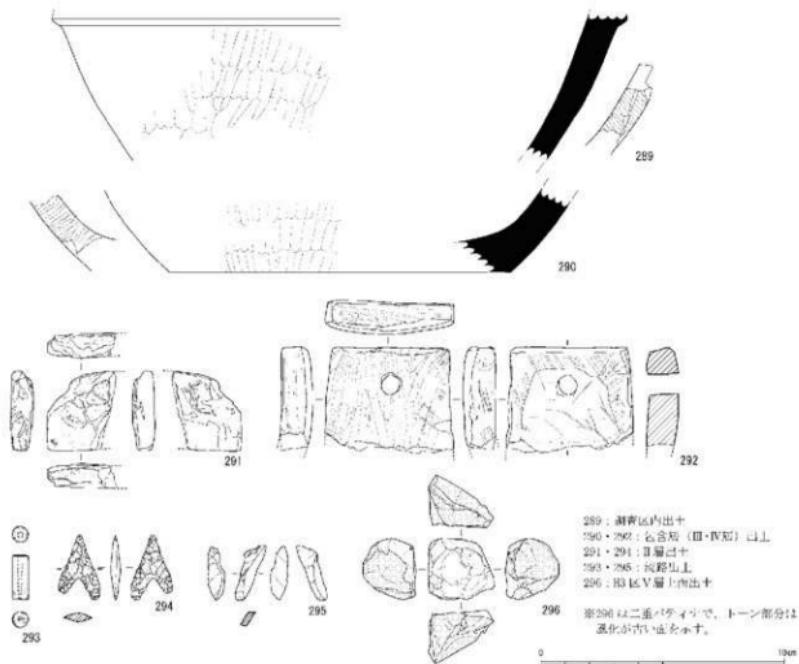
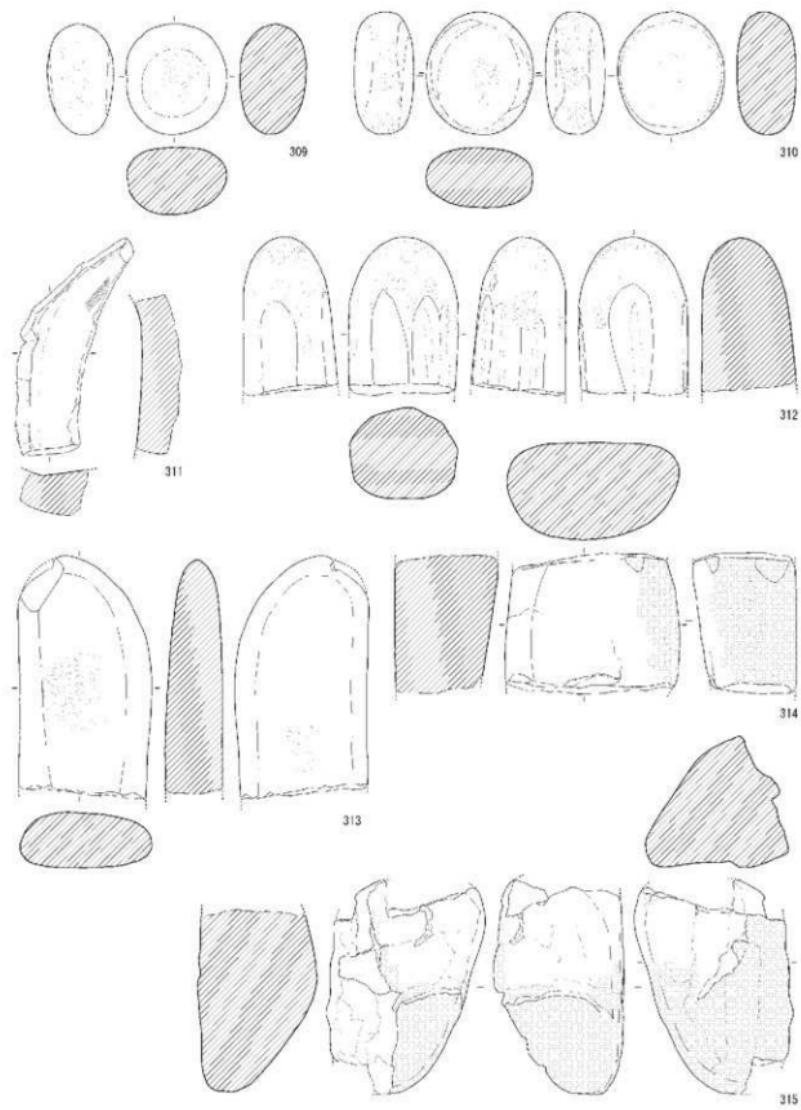


図 26 石器・石製品実測図 1 (S=1/2)



図27 石器・石製品実測図2 (S=1/3)



309～311・313～315：鉄錆出土  
312：CSⅢ～IV層出土

図28 石器・石製品実測図3 (S=1/4)

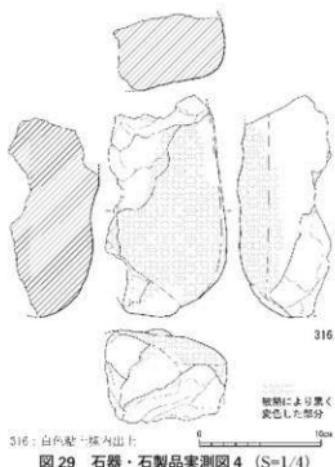


図 29 石器・石製品実測図 4 (S=1/4)

る。308 が石核、309 が凹石、310 が磨・敲石、311 が石皿破片、312 が砥石、323 が台石、314 ~ 316 が焼けた礫である。312 は幅 3cm 程の研磨面が 6 面あり、うち 4 面には中央に幅 0.5cm 程の溝状の凹みがみられる。316 は白色粘土塊中の焼けた礫である。図正面が被熱して黒変している。

#### (4) 銅銭 (図 30、図版 21)

317 は 3 枚が銹着したまま出土している。図正面の孔部には材質不明の物質が銹着している。間の 1 枚の銭種は確認できないが、その他は「元豊通寶」(初鑄 1078 年)と「元祐通寶」(初鑄 1086 年)の宋銭である。318 も「元豊通寶」である。319 は銭種不明であるが、下部に「元」の文字が確認できる。上部の文字については、判読が困難である。このほか、319 と同一地点で出土した、2 枚が銹着した資料 (図版 21 ~ 320) が出土しているが、劣化が著しい。銘は判読できないため銭種は不明である。写真表側の 1 枚には表面に鋳造時の模と考えられる細かな穴が多数観察される。

調査区北側のⅢ層から出土している 319 を除くと、いずれも調査区北西壁付近の 2 号溝上層から出土している。318・320 は同一地点出土で、それより 70cm ほど離れた地点で 317 が出土している。

#### (5) 鉄器 (図版 21)

流路から出土している資料の多くは、周辺の礫を巻き込んで銹化しており、原形をとどめていないものがほとんどであった。また、流路以外の出土品で圓化に耐えうる資料はほとんど出土していない。図版でしめした資料も銹化が著しく、原形をとどめているものは少ない。図版 21 ~ 321 ~ 327 は釘あるいは棒状の鉄製品、327・328 は刀子片と考えられる。329 は銹化が著しく器種は不明であるが、下刃が刃部状に薄くなっている。縦断面は三角形を呈している。横断面は隅丸方形であり、手斧などの工具の可能性がある。

鉄滓が多く出土しており、製作対象物が出土することが期待されたが、以上のようにそれを明らかにするような資料は出土していない。

#### (6) 鉄滓 (図版 21 ~ 32)

鉄滓のみで 200 点以上出土しているが、その多くは流路出土で遺存状態は良くないものが多い。ここでは比較的遺存状態の良いものをピックアップして報告を行うこととする。331 ~ 334 が 1 号・2 号溝状遺構、335 が 3 号溝状遺構、336 が 1 号鍛冶炉、337 が 2 号鍛冶炉周辺、338 ~ 464 が流路、465 ~ 481 が包含層など出土の資料である。

今回の調査で出土した鉄滓は形状からほとんどが鍛冶滓であると考えられる。形態的に幾つかの種類に分類できるが、特徴的なものとして、白色の粘土が底部などに融着したもの (331・338 ~ 360・466 ~

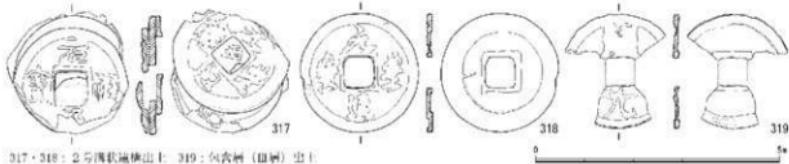


図30 銅銭実測図 (S=1/1)

468・472～471)、鍛冶作業を続けて2回行ったため2つの洋が上下に融着したもの(358～380・468・475)がある。358～360と468には両方の特徴が認められる。全体の大きさをみると、長さが7～8.5cmと9.5～10.5cmに量的なピークがみられる。幅は7～7.5cmが最も多く、それより離れるにしたがって漸移的に減少する。厚さは3～3.5cmが最も多く、その前後の2～5cmまで一定数みられる。重量は200～300gが最も多く、その前後の100～500gも安定してみられるように、重量の幅は広い。また、流路出土の鉄滓の方が、遺構や包含層などから出土しているものよりも大きめの傾向がある。大きさや形状は鍛冶を行う際の時間や温度に関係しており、それは対象となる鉄器や鍛冶の内容と密接に関係していると考えられる。大きさ的には一定の範囲内に多くがまとまるものの、重量の幅や、392のような小型のものから481のような大型のものまで存在することから、対象となる鉄器やその作業内容が幅広いものであったことが想定できる。

#### (注)

- (1) 調査時は基本的に検出した順番に遺構番号を振って区別を行った。遺構名と調査時の略号は以下の通りである。  
1号溝状遺構: SE01 3号溝状遺構: SE76 1号鍛冶炉: SP03 白色粘土塊: SP02  
2号溝状遺構: SE01 4号溝状遺構: SE77 2号鍛冶炉: SP75 流路: 略号なし  
溝または流路: SE01 (遺構名: 調査時略号)  
※1号溝、2号溝、溝または流路については、調査途中まで関係が明らかでなかったため、グリッド名と座標によって遺物の区別を行った。  
また、ピット・小土坑については調査時の略号そのまま使用している。
- (2) 図11の3号・4号溝平面図は調査時の最終掘削時の状況を示すため、検出面の形状などにおいて土層断面図と一致しない部分がある。
- (3) この鉄滓については、担当者の不注意により整理作業段階で大量の鉄滓に紛れてしまい、今回報告することができなかった。

#### (引用・参考文献)

- 新垣 力・瀬戸哲也 2005「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 附:14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『沖縄埋文化財センター』3 沖縄県埋文化財センター
- 大分県教育埋文化財センター 2006「豊後府内遺跡1」大分県教育埋文化財センター調査報告書第8集
- 岡山県古代吉備文化財センター編 1994「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9 三手遺跡・津寺遺跡」岡山県埋文化財発掘調査報告書90 日本道路公团広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 奥井智子 2007「畿内における土製煮沸具の様相」『中世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の編年」
- 太宰府市教育委員会 2000「大宰府条坊跡XV・陶磁器分類編」
- 中世土器研究会編 1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
- 都城市教育委員会 1991「II.都之城跡(主郭部)」「平成二年度 遺跡発掘調査概報」
- 水井久美男 2002「新版 中世出土鉢の分類図版」高志書院
- 真壁忠彦 1991「備前焼」考古学ライブラリー60 ニュー・サイエンス社
- 宮崎県埋文化財センター 2009「高鍋城三ノ丸跡」宮崎県埋文化財センター発掘調査報告書第186集

## 第Ⅳ章 総括

### 第1節 遺構からみた東光寺遺跡の変遷

今回の調査によって、4条の溝状遺構と2基の鍛冶炉を検出した。これらの遺構は遺物や埋土の堆積状況などから、1号溝→2号溝→3号溝→4号溝の順番で掘削が行われていることが明らかとなった。ただし、掘削時期と埋没時期には大きな差がみられる。1号溝・2号溝は10世紀頃に掘削され、14世紀前半までの長い時間をかけて埋まっている。埋没の最終段階である13世紀～14世紀前半以降、人々の活発な生活の痕跡を遺物より確認することができる。この時期に、轆の羽口や鍛冶炉の炉底に貼り付けたと考えられる粘土の塊がみつかっているので、この頃には鍛冶が行われていたことがわかる。一方、3号溝と4号溝は14世紀～15世紀頃に掘削されたと考えられるが、それほど時間を経ることなく埋没あるいは埋め戻されていることが明らかとなった。1号・2号鍛冶炉との時間的関係は明かではないが、3号溝・4号溝のいずれかあるいは両方に時間的に併行していると考えられる。

これらの溝状遺構の性格については、1号溝は河道から徐々に離れるような形で掘削されており、水路などの可能性が考えられる。延長線上およびその周辺に水田や畑があったものと考えられる。2号溝は谷筋の延長線に位置づけられるので、谷筋を流れる小川の導線として位置づけられよう。溝の下層には疊が厚く堆積しており、大雨による台地側からの出水の影響などが考えられ、その制御の意味があったと想定される。この疊層や流路などから、住んでいた人々が台地側からの出水に苦慮していたことを想像するのは難しくない。1号・2号溝は直交に近い角度で交差しており、両者は区画溝などの可能性もあるが、周辺からは掘削時期の遺物が少なく人々が生活した痕跡はわずかであるので、その可能性は少ないと考えられる。また、両溝が掘削された時期には、遺跡の北側は河川が流れていった可能性が高く、1号溝のような区画を行う必要性はなかったと考えられる。ところで、IV層の堆積状況からみれば、河道が次第に北側に移動していった状況を読み取ることができる。3号・4号溝については、この河道が北あるいは東側に移動し、IV層の黒色土が堆積した後に掘り込まれている。両溝はほぼ同じ向きに延びており、同じ性格を有していると考えられる。3号溝は、水路とすれば不必要に屈曲して掘られている点や短時間で埋没し、すぐに4号溝が掘られていることなどから、これらの溝は水路よりは区画溝といった性格が強いと考えられる。

このほか、土坑SH4からは壺・小皿が底に並び置かれた状態で出土しているが、地鎮の意味があつたと考えられる。

以上、1・2号溝埋没後～4号溝埋没頃までが、東光寺遺跡の中心的な時期である。その後、整地が行われ、畑や水田として利用されているが、その時期は遺物が減少する15世紀～16世紀頃にあたると考えられる。また、III層下部の流路からは、17世紀以降の新しい時期の遺物が出土しているので、居住地を変えながら人々が生活していたことをうかがうことができる。

一方、古代よりも古い時期については、弥生土器の壺破片が入ったビット1基（SH86）を検出しているのみである。このビットについては、出土した土器に上から圧力がかかった様子もないと柱穴とは考えにくく、その性格は不明である。そのほか、当該期の明確な遺構はみつかっていないが、少なくとも弥生時代の前期末から中期前半頃には丘陵裾部へ生活の領域が広がっていることを示している。

## 第2節 遺物からみた東光寺遺跡

調査によって、様々な遺物が出土しており、このことが東光寺遺跡を特徴づけている。今回の調査では、在地品と考えられる土師質土器のほかに、他地域で作られた陶磁器なども多く出土している。龍泉窯系青磁、白磁などの輸入磁器をはじめ、常滑焼、備前焼などの国産陶器、東播系須恵器、滑石製石鍋など中世において広域流通している代表的な品目はおよそ網羅している。これらのほかに、近畿産の可能性がある瓦質土器の釜なども出土している。この釜のほかにも、今回の調査では瓦質土器の壺・鍋・釜といった調理・煮炊き具が出土している。宮崎県ではこれらの器種が欠如しその実情が明かでない（山本・山村 1997）とされており、今回の調査でこれらの器種が出土したことは当時の状況を知る上で貴重である。また、このような中世の遺跡で通有みられる遺物だけでなく、管見ではほかに例をみない輸入陶磁の合子を模倣したと考えられる土師質焼成の土器も出土している。

広域流通圏を形成する東播系須恵器、常滑焼や備前焼は、時期によって流通量や範囲が変化することが知られている。本遺跡における両者の形態や出土量などから、東播系須恵器→常滑焼→備前焼のように、流通品目が変化している状況をうかがうことができる。この状況は13世紀～15世紀にかけての西日本における各陶器類の流通の変化とも対応している。このような西日本的な流通状況との連動は、当時遺跡で生活していた人々が交易ネットワークに接続していたことを示している。宮崎県内における常滑焼は13世紀後半から14世紀頃のものが多く、14世紀に備前焼と競合関係に入り、15世紀には備前焼が優勢を占める（東 1994）ことが指摘されている。滑石製石鍋については都城市・えびの市周辺での出土数が多く、産地と考えられる長崎から西九州ルートで都城盆地にもたらされた後、大淀川を経て県内各地へと流通した（二宮 2006）とされている。1994年の東氏による常滑焼の集成においても、都城市と大淀川流域に分布が多くなっている。このような状況から、都城市を一つの結節点とする流通ネットワークは容易に想定できるものの、東光寺遺跡が位置する沿岸部の流通網については判然としない。文献資料より九州東岸ルートの存在が知られおり（市村 2004）、そのルートも看過できない。

ほかに中世遺跡で広く出土する宋銭も出土している。2号溝埋土上層からは数枚鋳着した状態で計6枚出土している。六道銭の可能性があり、遺構は確認していないが周辺に中世墓が存在する可能性がある。字名となった東光寺の前身的な宗教施設やそれに関連するような遺物が期待されたが、この銅銭の他に宗教的性格が考えられる遺物は出土しなかった。

以上のような広域流通品に対して、在地品と考えられるものに土師質土器と瓦質土器がある。土師質土器では底部糸切りからヘラ切りへの逆行現象のほか、内面や体部外面に残る螺旋状の指ナデや工具による調整痕の変遷を想定することができる。このような調整痕を残す土師質土器の分布は、狭域の交易範囲を示すと考えられる。具体的な例示はできないものの、13世紀後半～14世紀にかけては宮崎平野側、14世紀～15世紀にかけては延岡側の領域に含まれる可能性がある。さらにヘラ切り底という特徴を加えれば、さらに狭い社会的領域の区分ができるであろう。一方、瓦質土器については、壺・鍋は類似した形態・調整のものが複数個体出土しており、この中で壺については高鍋城でも類似した個体が出土していることから、在地品の可能性が考えられる。釜については形態にばらつきが大きいため、産地は明らかにすることは難しい。

このほか、特筆すべき点としては、多量の鉄滓が出土していることをあげることができる。ほとんどの滓は鍛冶作業に伴うものと考えられ、この付近で鍛冶が行われていたことが明らかとなつた。また、鉄

洋の大部分が出土した流路の形成時期は17世紀以降であるが、その形成要因や出土遺物からみれば、これらの鉄滓は14世紀～15世紀頃のものと考えられる。全体の量からみても、一時期ではなく長期間安定して操業していたことを想定できる。

### 第3節 中世における東光寺遺跡の歴史的位置づけ

調査の結果、東光寺遺跡は13世紀後半～15世紀を中心とした遺跡であることが明らかとなった。12世紀後半頃は大宰府による貿易管理体制が解体し、輸入陶磁器や滑石製石鍋が広く流通を始める時期で、13世紀後半～14世紀前半にかけては商業的な広域流通網の発展による国産陶器などの交易が活発に行われる時期（吉岡1997、鈴木2006）とされる。また、この頃の石鍋の流通には北条氏の関与（鈴木2006）が想定されている。一方、高鍋地域においては、1190年に伊東氏が日向地頭として下向し、伊東氏の勢力拡大とともに、古代からの在地勢力であった財部土持氏との確執が生じるようになる。1350年頃に土持氏が高鍋城（当時は「財部城」と記載）に本拠を構えるが、1457年には土持氏が伊東氏との抗争に敗れ、1577年に島津氏の支配下となるまでは、高鍋は伊東氏が支配することとなる。

このような状況から、東光寺遺跡に生活していた人々は、13世紀後半における広域流通網の発展に伴い、そのネットワークの一端を担っていたと考えられる。また、それよりも古い13世紀前半頃の遺物も若干みられることから、いち早く広域流通網に組み込まれていた可能性が高い。日向灘が眼前に開け、小丸川の河口に位置している地理的状況から、この付近が交通の結節点となっていたこと想像に難くない。鍛冶が活発に行われていた背景として、このような人々が集まる結節点において鉄器の補修や製作を行っていた状況が考えられる。このような状況は14世紀を通じて安定して続いていると考えられる。この状況に変化が生じるのは15世紀に入ってからである。前時期に比べると国産陶器類の出土量が減少しており、この頃にほかでは多くのを占める備前焼の出土量も少ない。台地側への居住地の変化とともに、社会的状況の変化が考えられる。15世紀半ばには土持氏から伊東氏へと支配体制が変化しており、それまでに築かれた社会関係は再編成されたものと考えられる。今回の調査では、その新しく築かれた社会関係を示すまでには至らなかった。

以上のように、東光寺遺跡は、13世紀後半から15世紀において、広域流通網の発展と土持氏の安定した支配体制の中で、小地域の核として発展した遺跡として位置づけることができる。

#### （引用・参考文献）

- 市村高男 2004 「中世西日本における流通と海運」「中世西日本の流通と交通」 高志書院  
鈴木康之 2006 「滑石製石鍋の流通と消費」「鎌倉時代の考古学」 高志書院  
高鍋町史編さん委員会編 1987 「高鍋町史」 高鍋町  
中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社  
二宮満夫 2006 「宮崎県出土の滑石製石鍋」「宮崎県立西都原考古博物館研究紀要」 第2号 宮崎県立西都原考古博物館  
東 嘉章 1994 「宮崎県出土の常滑焼集成」「宮崎考古」 第13号 宮崎県考古学会  
間壁忠彦 1997 「交易体系の変容」「考古学による日本歴史」 9 交易と交通 雄山閣  
宮崎県編 1998 「宮崎県史」 通史編 中世  
宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「高鍋城三ノ丸跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第186集  
山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性 10・九州・南西諸島」「国立歴史民俗博物館研究報告」 第71集 国立歴史民俗博物館  
吉岡康暢 1997 「7 新しい交易体系の成立」「考古学による日本歴史」 9 交易と交通 雄山閣

出土遺物観察表1 (土師質土器等)

出土地点	層級	出土品名	大きさ(cm)	色調	測定値			断面	内側	外側	施上	備考
					内径	外径	厚さ					
1. 沢	1号窯	16	1.8	11.60	3.55	6.50	はるかに赤(0.0/4) はるかに赤(0.0/3)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子を含む	
2. 沢	1号窯	97	1.85	-	3.95	-	淡黄褐色(10YR8/3) はるかに黄(0.0/4)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子を含む	
3. 沢	2号窯	34	4.0/8	(1.16)	7.90	-	淡黄褐色(10YR8/2) はるかに黄(0.0/2)	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△0.5mm以下の透明白子を含む	
4. 沢	2号窯	94	4.0/8	-	(1.16)	7.50	淡黄褐色(7.5YR8/2) はるかに黄(0.0/4)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の透明白子を含む	
5. 沢	2号窯	16	1.8	(1.05)	6.60	-	淡黄褐色(7.5YR7/1) はるかに黄(0.0/2)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子を含む	
6. 沢	2号窯	96	1.8	-	(1.05)	7.70	淡黄褐色(7.5YR7/2) はるかに黄(0.0/2)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子を含む	
7. 小川	1-2号窯	79	1.8/8	8.20	1.40	6.40	淡黄褐色(10YR8/3) はるかに黄(0.0/3)	内輪付	内輪付	内切り	無地な灰白透明白子を含む	
8. 小川	1-2号窯	5	1.8/8	8.50	1.25	6.30	淡黄褐色(10YR8/2) 淡黄褐色(7.5YR8/2)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の透明白子, △0.5mm以下の透明白子を含む	
9. 小川	1号窯	16	1.8/8	(0.85)	6.30	淡黄褐色(10YR8/2) 淡黄褐色(7.5YR8/2)	内輪付	内輪付	内切り			
10. 小川	1号窯	96	1.8/8	-	-	-	△1.5-10YR7.5/3H7/4 はるかに黄(7.5YR8/5-9H7/4)	内輪付	内切り		△0.5mm以下の灰白透明白子を含む	
11. 小川	1号窯	96	1.8/8	-	-	-	淡黄褐色(9H7/4) はるかに黄(7.5YR8/2)	内輪付	内切り		△0.5mm以下の灰白透明白子を含む	
12. 小川	1号窯	99	0.7/8	-	(0.50)	6.60	淡黄褐色(10YR8/3-10YR9/2) はるかに黄(7.5YR8/3-10YR9/2)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子, 6.0cm以下の横枝子を含む	
13. 沢	1号窯	96	1.8	-	(2.20)	7.80	單孔式火垂(7.5YR7/1) 淡黄褐色(7.5YR7/1)	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△1.0mm以下の水滴枝子を含む	
14. 小川	1号窯	96	0.7/8	7.70	1.50	6.00	淡黄褐色(7.5YR8/2) はるかに黄(6H7/2)	内輪付	内輪付	内切り		
15. 小川	1-2号窯	53	0.8/8	7.20	1.50	6.00	淡黄褐色(7.5YR8/2) 淡黄褐色(7.5YR8/2)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の水滴枝子を含む	
16. 小川	1号窯	94	2/8	9.20	1.50	7.40	和田口(7.0/7) 和田口(7.0/7)	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△0.5mm以下の水滴枝子を含む	
17. 沢	3号窯	1	0.7/8	12.50	4.20	6.50	△1.5-10YR7.5/4H7/4 △1.5-10YR7.5/3H7/4	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の水滴枝子を含む	
18. 沢	3号窯	1	0.7/8	-	(1.00)	8.80	△1.5-10YR7.5/2H7/2 △1.5-10YR7.5/2H7/2	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△0.5mm以下の水滴枝子を含む	
19. 沢	3号窯	1	0.7/8	(1.05)	7.50	淡黄褐色(7.5YR8/3) 淡黄褐色(7.5YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の水滴枝子を含む		
20. 沢	4号窯	2/8	13.40	4.50	6.90	19(2Y7/3)H7/3 はるかに黄(10YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△0.5mm以下の水滴枝子, 6.0cm以下の横枝子を含む		
21. 沢	4号窯	4/8	1.60	8.50	-	淡黄褐色(10YR8/3) 淡黄褐色(10YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り 内凹?	△0.5mm以下の水滴枝子, 6.0cm以下の横枝子を含む		
22. 沢	4号窯	0/8	-	(1.00)	7.00	△1.5-10YR7.5/2H7/2 △1.5-10YR7.5/2H7/2	内輪付	内輪付	内切り (内凹?)	無地な透明白子, 6.0cm以下の横枝子を含む		
23. 沢	白色粘土層 刻印有層	1/8	-	(1.00)	-	-	淡黄褐色(7.5YR8/3) 淡黄褐色(7.5YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子, 6.0cm以下の横枝子を含む	
24. 沢	白色粘土層 開口有層	0/8	-	(1.00)	6.50	-	△1.5-10YR7.5/2H7/2 はるかに黄(10YR8/2)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子, 6.0cm以下の横枝子を含む	
25. 沢	0/8	9/8	14.95	4.00	8.10	-	淡黄褐色(10YR8/3) 淡黄褐色(10YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り (内凹?)	△0.5mm以下の水滴枝子	
26. 小川	SH3	0/8	9.40	2.00	7.00	-	淡黄褐色(7.5YR8/3) はるかに黄(7.5YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5-1.0mmの横枝子, 6.0cm以下の横枝子を含む	
27. 沢	SH3	0/8	11.70	3.00	7.30	-	淡黄褐色(10YR8/3) 淡黄褐色(10YR8/3)	内輪付	内輪付	内切り	△0.5mm以下の横枝子を含む	
28. 沢	SH3 15-15-15層	1/8	12.10	4.00	6.90	淡黄褐色(10YR8/2) はるかに黄(9H8/2)	内輪付	内輪付	内切り	無地な透明白子を含む		

29	ホ	SHS 13-14-IV 25 3-IV 25	4/8	13.20	3.9	7.86	洗着生・洗着乾(16985- 16986-2)/洗着(16985- 16986-1)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
30	ホ	SUS 13-III-IV 25	4/8	14.26	6.49	-	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
31	ホ	SHS 13-III-IV 25	4/8	11.99	8.46	-	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
32	ホ	SUS 13-III-IV 25	4/8	12.66	6.69	-	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
33	ホ	SUS 13-III-IV 25	4/8	9.30	4.49	7.26	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
34	小H	SUS 13-III-IV 25	4/8	9.20	4.49	7.66	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
35	小H	SHS 13-IV 25	4/8	8.88	4.49	8.86	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子を△入り △1.0m以下の柔軟性子を含む
36	小H	SUS 13-IV 25	4/8	8.70	4.59	8.86	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子を△入り △1.0m以下の柔軟性子を含む
37	小H	SUS 13-IV 25	4/8	10.30	2.7	8.35	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子△入り △2.0m以下の柔軟性子を△入り
38	ホ	SUS 13-IV 25	4/8	11.63	8.66	-	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の柔軟性子 △1.0m以下の柔軟性子を含む
39	小H	SHS 13-IV 25	4/8	7.10	1.99	5.66	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△2.0m以上の印刷△入り △入り
40	小且	SHS 13-IV 25	4/8	-	-	-	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	系り
41	ホ	成感-22	4/8	-	1.79	7.70	△△△△-△△△△-△△△△- △△△△-△△△△-△△△△	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子△入り △1.0m以下の柔軟性子を△入り
42	小且	視認	4/8	8.48	1.49	8.00	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子△入り △1.0m以下の柔軟性子を△入り
43	小且	視認	4/8	8.48	1.69	9.40	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	△1.0m以下の印刷△入り △入り
44	ホ	SHS 13-IV 25	4/8	12.90	3.89	9.20	洗着(16985-2) 洗着(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	柔軟な透明粒子△入り △1.0m以下の柔軟性子を△入り
45	ホ	E4 III-IV 25	6/8	10.95	4.19	7.10	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	→入り →入り	柔軟な透明粒子△入り △1.0m以下の柔軟性子を△入り
46	ホ	E4 III-IV 25	6/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	△0.5m以上の印刷△入り △0.5m以上の印刷△入り
47	ホ	E4-IV 25	6/8	-	1.49	7.70	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	△0.5m以上の印刷△入り △入り
48	ホ	12	4/8	-	1.69	7.20	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	系り
49	小H	E4-IV 25	6/8	7.90	1.75	6.06	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	柔軟な透明粒子△入り
50	小H	E4-III-IV 25	6/8	7.60	1.59	6.06	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	柔軟な透明粒子△入り
51	小H	E4-III-IV 25	6/8	7.60	1.28	6.20	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	柔軟な透明粒子△入り
52	小H	E4-III-IV 25	6/8	-	0.99	6.06	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	△1.0m以下の柔軟性子△入り
53	小H	E4-IV 25	1/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	系り
54	小H	E4-IV 25	1/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	系り
55	ホ	E4-IV 25	1/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	成感(16985-2) 成感(16985-2)
56	ホ	E4-IV 25	1/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	△1.0m以下の柔軟性子△入り
57	ホ	13	1/8	-	-	-	成感(16985-2) 成感(16985-2)	-	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り	△0.5m以上の印刷△入り △0.5m以上の印刷△入り
58	ホ	E2-III-IV 25	6/8	12.46	4.39	7.90	成感(16985-2) 成感(16985-2)	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> ) 146cm <sup>2</sup> (146cm <sup>2</sup> )	系り 系り	△1.0m以下の柔軟性子△入り



88	ホ	E6-IV <sup>新</sup>	2/9	-	1.39	5.56	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
89	ホ	G4-IV <sup>新</sup>	2/9	-	2.59	8.26	西側壁(1988/2/ 改築後1988/3) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
90	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	2.19	7.06	西側壁(1988/2/ 改築後1988/3) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
91	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	10.30	1.45	7.06	西側壁(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
92	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	11.30	7.20	西側壁(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む	
93	小丘	E6-IV <sup>新</sup>	2/8	10.30	1.50	7.06	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
94	小丘	J1	2/8	8.30	1.39	5.56	改築後(1988/2/ 改築後1988/3) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
95	小丘	E6-IV <sup>新</sup>	2/8	7.30	1.48	5.56	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
96	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.8	8.00	改築後(1988/2/ 改築後1988/3)	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
97	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	7.30	1.48	5.56	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
98	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.75	8.26	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
99	小丘	F6 IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.59	7.20	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
100	小丘	F6 IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.65	8.26	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
101	小丘	F6 III-IV <sup>新</sup>	2/8	8.20	1.49	5.56	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
102	小丘	F6 IV <sup>新</sup>	2/8	7.70	1.45	5.26	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
103	小丘	J1	2/8	9.30	1.50	7.06	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
104	小丘	E6-IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.59	8.26	改築後(1988/2/ 改築後1988/3)	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
105	小丘	C8-III-IV <sup>新</sup>	2/8	10.00	1.45	7.20	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
106	小丘	J2	2/8	7.30	1.25	8.00	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
107	小丘	J2 III-IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.19	5.66	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
108	小丘	J1	2/8	8.30	1.49	8.16	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
109	小丘	E6 IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.55	5.66	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
110	小丘	G1	2/8	7.30	1.55	5.80	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
111	小丘	F6 IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.49	5.66	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
112	小丘	F6 IV <sup>新</sup>	2/8	8.30	1.55	5.66	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
113	小丘	O4 IV <sup>新</sup>	2/8	7.40	1.50	9.00	改築後(12.5m <sup>2</sup> /4) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
114	小丘	19.00	2/8	9.30	1.39	7.06	12.5m <sup>2</sup> の高層・複数階 (1987/3/7, 1987/3/10, 1987/3/10, 1987/3/10) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
115	小丘	J1	2/8	8.30	1.15	8.80	改築後(8.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
116	小丘	E6-IV <sup>新</sup>	2/8	7.30	1.65	9.00	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む
117	小丘	E6-IV <sup>新</sup>	2/8	7.30	1.55	9.00	改築後(12.5m <sup>2</sup> /2) のうち	前面の透視鏡をもつた 内閣官邸、6.2.0m以下の木 造椅子を含む

116	年	II-II期	1/90	-	(1.90)	6.40	江戸川区立荒川(1037/2)／ 江戸川区立荒川(1037/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子を含む
117	小田	II-II期	1/90	-	(1.40)	8.50	森本橋(2-白2.51B7/4) 森本橋(2-白2.51B7/5)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
118	小田	II-II期	1/8	7.10	1.50	5.30	森曾根(1038/2)／ 森曾根(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
119	小田	II-II期	1/90	1.00	1.40	8.90	河原町(1038/2)／ 河原町(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
120	小田	II-II期	1/8	7.10	1.50	5.30	森曾根(1038/2)／ 森曾根(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
121	年	II-II期	1/90	1.00	1.40	8.90	河原町(1038/2)／ 河原町(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子を含む
122	年	II-II期	2/8	11.40	4.10	6.00	堀川(1038/2)／ 堀川(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	φ1.0mm以下の白・褐色 粒子を含む
123	年	II-II期	6/8	12.70	4.60	7.40	堀川(1038/2)／ 堀川(1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の黒褐色、透明粒子 を含む
124	年	II-II期	5/8	-	(2.60)	7.20	江戸川区立荒川(7.51B7/4) 江戸川区立荒川(7.51B8-2)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ2.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
125	年	真立・寺	1/90	-	(1.90)	7.00	江戸川区立荒川(1036/3) 江戸川区立荒川(1037/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の灰白色、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
126	年	II-II期	6/8	-	(1.90)	6.40	豊根(2-白2.51B7/4) 豊根(2-白2.51B7/5)	回転式* 固定式* →振りり (→振り)	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
127	年	真立・寺	5/8	-	(1.60)	7.20	森曾根(2-51B8-2) 森曾根(2-51B8-3)	回転式* 固定式* →振りり (→振り)	振りり	板状の透明粒子、φ2.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
128	年	II-II期	6/8	-	(1.80)	6.40	森曾根(2-51B8-4) 森曾根(2-51B8-5)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
129	年	II-II期	1/8	8.30	2.10	8.20	高砂(1-1038/2) 高砂(1-1038/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
130	小田	真立・寺	1/8	8.30	1.10	7.00	江戸川区立荒川(1037/2)／ 江戸川区立荒川(1037/3)	回転式* 固定式* →振りり	振りり	φ1.0mm以下の白・黑 褐色透明粒子を含む
131	小田	真立・寺	1/80	-	-	-	江戸川区立荒川(1037/3) 江戸川区立荒川(1038/2)	- →振り*	振りり	板状の透明粒子を含む
132	年	I-II・寺+寺	14/8	-	(4.10)	7.40	武蔵(2-21H1) 武蔵(2-21H2)	回転式* 固定式* -	-	φ1.0mm以下の白・褐色 粒子を含む
133	年	II-II期	1/90	-	(2.60)	8.30	江戸川区立荒川(1037/2)／ 江戸川区立荒川(1038/1)	回転式* 固定式* -	振りり	板状の透明粒子を含む
134	年	II-II期	1/8	-	-	-	高砂(2-51B7/3) 高砂(2-51B7/4)	- →振り*	振りり	板状の透明粒子を含む
135	不明	1号館	-	-	-	-	江戸川区立荒川(7.51B7/3) 朝霞駅G7.51B7/2	- 固定式* -	振りり	板状の透明粒子を含む
136	合子	IV期	8/8	6.10	1.90	8.50	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/2)	回転式* 固定式* 不解	振りり	板状の透明粒子、墨色粒子を 含む
137	合子	IV期	8/8	6.60	1.15	5.40	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/2)	回転式* 固定式* 不解	振りり	板状の透明粒子、φ1.0mm 以下の赤褐色粒子を含む
138	合子	IV期	1/80	-	(2.70)	-	深谷(2-51B7/2) 深谷(2-51B7/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	板状の透明粒子を含む
139	水質監	II-II期	1/8	-	-	-	深谷(2-51B7/2) 深谷(2-51B7/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
140	水質監	II-II期	1/8	-	-	-	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
141	水質監	IV期	1/80	-	-	-	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
142	水質監	IV期	1/80	-	-	-	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
143	水質監	II-II・IV期	1/80	-	-	-	深谷(2-51B4/1) 深谷(2-51B5/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
144	水質監	I-II号館	1/80	-	-	-	江戸川区立荒川(1037/3) 江戸川区立荒川(1038/3)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
145	水質監	II-II期	1/80	-	-	-	深谷(2-51B7/4) 深谷(2-51B7/5)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
146	水質監	II-II・IV期	1/8	-	(1.10)	-	江戸川区立荒川(7.51B7/4) 江戸川区立荒川(7.51B7/5)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む
147	水質監	II-II期	1/80	-	-	-	深谷(2-51B5/1) 深谷(2-51B6/1)	回転式* 固定式* 不解	振りり	φ1.0mm以下の赤褐色粒子を 含む

148	瓦質 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	赤褐色の灰陶粒子を含む
149	瓦質 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	約1.6mm以下の灰白・淡青灰・ 褐色粒子を含む
150	瓦質 板	64	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	約1.6mm以下の灰白・淡青灰・ 褐色粒子を含む
151	瓦質 板	I-2号塊 板	1/8	29.90	(7.29)	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	赤褐色の灰陶・灰褐色粒子を 含む
152	瓦質 板	I-2号塊 板	1/8	30.30	(7.45)	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	赤褐色の灰陶・灰褐色粒子を 含む
153	瓦質 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	34.00	(6.95)	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) →黒	赤→黒	-	赤褐色の灰陶・灰褐色粒子を 含む
154	瓦質 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤	赤	-	約1.6mm以下の灰褐色粒子を 多く含む
155	瓦質 板	64	1/8	-	4.79	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤	赤	-	約1.6mm以下の灰白・褐色 粒子を含む
156	瓦質 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤	赤	-	赤褐色の灰陶・透明粒子を含む
157	瓦質 板	65	1/8	17.70	2.69	赤(2.5%1/1) / 黒灰(2.5%1/1)	赤	赤	-	赤褐色の灰陶・透明粒子を含む
158	???	泥路	1/8	-	-	赤(2.5%1/1) / 黒(2.5%1/1)	赤	赤	-	約1.6mm以下の灰白粒子を含む

出土遺物観察表2 (磁器等)

報告番 号	品種	主な構成 物質	主な構成 物質	大きさ (mm)	色	表面 状況	特徴	参考	
159	青磁 板	I-2号 板	II-IV <sup>a</sup>	1/8	14.40 (4.05)	赤(2.5%1/1) / 黒(2.5%1/1)	赤オリーブ灰(3577/1) / 赤セリーブ灰(3577/1) / 赤白(3577/1)	表面に白色のB.M.	
160	青磁 板	1号塊	1/8	13.80 (1.45)	-	赤(2.5%1/1) / 黒(2.5%1/1)	赤(2.5%1/1) / 黒(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
161	青磁 板	1号塊	1/8	6.50	-	赤(2.5%1/1)	セリーブ灰(2.5%1/1) / オリーブ灰(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	
162	青磁 板	1号塊	1/8	-	12.37	5.99	セリーブ灰(2.5%1/1) / オリーブ灰(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
163	青磁 板	武器	1/8	1.20	42.69	赤セリーブ(3577/2) / 赤オリーブ(3577/2)	赤(3577/2) / 赤オリーブ(3577/2)	赤白(3577/1)	
164	青磁 板	武器	1/8	-	1.90	6.15	セリーブ灰(3577/2) / 赤オリーブ(3577/2)	赤白(3577/1)	
165	青磁 板	武器	1/8	-	1.90	6.15	セリーブ灰(3577/2) / 赤オリーブ(3577/2)	赤白(3577/1)	
166	青磁 板	IV <sup>a</sup>	1/8	20.60 (2.39)	-	赤(2.5%1/1) / 黒(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	
167	青磁 板	IV <sup>a</sup>	1/8	15.10 (1.89)	-	セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
168	青磁 板	IV <sup>a</sup>	1/8	-	1.85	4.89	セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
169	青磁 板	IV <sup>a</sup>	1/8	-	2.50	-	セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
170	青磁 板	IV <sup>a</sup>	2/8	-	1.90	4.20	赤オリーブ(3577/2) / 赤セリーブ(3577/2)	赤白(2.5%1/1)	
171	青磁 板	IV <sup>a</sup>	1/8	-	2.60	10.90	青翠(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
172	青磁 板	12	1/8	-	-	-	青セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤オリーブ灰(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
173	青磁 板	板上	1/8	-	4.60	-	赤セリーブ灰(2.5%1/1) / 赤オリーブ灰(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
174	青磁 板	1号-2号塊	1/8	11.80	(2.25)	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	
175	青磁 板	III-IV <sup>a</sup>	1/8	14.60	(2.30)	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
176	青磁 板	III-IV <sup>a</sup>	1/8	1.85	(2.25)	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
177	青磁 板	III-IV <sup>a</sup>	1/8	-	2.23	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
178	青磁 板	64	1/8	12.30	(1.95)	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	
179	青磁 板	11	1/8	9.50	(4.60)	-	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)	
180	青磁 板	武器	0.6/8	-	1.50	4.43	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(3577/1)	
181	青磁 板	武器	4/8	-	-	1.40	5.45	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)
182	青磁 板	武器	2/8	-	-	1.50	4.35	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)
183	青磁 板	武器	2/8	-	-	1.10	4.19	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)
184	青磁 板	武器	1/8	-	7.85	1.55	3.10	赤(2.5%1/1) / 赤(2.5%1/1)	赤白(2.5%1/1)

出土遺物觀察表 3 (中世須惠器・陶器等)

出土遺物觀察表4（古墳時代以前の土器・須恵器等）

固有基 團	基種	毛生葉面 ・葉肉 ・葉脈	毛被葉面 ・葉肉 ・葉脈	大葉各部	小葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈	葉 ・葉肉 ・葉脈
238	漢文 極端	II-IV級	100	-	-	-	に長い葉身(110mm/1) に長い葉脈(110mm/1)	長辺葉脈 不規則	不規 則	0.1.Bradleyの葉子 細胞が透明化する	漢文
239	漢文 極端	II-IV級	100	-	-	-	に長い葉身(110mm/1) に長い葉脈(110mm/1)	叶	長辺葉脈 規則	0.1.Bradleyの葉子 細胞が透明化する 葉子	漢文の葉面 を含む
240	漢文 極端	II-IV級	100	-	-	-	に長い赤褐色(5mm/1) に長い赤褐色(5mm/2)	細胞葉脈 →叶	細胞葉脈 葉	0.1-4.0mm下葉用門形 葉子 0.1-6mm以上の葉子 白い粒状、薄緑の葉面 葉子を含む	漢文
241	漢文 極端	1-2号情	100	-	-	-	毛生葉(5mm/1) 無毛葉(5mm/1)	叶	無葉葉脈 葉	0.2-0.4mm毛生葉用門形 葉子 0.1-6mmの葉子 葉面は緑色を含む	漢文
242	漢文 極端	白角葉・葉 肉凹凸凹 IV-V級	100	-	-	-	毛生葉(5mm/1) 無毛葉(5mm/1)	叶	叶	0.2-0.3mm毛生葉用門形 葉子 0.2-3mmの葉子 葉面は白い 葉子を含む	漢文
243	野生 堪	III-IV級	100	21.39	(2.79)	-	に長い葉身(110mm/1) に長い葉脈(110mm/1)	叶	叶	0.2-0.4mm葉の底に 葉脈が濃く、透明な葉子を含 む	堪

241	名牛 飲	CB-IV型	1/8	22.99	(1.29)	に.541-2(03)B6(4)/ に.541-4(1.5)B6(4)	アリ アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・成 虫・卵子を含む
245	新生 雄	1-2分儀	1/8	14.83	(6.25)	に.541-4(1037/3)/ に.541-4(1037/3)	アリ アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
246	新生 雄	2号鏡+4	1/8	-	-	に.541-4(038/4)/ に.541-4(038/4)	アリ アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
247	新生 雄	FB-IV型	1/8	-	-	に.541-4(038/4)/ に.541-4(038/4)	アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
248	新生 雄	3号鏡	1/8	-	-	に.541-4(038/2)/ に.541-4(1.5)B6(2)	不可	アリ	♀.♂.卵子を含む
249	新生 雄	SB66	1/8	-	(15.39)	に.541-4(1.5)B6(6-5/2) に.541-4(1.5)B6(6-5/2)	アリ アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫・成虫・卵子を含む
250	新生 雄	調査メーク	1/8	-	-	に.541-4(038/4)/ に.541-4(038/4)	アリ アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
251	新生 雄	18-IV型	1/8	-	-	に.541-4(1.5)B6(5)/ に.541-4(1.5)B6(5)	アリ アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
252	新生 雌	J2-IV型	-	-	(11.79)	に.541-4(1.5)B6(4)/ に.541-4(1.5)B6(4)	アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫・成虫・卵子を含む
253	古城 雄	3号鏡	1/8	11.53	(1.65)	に.541-4(1.5)B6(2)/ に.541-4(1.5)B6(2)	アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
254	古城 雄	CB-IV型	1/8	-	-	に.541-4(1038/10)/ に.541-4(1038/10)	アリ アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
255	古城 雄	CB-IV型	1/8	-	-	に.541-4(1.5)B6(5)/ に.541-4(1.5)B6(5)	卷下.アリ	(15.88)	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
256	古城 雄	調査メーク	1/8	-	-	灰筋筋(10375/2)/ 灰筋筋(10375/2)	筋子.アリ	(15.88)	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
257	古城 雄	12	1/8	-	-	灰(2.5)/灰(2.5)	アリ.アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
258	古城 雄	12	1/8	11.00	(1.99)	灰(2.5)/灰(2.5)	アリ.アリ	アリ	雌雄な成虫・卵子を含む
259	古城 雄	調査メーク	1/8	-	-	に.541-4(1037/3)/ に.541-4(1037/3)	アリ	アリ	♂♂.♀♀.卵子を含む
260	~古城	65-III型	1/8	11.00	5.40	灰(1.5)B6(2)/ 灰(1.5)B6(2)	アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
261	~古城	1-2分儀	1/8	-	-	に.541-4(1037/3)/ に.541-4(1037/3)	アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
262	~古城	1-2分儀	1/8	-	-	に.541-4(1037/3)/ に.541-4(1037/3)	アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
263	~古城	1-2分儀	1/8	-	-	に.541-4(1036/4)/ に.541-4(1036/4)	アリ	アリ	♀.♂.卵子を含む
264	~古城	12-IV型	1/8	-	-	に.541-4(1037/3)/ に.541-4(1037/3)	アリ	アリ	♂♂.♀♀以下の成虫・若 齢幼虫を含む
265	~古城	2号鏡+4	1/8	-	-	骨(5.25)/骨(5.25)/ に.541-4(1.5)B6(2)	不可	アリ	♂.♂.卵子を含む
266	~古城	11-IV型	1/8	-	-	灰筋筋(1038/2)/ 灰筋筋(1038/2)	不可	アリ	♂.♂.卵子を含む

出土遺物観察表5 (土製品・石器・金属器等)

発見地點番号	種類	山手遺跡・層位	寸法	厚さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	備考	
267	土器	西端 1A	-	7.0	5.16	1.20	141.6	片持2.49g	
268	土器	西端	-	7.09	5.16	1.40	98.9	片持2.29g	
269	土器	G3 IV層	-	6.70	5.66	1.10	108.5	片持2.56g	
270	土器	H3-IV層	-	4.00	3.90	0.30	4.0	丸持0.36g	
271	土器	E6-IV層	-	(3.80)	1.35	0.40	3.8	丸持0.70g	
272	土器	E4-III-IV層	-	4.00	1.00	0.50	9.0	丸持0.36g	
273	土器	E2-III層	-	4.00	1.00	0.30	4.2	丸持0.36g	
274	土器	H2-II層	-	(3.00)	1.00	0.25	3.1	丸持0.36g	
275	土器	II	-	4.40	1.20	0.50	5.5	丸持0.36g	
276	土器	廻柵区・表	-	4.00	1.20	0.30	6.0	丸持0.36g	
277	頭臼	2号浴場?	-	(0.15)	(5.20)	4.20	121.0	頭上部破損等有り	
278	頭臼	H2-III層	-	(0.65)	(5.90)	2.27	191.9	浮出	
279	頭臼	H2-IV層	-	(4.65)	7.00	2.70	151.8	左側孔52.55cm, 右側孔	
280	頭臼	西端	-	(3.50)	5.10	2.70	62.2	浮出	
281	頭臼	西端	-	(3.90)	(5.90)	2.15	24.1		
282	頭臼	西端	-	(3.70)	(5.80)	(2.70)	22.1	浮出	
283	頭臼	E3-III層	-	(3.60)	(3.70)	(2.30)	20.0	×少腹	
284	頭臼	T5-IV層	-	(5.90)	(4.50)	3.94	25.4	内端に斜面	
285	頭臼	E3-IV層	-	(3.60)	(1.30)	2.35	27.8	×少腹	
286	頭臼	J3-IV層	-	(3.50)	(4.45)	2.35	26.2		
287	頭臼	II	-	(2.30)	(5.70)	2.55	23.6		
288	頭臼	H2-II層	-	(0.60)	(5.60)	(2.30)	16.9	±1.0-5.0cm(?)色斑を多点に含む, 浮出	
289	骨頭片	廻柵区・表	滑石	-	(0.60)	(5.60)	1.90	91.1	頭頂に暗赤斑有り
290	骨頭片	廻柵区・表	滑石	-	(2.60)	(5.10)	1.70	86.9	頭頂部14.0cm, 著面に暗赤斑有り
291	スタンプ	G8-II層	滑石	-	(2.70)	3.20	1.30	13.3	右側片厚約1.4mm, 化文を陽刻
292	環	G8-IV層	滑石	(1.20)	5.20	1.00	29.0	右側片厚約1.4mm	
293	環	H2-III層	伊	1.83	3.21	-	1.7	右側薄丸	
294	石器	H2-II層	チコリ	2.68	1.70	0.10	1.1		
295	頭骨	H2-IV層	頭骨	2.24	1.25	0.70	0.9		
296	分離骨	H2-V層	頭骨	2.53	2.70	2.20	13.8		
297	頭骨	H2-IV層	骨片	16.00	3.25	0.75	21.7		
298	頭骨	H2-II層	骨片	(3.45)	3.30	0.70	11.9		
299	頭骨	廻柵区・表	頭骨片	0.65	4.70	2.00	151.7		
300	石器	廻柵区・表	石片	0.50	6.20	3.00	38.9		
301	環等	E3-III層	ホルンシルバース	13.95	5.50	2.40	236.9		
302	石器	西端	ホルンシルバース	0.75	3.70	0.80	151.0		
303	石器	廻柵区・表	石片	(0.40)	5.00	0.90	127.5		
304	石器	H2-III-IV層	砂利	-	7.50	7.00	1.00	130.2	
305	石器	II	砂利	-	7.50	9.00	1.30	117.0	
306	石器	II	砂利	(7.80)	9.80	3.20	306.9	被焼成灰	
307	次塗瓦	2号浴場-6A	ホルンシルバース	12.85	5.95	1.50	151.0	5点上木村?	
308	石器	H2-III層	ホルンシルバース	0.85	1.25	2.25	66.3		
309	凹凸	西端	骨質酸化物	0.63	8.30	3.50	838.9		
310	空洞石	西端	骨質酸化物	15.00	8.80	4.90	158.9		
311	石器	西端	砂利	15.10	8.65	3.37	569.4		
312	石器	C5-IV層	砂利	12.90	9.00	7.75	1255.5		
313	石器	西端	砂利	13.10	10.65	1.35	1662.2		
314	透輝	西端	砂利	11.10	14.42	8.30	2276.1		
315	透輝	西端	砂利	17.40	13.10	10.70	2256.2		
316	透輝	白色粘土塊	砂利	18.20	10.60	7.70	1653.6		
317	透輝	2号浴場	砂利	2.45	0.13-0.18	5.3	3枚接着, 元は通貫・小片・大きさ混在, 砂利等有り		
318	透輝	2号浴場	砂利	2.45	0.13	-	元は通貫		
319	透輝	H2-II層	砂利	-	0.13	-	砂利不明		
320	透輝	2号浴場-6A	砂利	-	0.13-0.14	1.0	穿孔のみ, 亂揮手, H2-I層に小さな物が多く入る		
321	透輝	H2-IV層	砂利	-	4.79	1.05	2.30	3.2	穿孔のみ
322	透輝	H2-IV層	砂利	6.32	1.04	0.99	13.6	穿孔のみ	
323	透輝	H2-IV層	砂利	1.42	1.31	1.25	15.1	穿孔のみ	
324	透輝	H2-IV層	砂利	4.22	1.76	1.11	16.3	穿孔のみ	
325	透輝	H2-IV層	砂利	6.09	1.72	1.21	19.6	穿孔のみ	
326	透輝	H2-IV層	砂利	6.66	1.21	1.17	15.7	穿孔のみ	
327	透輝	H2-IV層	砂利	5.47	1.43	1.10	7.6	穿孔のみ	
328	透輝	刀子	砂利	4.26	2.25	0.83	11.2	穿孔のみ	
329	透輝	刀子	砂利	3.57	3.70	0.81	7.5	穿孔のみ	
330	透輝	刀子	砂利	5.67	3.56	0.94	23.7	穿孔のみ	

出土遺物観察表6（鉄津）

発見地・発掘年	出土遺物・器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	白色化	操作方法	参考
301	1号-2号層-15	6.3	3.6	3.6	124.9	○		
302	1号-2号層-15	3.6	6.6	2.3	61.5			
303	0号層-16	7.8	5.6	3.6	115.3			
304	1号-2号層	6.1	3.1	1.9	56.3			
305	3号層	6.0	3.7	3.6	117.6			
306	1号層-17	10.7	11.1	3.6	267.8			1号層-17の参考
307	0号層小豆真珠	5.1	7.3	3.6	88.8			
308	武鉄	6.2	3.0	2.1	53.9	○		
309	武鉄	6.8	4.6	2.6	161.7	○		1号に白色化したがるサ
310	IC28-64	7.7	6.5	3.6	159.5	○		
311	IC28-64	5.9	5.9	3.6	180.2	○		
312	武鉄	6.0	6.9	2.3	217.9	○		
313	武鉄	9.7	7.6	3.6	258.5	○		
314	IC28-64	7.1	7.6	3.6	250.8	○		
315	IC28-63	5.6	6.4	3.6	165.5	△		
316	武鉄	7.9	6.0	3.2	253.9	○		
317	武鉄	8.7	8.2	3.2	292.5	△		
318	武鉄	6.1	6.6	3.6	178.3	○		
319	武鉄	11.0	10.3	3.6	287.5	○		
320	IC28-64	9.7	9.6	4.0	480.4	○		
321	武鉄	7.7	6.1	3.2	219.5	△		
322	武鉄	10.1	7.6	4.0	283.8	○		
323	武鉄	9.6	10.4	3.2	422.9	△		
324	武鉄	10.9	9.5	4.5	426.8	○		
325	武鉄	10.0	9.1	4.0	459.1	△		
326	IC28-64	12.7	9.8	5.7	461.5	○		
327	武鉄	13.5	9.1	4.0	568.5	△		
328	IC28-64	9.0	7.2	3.1	251.7	○	○	
329	IC28-62	11.4	11.6	9.1	1809.8	△		
330	武鉄	7.0	6.0	3.8	156.2	○		
331	IC28-64	7.7	8.6	4.6	265.4	△		
332	武鉄	9.1	8.2	3.2	219.9	○		
333	武鉄	8.6	7.1	4.7	216.0	△		
334	IC28-64	9.7	7.6	1.7	541.5	△		
335	武鉄	7.0	6.7	4.8	329.6	△		
336	IC28-64	8.9	7.1	5.6	461.1	△		
337	IC28-64	10.0	9.4	3.6	524.1	△		
338	武鉄	10.8	8.6	3.5	299.8	△		
339	武鉄	10.4	9.0	3.3	246.7	△		
340	IC28-64	8.8	7.5	5.7	460.0	△		
341	IC28-64	7.7	7.6	3.9	260.2	△		
342	武鉄	9.3	8.7	6.1	424.5	△		
343	IC28-64	9.8	6.7	6.1	250.2	○		
344	IC28-64	7.6	6.1	6.6	320.1	△		
345	IC28-64	10.1	7.3	6.6	263.5	○		
346	武鉄	8.0	10.2	6.8	201.5	○		
347	武鉄	10.6	7.2	6.8	419.9	○		
348	IC28-64	9.1	6.9	7.2	261.7	○		
349	IC28-64	10.4	9.6	9.6	4760.0	○		
350	IC28-63	7.2	6.0	1.8	111.3			
351	武鉄	5.0	4.6	1.8	84.8			
352	IC28-64	6.0	6.1	1.9	63.9			
353	武鉄	6.1	6.9	1.9	99.5			
354	武鉄	7.9	8.6	2.6	167.5			
355	武鉄	6.6	6.4	2.1	59.4			
356	IC28-64	3.8	2.7	2.2	49.5			
357	武鉄	7.7	8.6	2.3	156.1			
358	IC28-62	9.1	6.6	2.3	170.5			
359	IC28-64	5.1	5.1	2.3	50.5			
360	IC28-64	5.9	8.1	2.6	87.4			
361	IC28-64	7.2	6.0	2.6	99.8			
362	IC28-64	6.0	4.9	2.6	28.7			
363	IC28-64	7.1	8.2	2.6	159.6			
364	IC28-64	6.7	6.9	2.6	129.8			
365	IC28-64	10.1	9.8	2.6	463.2			
366	IC28-64	5.0	6.1	2.6	162.7			
367	IC28-64	7.1	6.2	2.6	201.6			
368	IC28-64	6.1	4.7	2.6	661.8			
369	IC28-64	6.0	6.9	2.7	191.9			
370	IC28-64	7.5	7.6	2.7	358.7			
371	武鉄	8.2	7.3	2.7	241.2			
372	武鉄	8.0	7.4	2.7	245.5			

405	武昌-61	5.6	7.5	2.8	165.3	
406	武昌-61	5.9	6.6	2.6	193.8	
407	武昌-64	6.9	6.9	2.6	247.5	
408	武昌-64	6.6	6.9	2.6	15.4	
409	武昌-64	5.9	6.5	2.6	95.5	
410	武昌-64	5.6	6.4	2.6	102.5	
411	武昌-64	7.1	5.1	2.6	126.7	
412	武昌-64	7.6	5.9	2.6	137.2	
413	武昌-64	6.3	6.9	2.6	170.5	
414	武昌-64	6.2	6.2	2.6	195.2	
415	武昌-64	10.6	6.6	2.6	235.7	
416	武昌-64	7.6	6.9	2.6	327.7	
417	武昌-64	6.7	6.1	2.6	129.9	
418	武昌-64	7.1	7.9	2.6	296.5	
419	武昌-64	9.6	7.7	2.6	266.8	
420	武昌-64	9.2	6.1	2.6	308.7	
421	武昌-64	7.3	4.1	2.6	102.5	
422	武昌-64	6.6	9.9	2.6	161.9	
423	武昌-75	7.4	7.9	2.6	197.1	
424	武昌-75	6.6	6.9	2.6	217.2	
425	武昌-75	10.3	7.7	2.6	267.0	
426	武昌-75	9.9	6.5	2.6	388.5	
427	武昌-75	9.1	7.3	2.6	197.1	
428	武昌-75	9.8	6.1	2.6	207.3	
429	武昌-75	9.1	6.5	2.6	221.6	
430	武昌-75	6.6	9.1	2.6	297.7	
431	武昌-75	9.6	9.8	2.6	297.9	
432	武昌-75	6.2	6.9	2.6	327.2	
433	武昌-75	3.7	6.7	2.6	41.5	
434	武昌-75	7.1	6.1	2.6	200.3	
435	武昌-75	7.6	6.3	2.6	248.6	
436	武昌-75	9.2	5.7	2.6	191.0	
437	武昌-75	6.6	6.2	2.6	212.9	
438	武昌-75	7.6	6.4	2.6	245.7	
439	武昌-75	7.3	10.9	2.6	292.5	
440	武昌-75	7.1	6.7	2.6	273.4	
441	武昌-75	13.5	9.5	2.6	593.1	
442	武昌-75	7.9	6.1	2.6	191.9	
443	武昌-75	10.1	9.7	2.6	144.1	
444	武昌-75	8.1	8.3	2.6	350.6	
445	武昌-75	6.2	6.9	2.6	90.1	
446	武昌-75	7.6	8.5	2.6	176.9	
447	武昌-75	12.2	8.6	2.6	911.7	
448	武昌-75	10.1	7.5	2.6	285.7	
449	武昌-75	7.8	7.7	2.6	290.7	
450	武昌-75	9.7	9.3	2.6	358.5	
451	武昌-75	13.6	6.9	2.6	516.7	
452	武昌-75	9.2	4.7	2.6	360.5	
453	武昌-75	11.4	7.9	2.6	544.8	
454	武昌-75	10.6	8.2	2.6	584.7	
455	武昌-75	11.3	14.3	2.6	632.0	
456	武昌-75	13.7	10.8	2.6	799.6	
457	武昌-75	12.0	7.9	2.6	395.1	
458	武昌-75	9.9	10.1	2.6	673.6	
459	武昌-75	8.8	7.1	2.6	185.5	
460	武昌-75	8.8	6.7	2.6	506.7	
461	武昌-75	8.1	6.9	2.6	506.1	
462	武昌-75	11.3	14.0	2.6	1900.0	
463	武昌-75	10.4	8.9	2.6	743.0	
464	武昌-75	13.2	12.2	2.6	872.1	
465	武昌-75	11.4	3.7	2.6	48.3	
466	荆门-64	6.9	5.5	2.6	73.5	○
467	荆门-64	6.3	6.6	2.6	156.0	△
468	荆门-64	8.4	6.8	2.6	299.4	△ ○
469	荆门-64	6.2	5.9	2.6	149.2	
470	荆门-64	3.2	4.9	2.6	40.3	
471	荆门-64	7.9	7.6	2.6	121.2	○
472	荆门-64	5.2	6.9	2.6	135.2	△
473	荆门-64	9.8	6.5	2.6	256.2	△
474	荆门-64	6.4	8.8	2.6	63.7	○
475	荆门-64	6.5	6.2	2.6	127.1	△
476	荆门-64	8.7	6.4	2.6	113.4	
477	荆门-64	5.6	6.7	2.6	126.5	
478	荆门-64	8.8	7.7	2.6	168.9	
479	荆门-64	8.6	5.5	2.6	255.3	
480	荆门-64	6.2	5.9	2.6	198.0	
481	荆门-64	10.8	13.8	6.6	1425.2	

# 写 真 図 版



(1) 遺跡遠景（調査地上空より小丸川・高鍋市街地方向を望む）



(2) 遺跡遠景（調査地上空より鬼ヶ久保の台地方向を望む）

図版二



(1) 1号・2号溝状遺構の掘削状況（南より）



(2) 3号・4号溝状遺構の掘削状況（南より）



(1) 1号溝状遺構土層断面（南西より）



(2) 2号溝状遺構土層断面（北より）



(3) 3号・4号溝状遺構土層断面（南より）



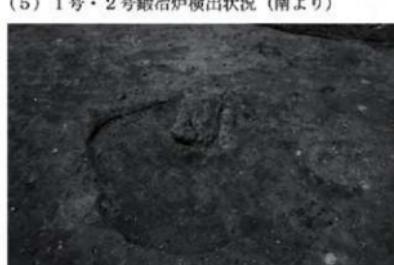
(4) 3号溝状遺構土層断面（南西より）



(5) 1号・2号鍛冶炉検出状況（南より）



(6) 1号鍛冶炉半裁状況（南西より）



(7) 1号鍛冶炉焼結部検出状況（南東より）



(8) 2号鍛冶炉焼結部検出状況（南東より）

図版四



(1) 白色粘土塊検出状況（北東より）



(2) 白色粘土塊断割状況（南西より）



(3) 流路検出状況（北西より）



(4) 流路内の堆积状況（北より）



(5) SH4 半裁および遺物出土状況（南西より）



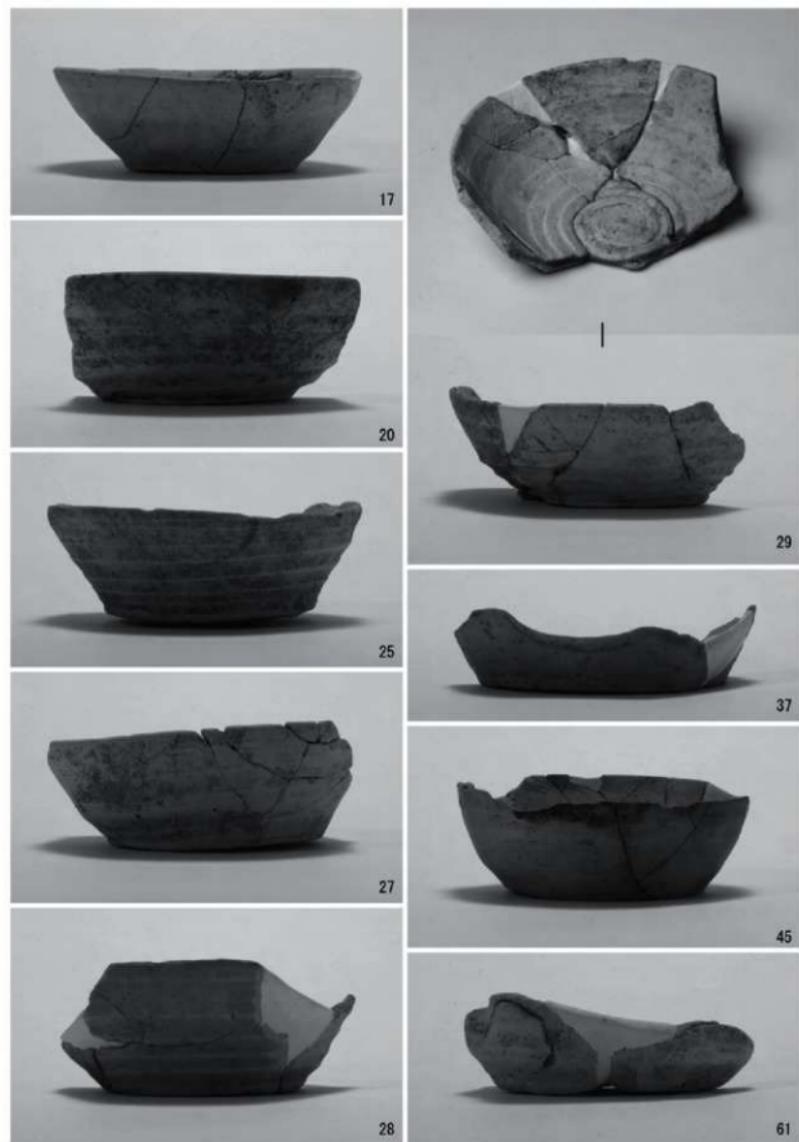
(6) SH13 遺物出土状況（南東より）



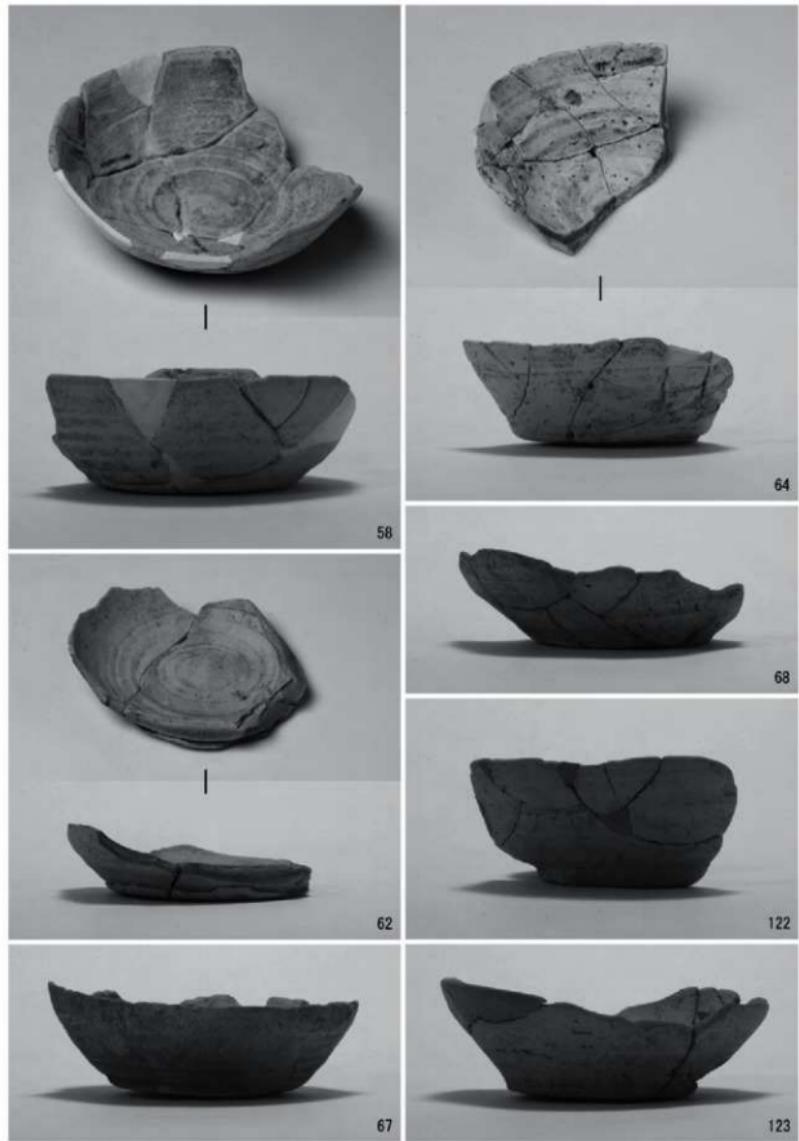
(7) SH86 断割および遺物出土状況（南より）



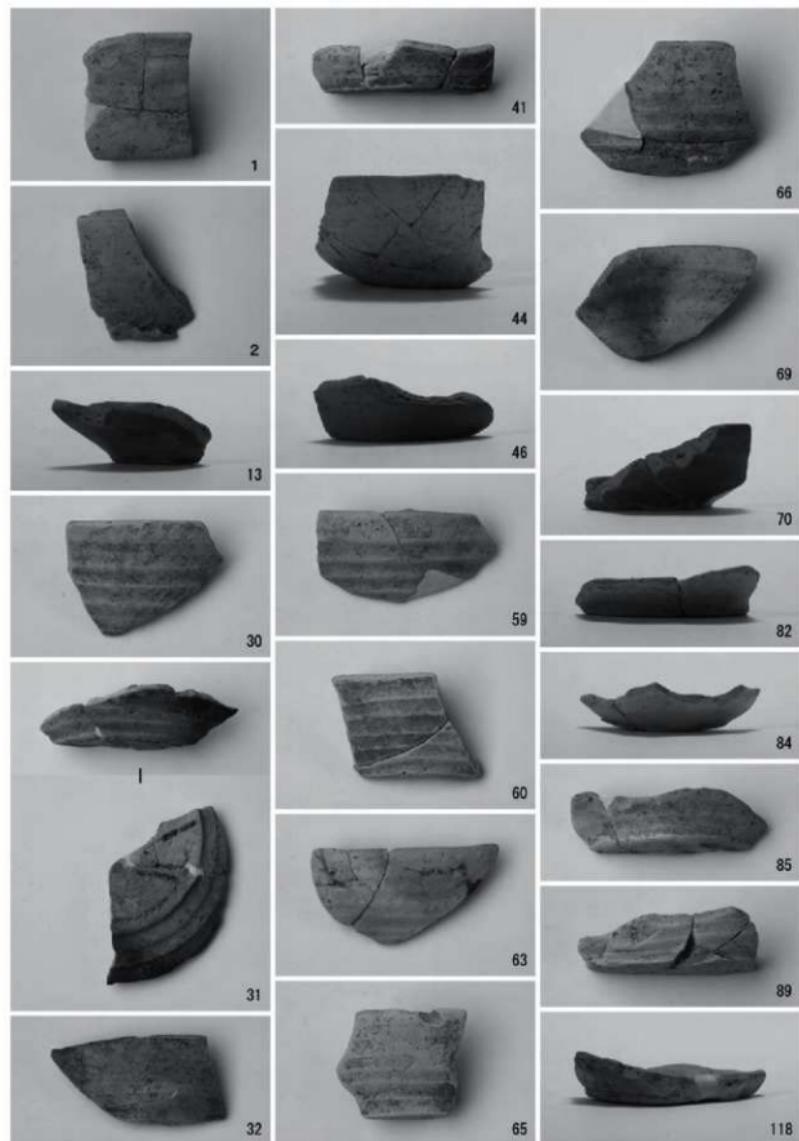
(8) SH66 半裁状況（南より）



出土遺物 1 (土師質土器 1)

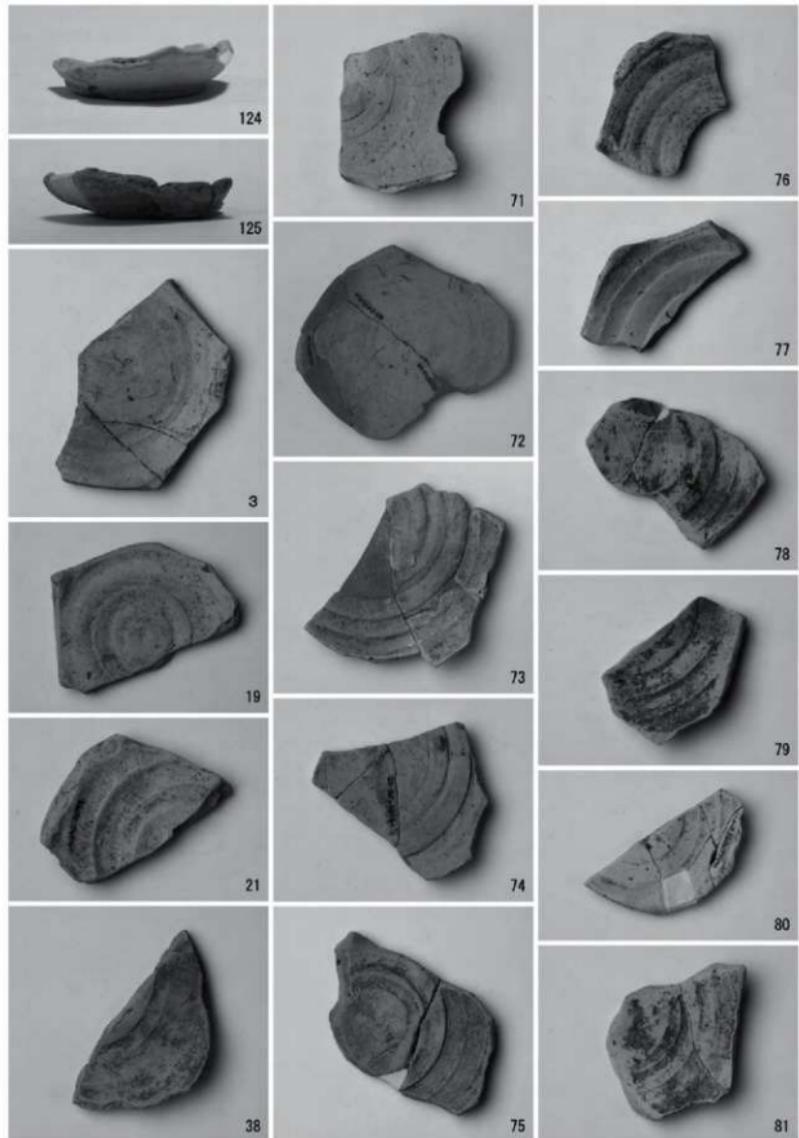


出土遺物2（土師質土器2）

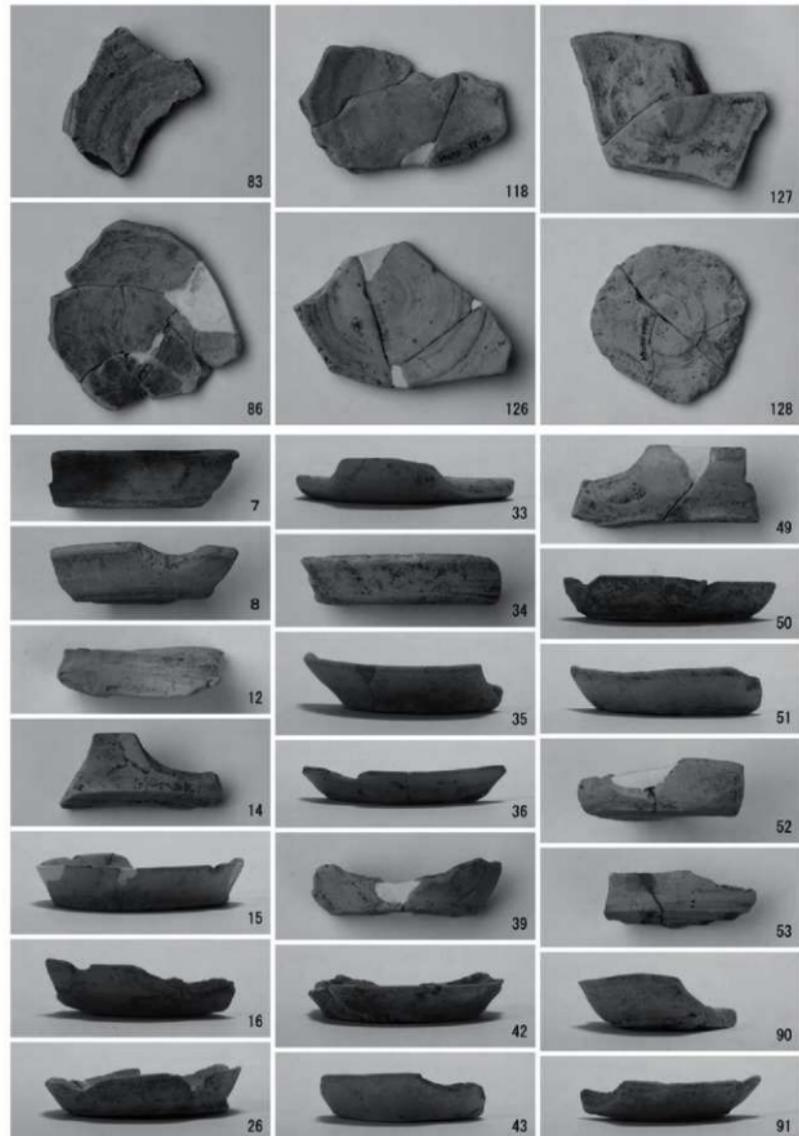


出土遺物3（土師質土器3）

圖版八

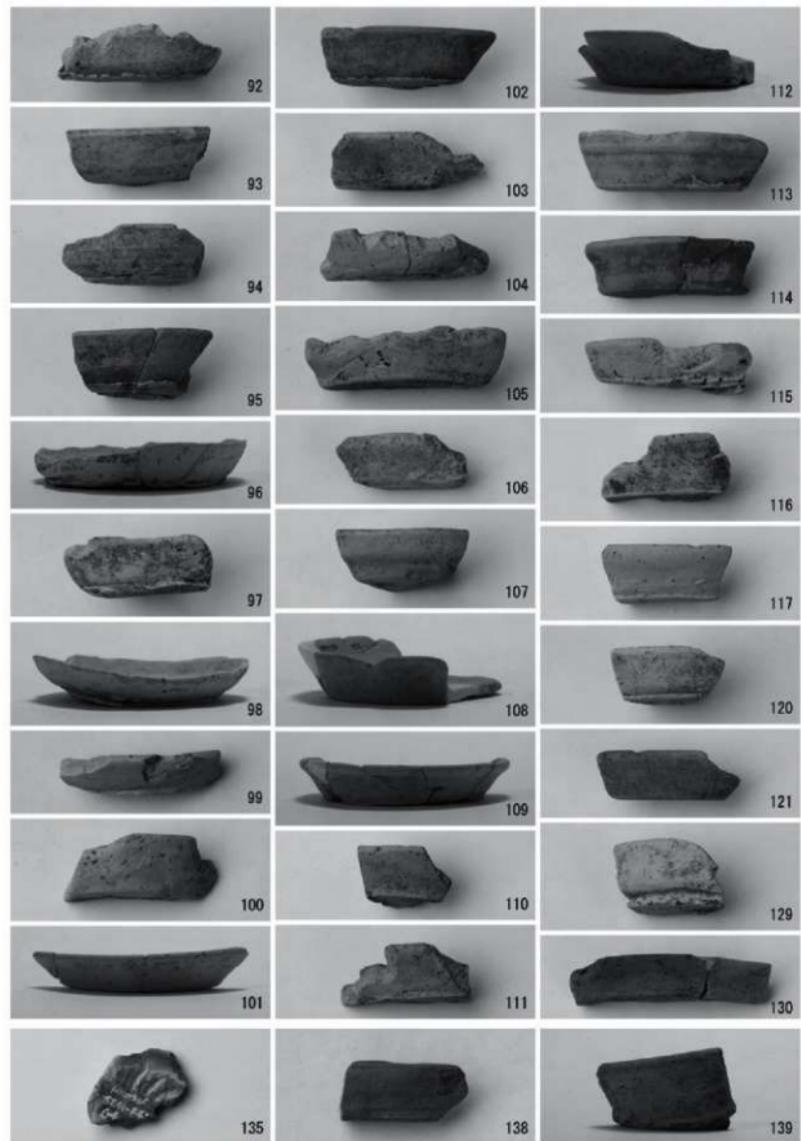


出土遺物4（土師質土器4）

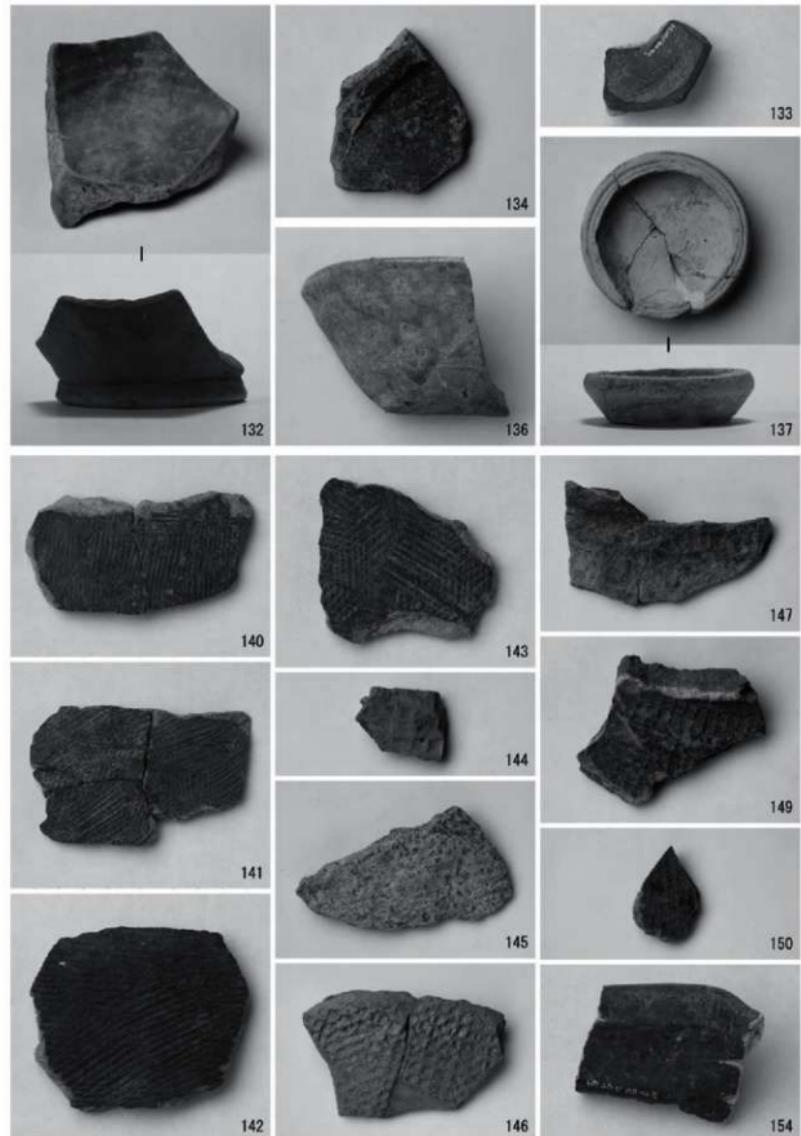


出土遺物 5 (土師質土器 5)

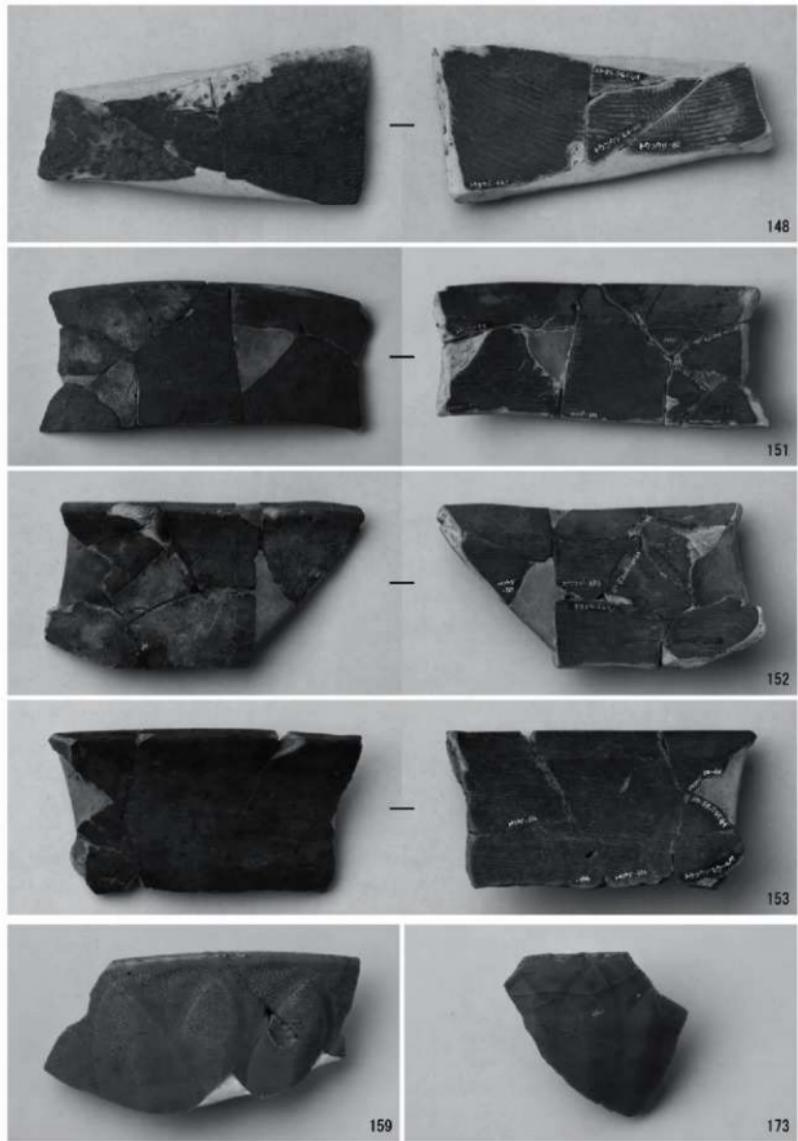
図版一〇



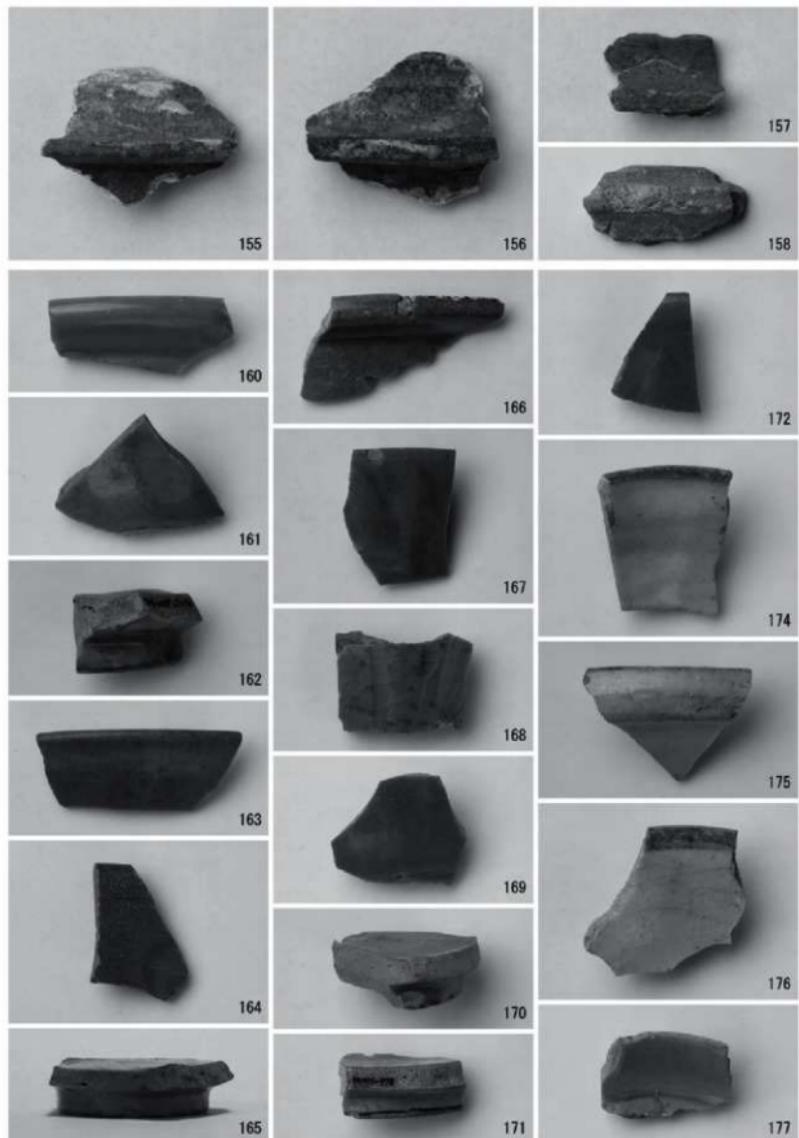
出土遺物 6 (土師質土器 6)



出土遺物 7 (土師質土器 7・陶器(坏)・瓦質土器 1)

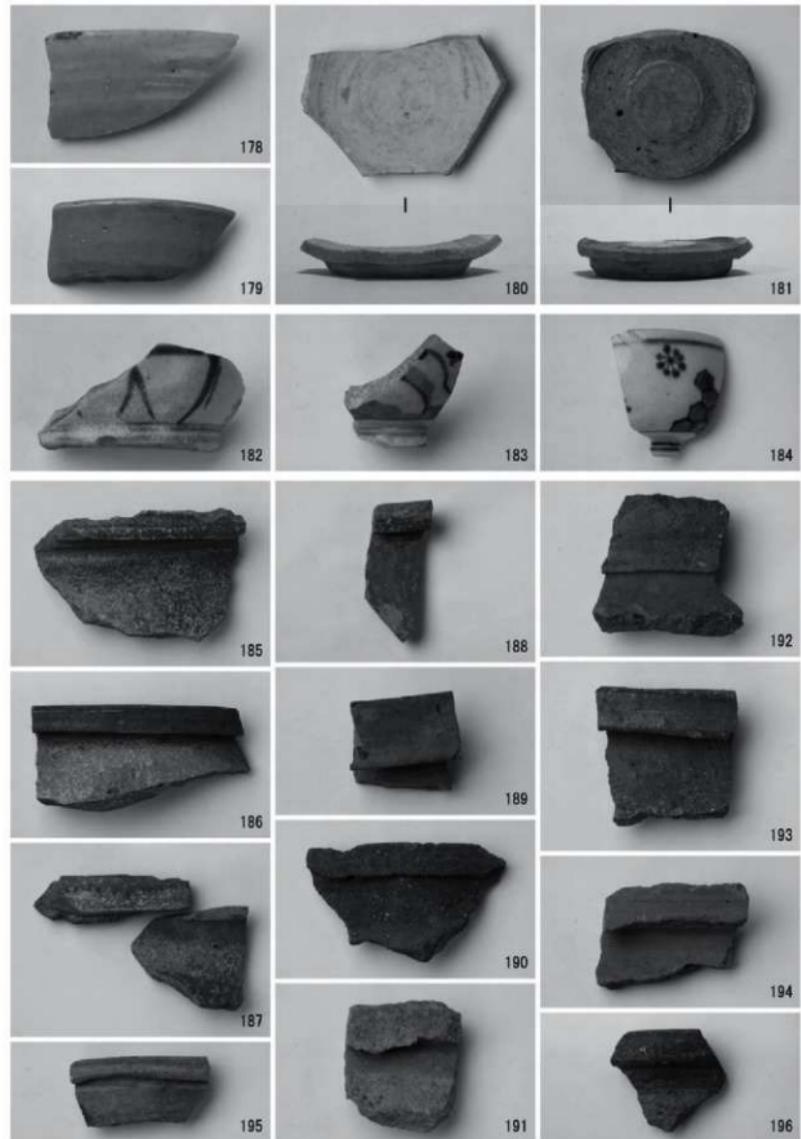


出土遺物 8 (瓦質土器 2・磁器 1)

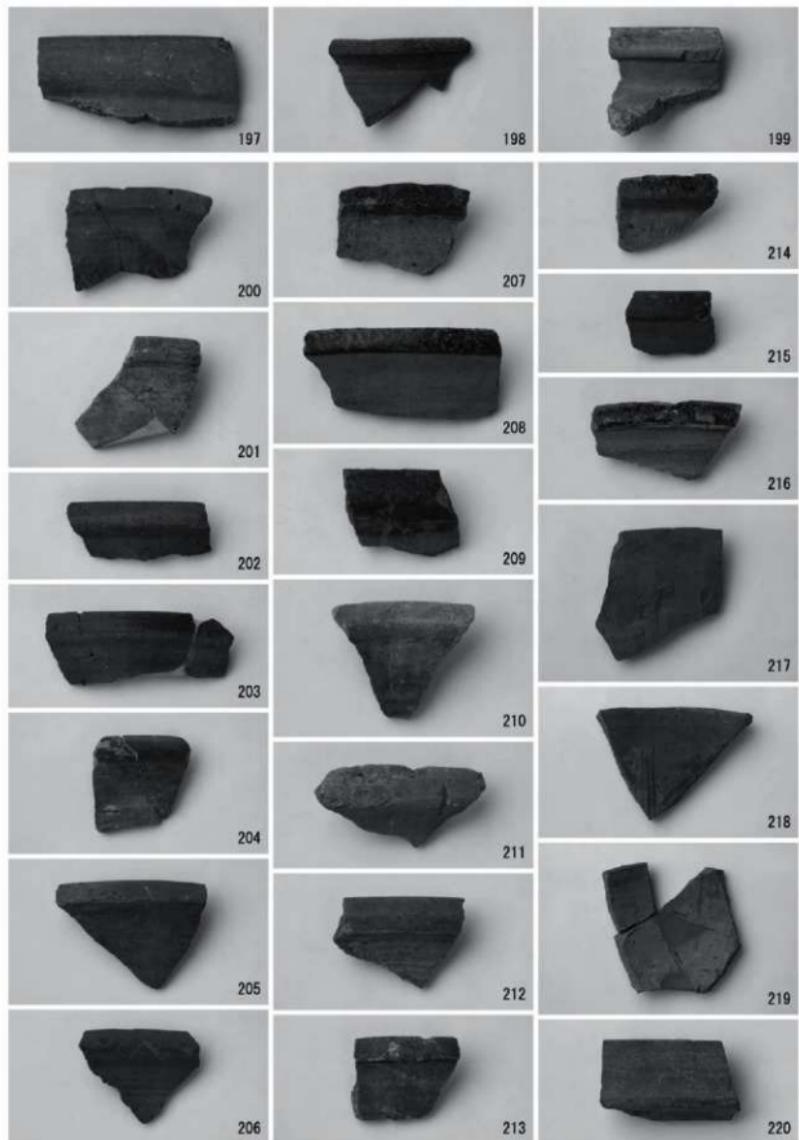


出土遺物 9 (瓦質土器 3・磁器 2)

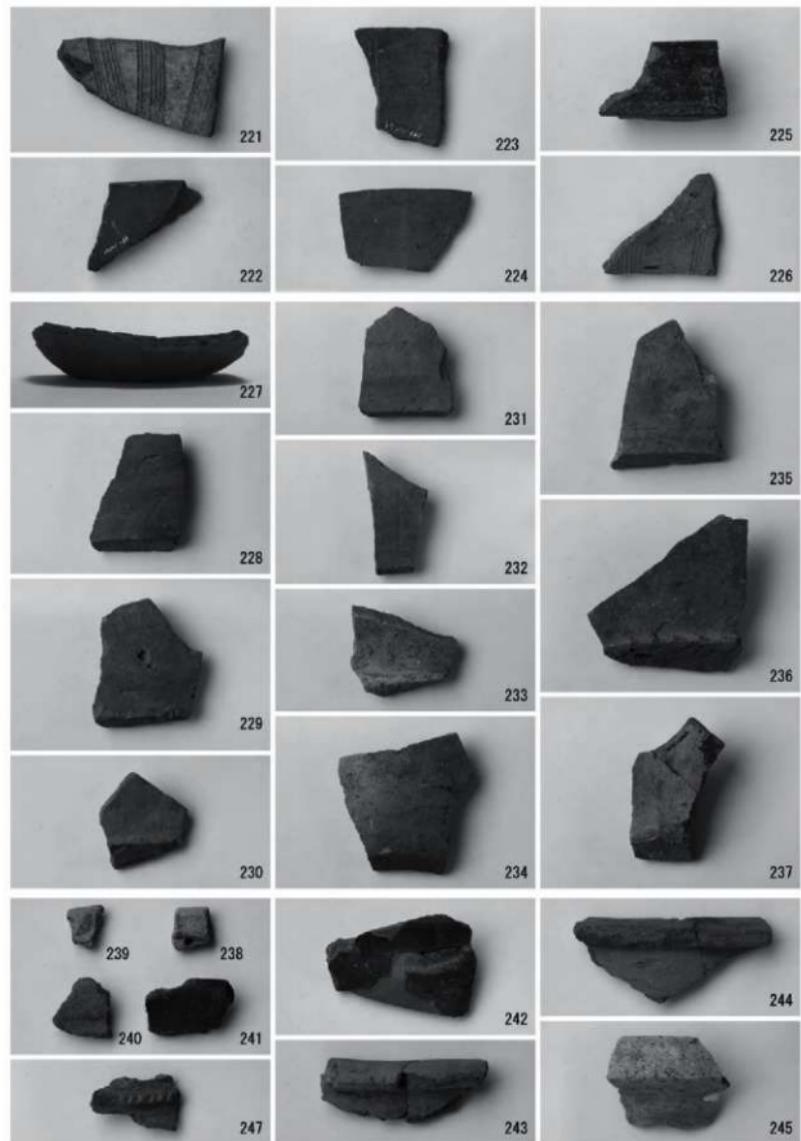
図版一四



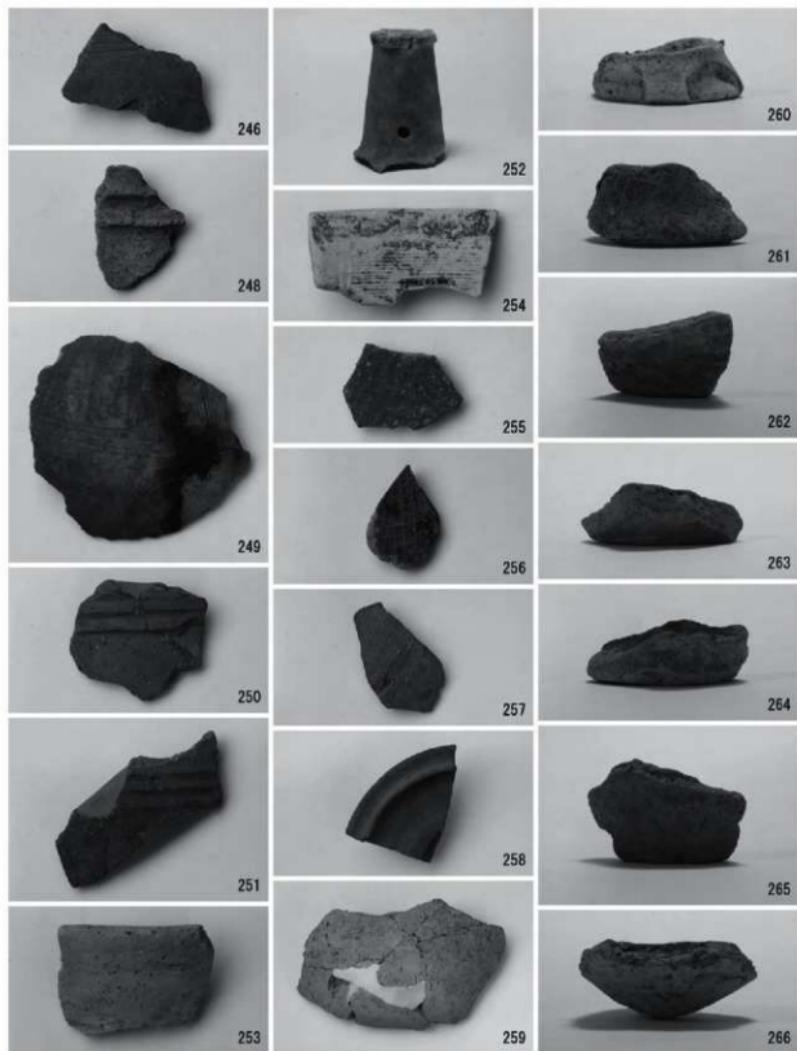
出土遺物 10 (磁器 3・陶器 1)



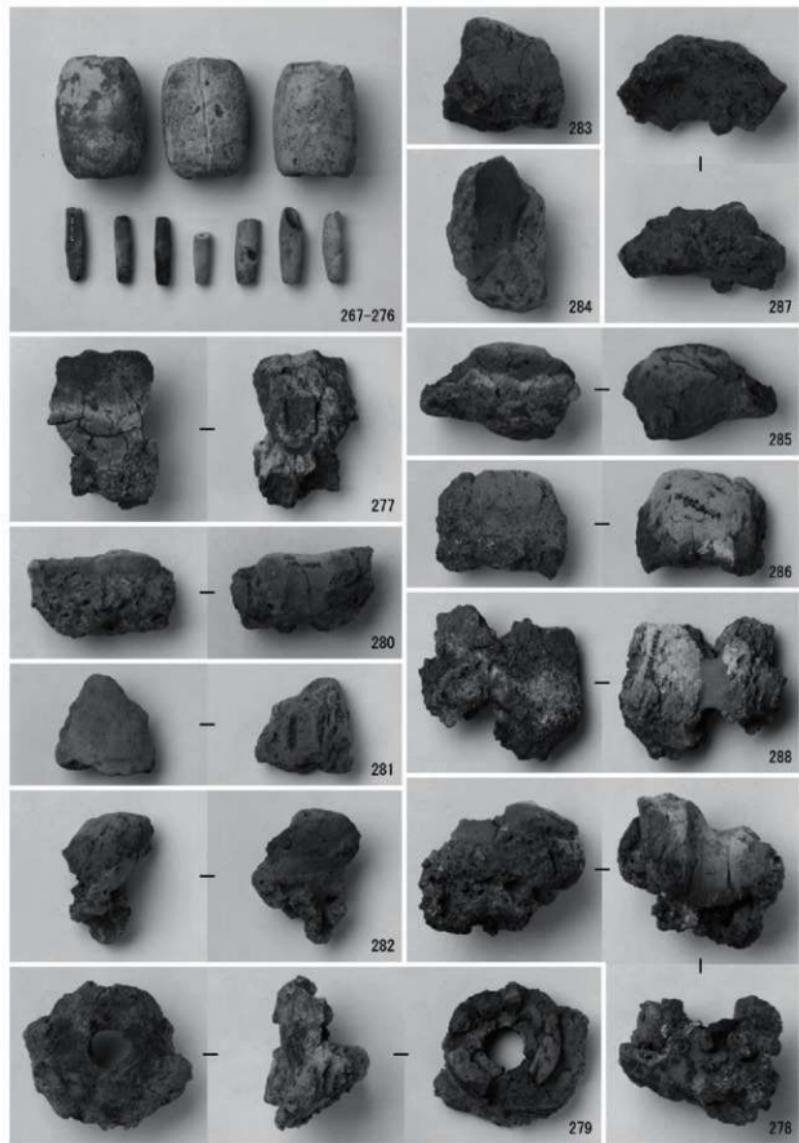
出土遺物 11 (陶器 2・中世須恵器)



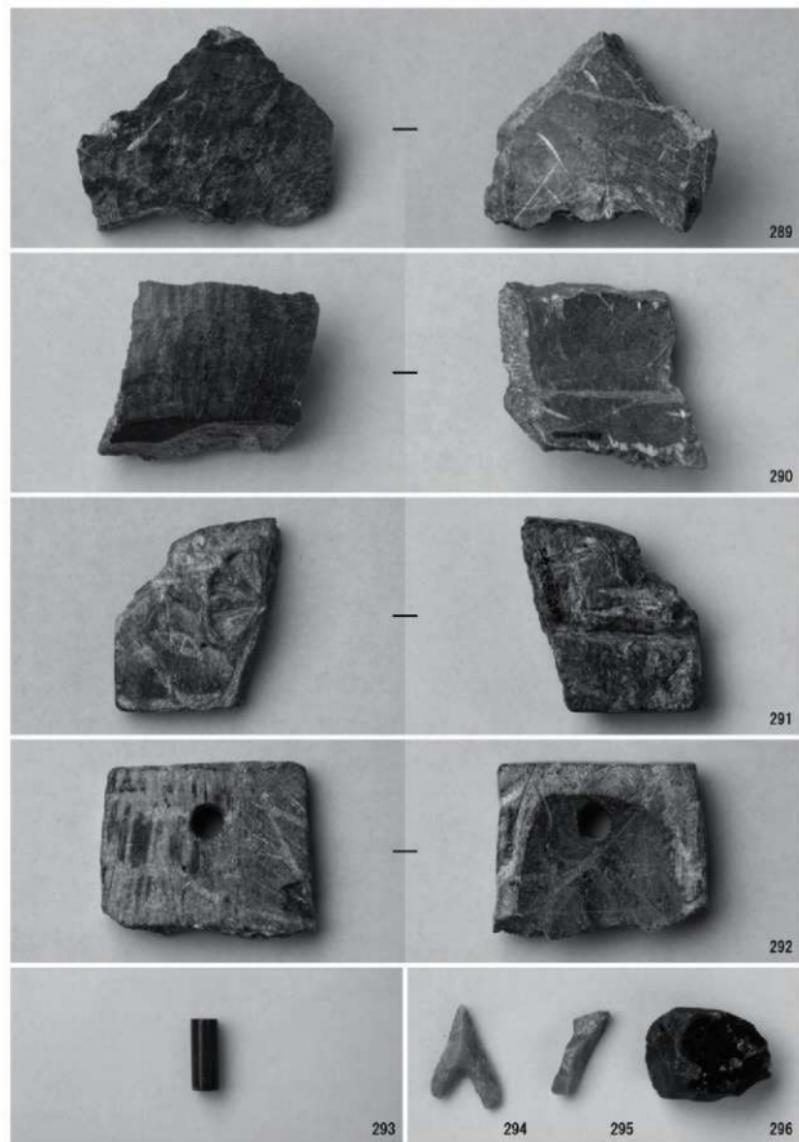
出土遺物 12 (陶器 3・須恵器(底部)・縄文土器・弥生土器 1)



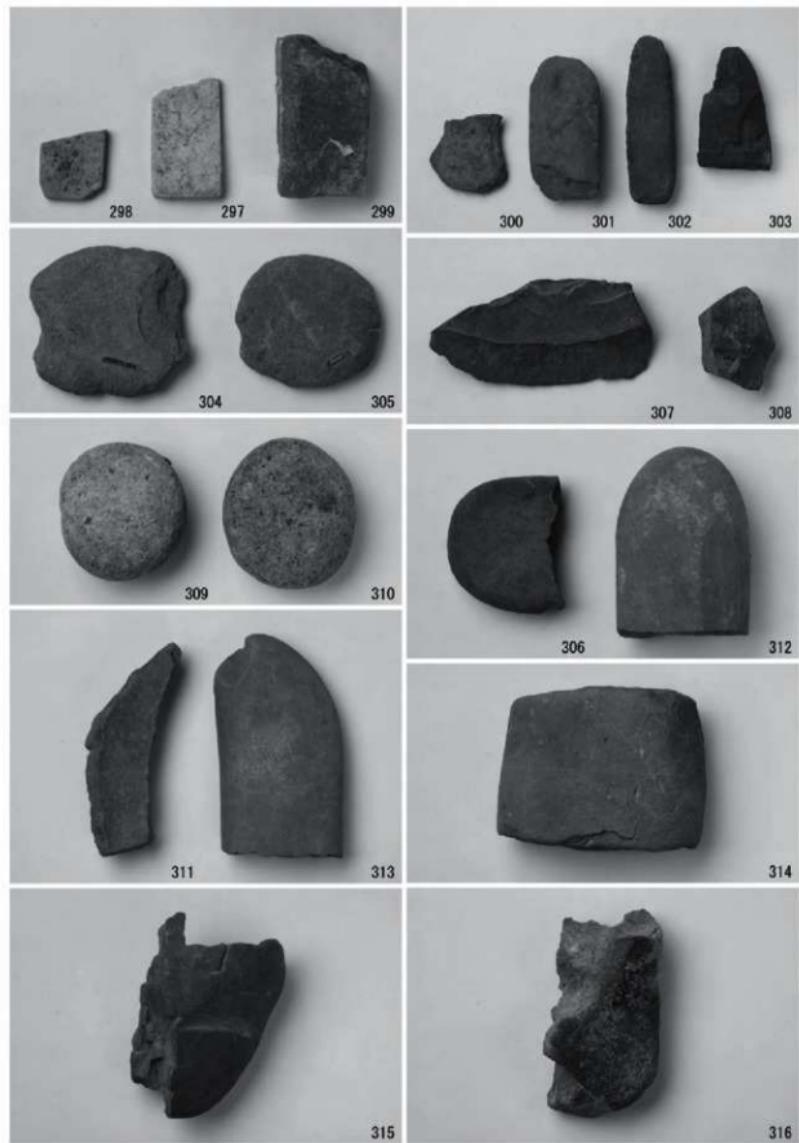
出土遺物 13 (弥生土器 2・土師器・須恵器)



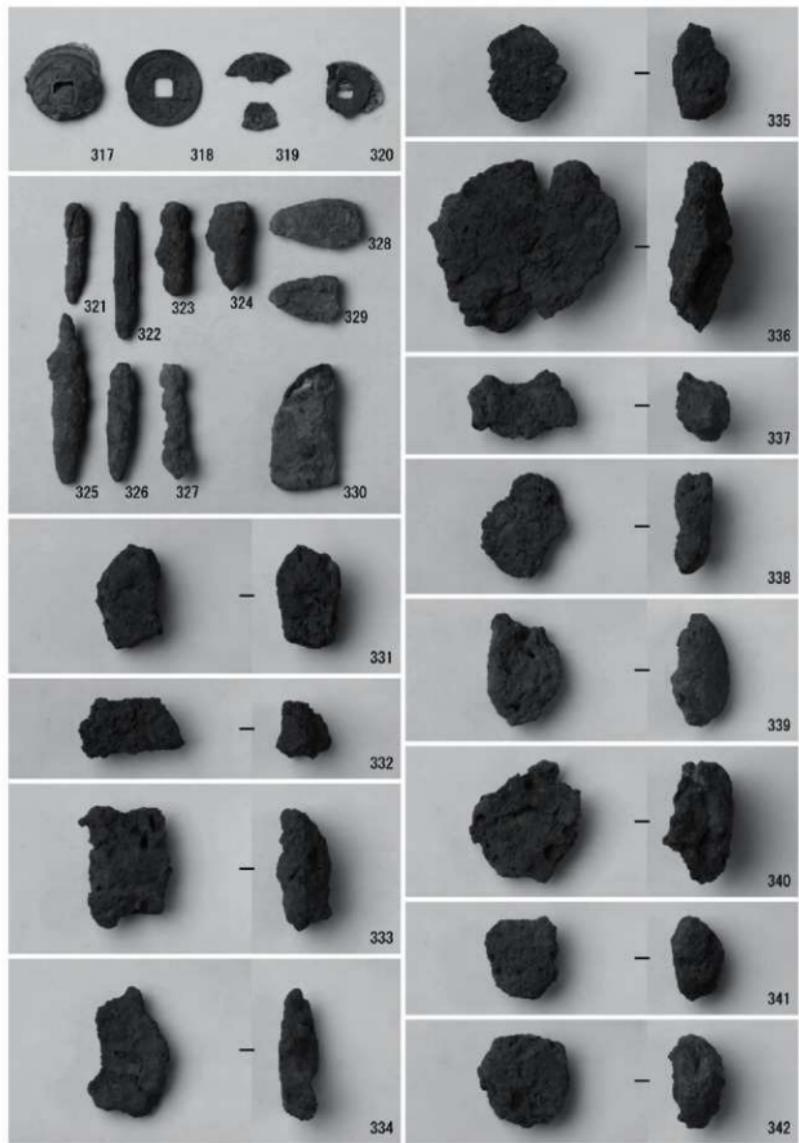
出土遺物 14 (土錘・羽口)



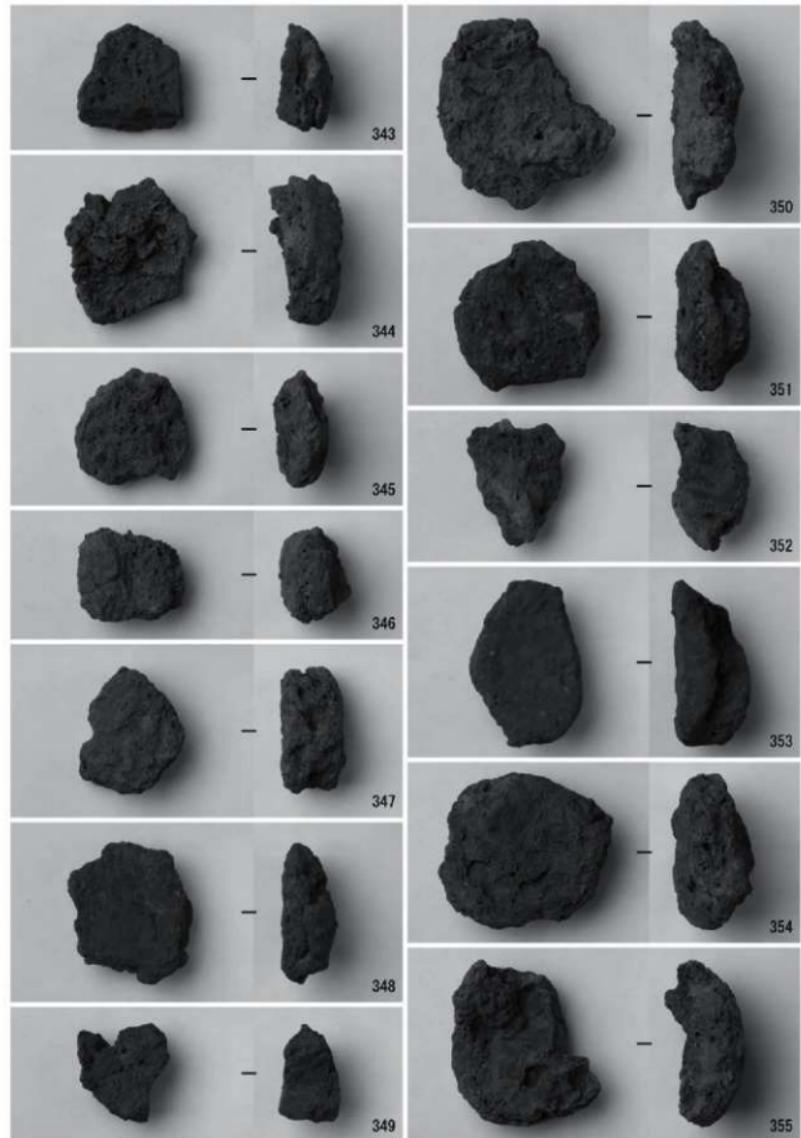
出土遺物 15 (石製品・石器 1)



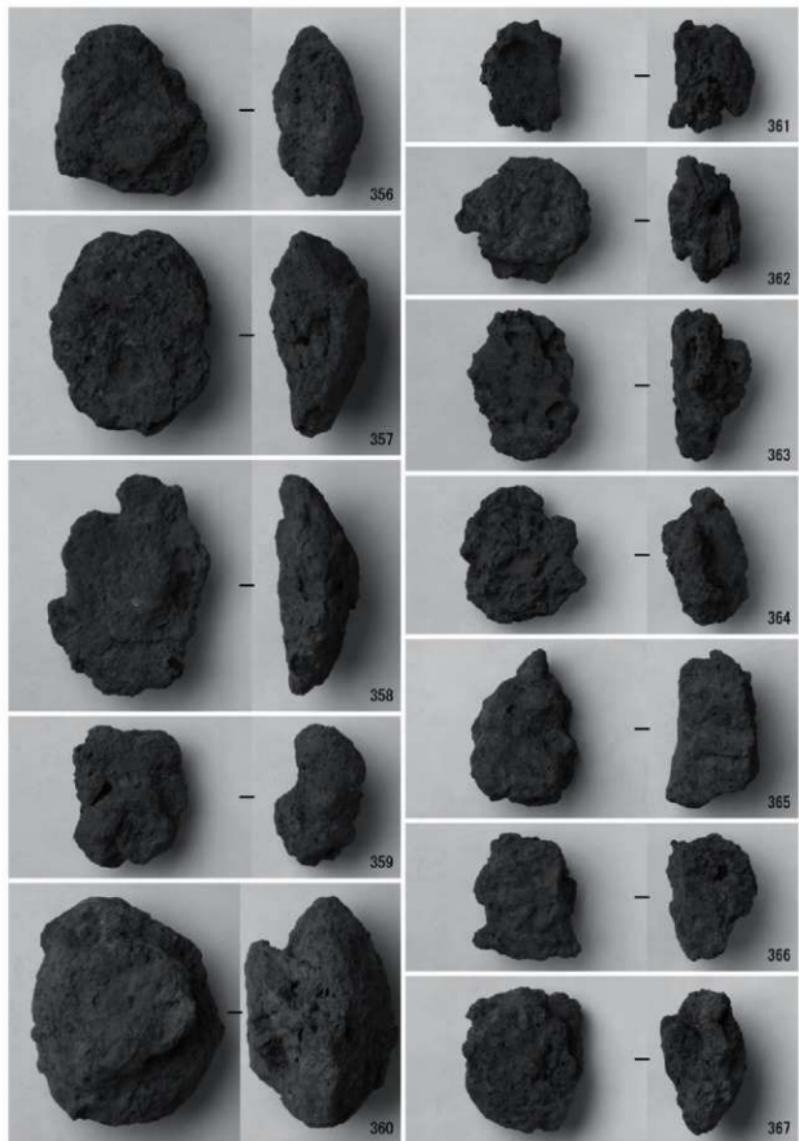
出土遺物 16 (石器 2)



出土遺物 17 (銅錢・鐵器・鐵滓 1) (鉄滓 S= 約 1/3)

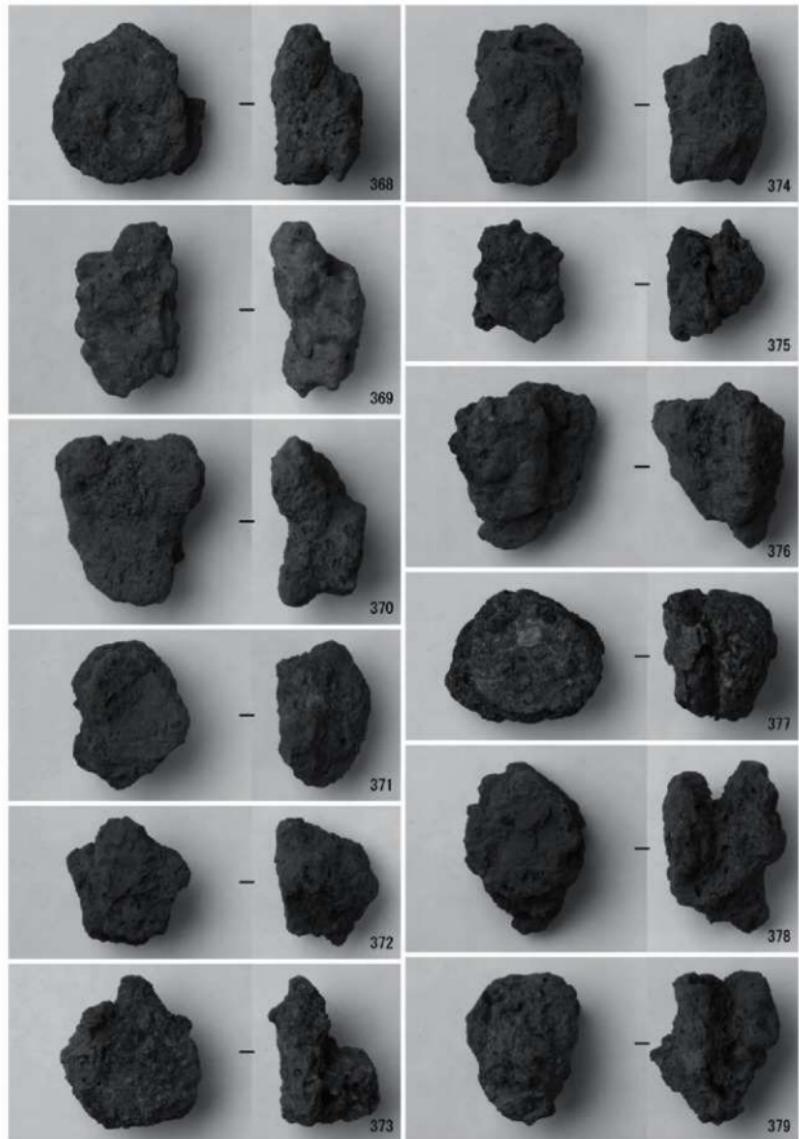


出土遺物 18 (鉄滓 2) (S=約 1/3)

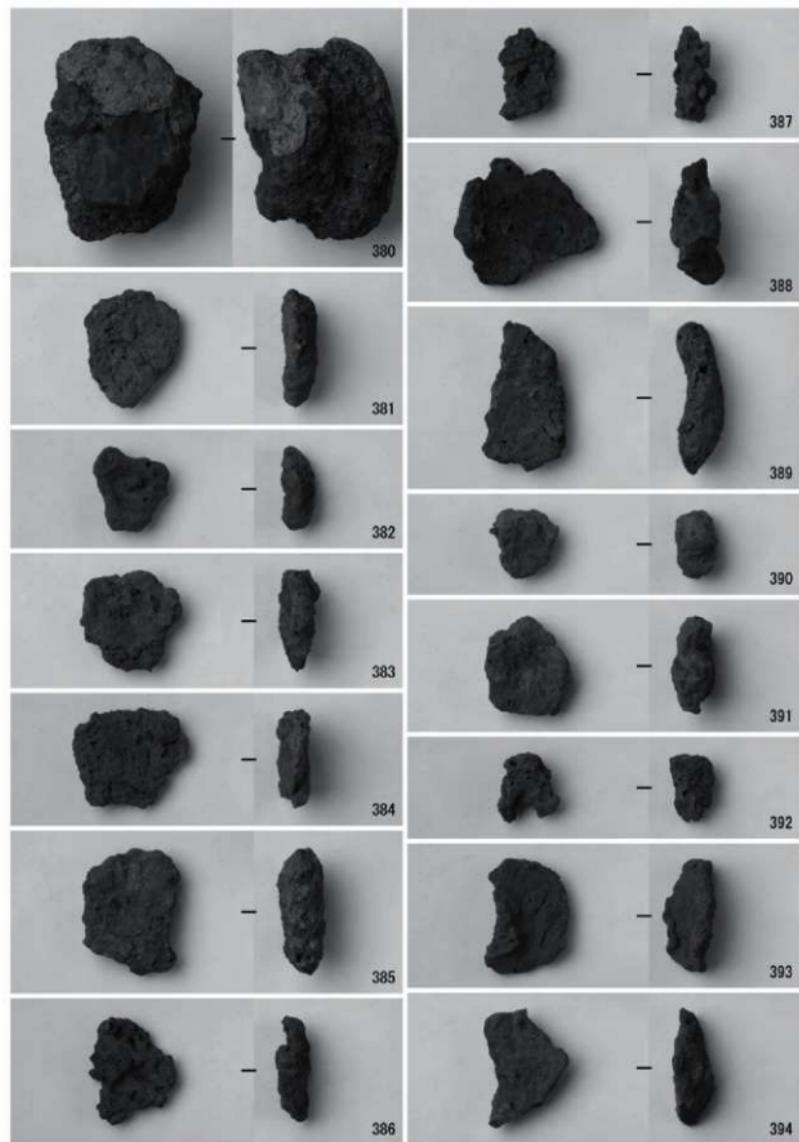


出土遺物 19 (鉄滓 3) (S=約 1/3)

図版二四

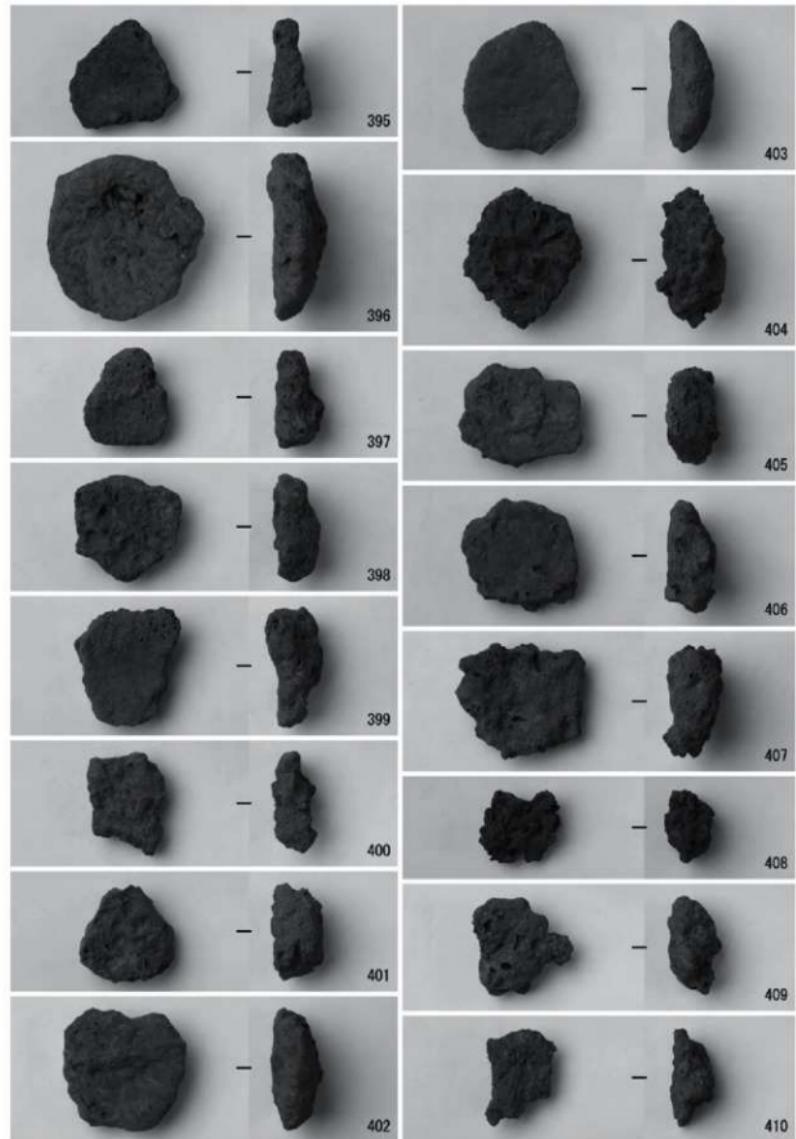


出土遺物 20 (鉄滓 4) (S= 約 1/3)

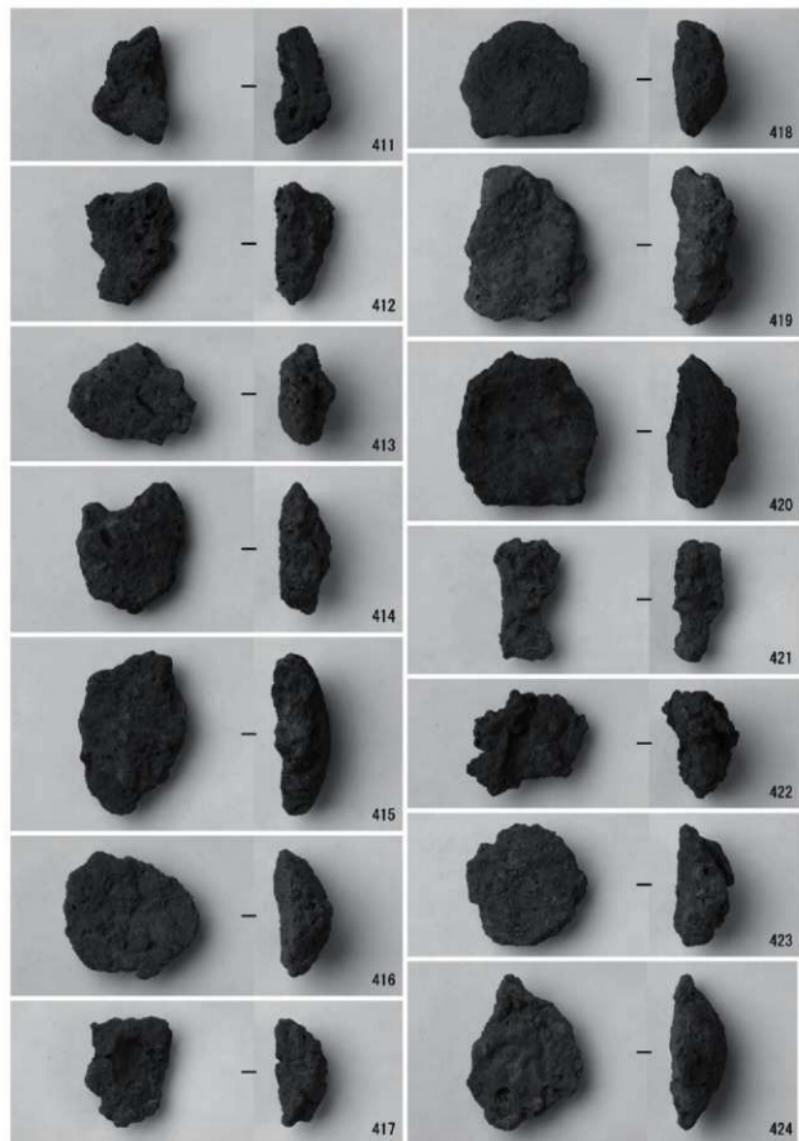


出土遺物 21 (鉄滓 5) (S=約 1/3)

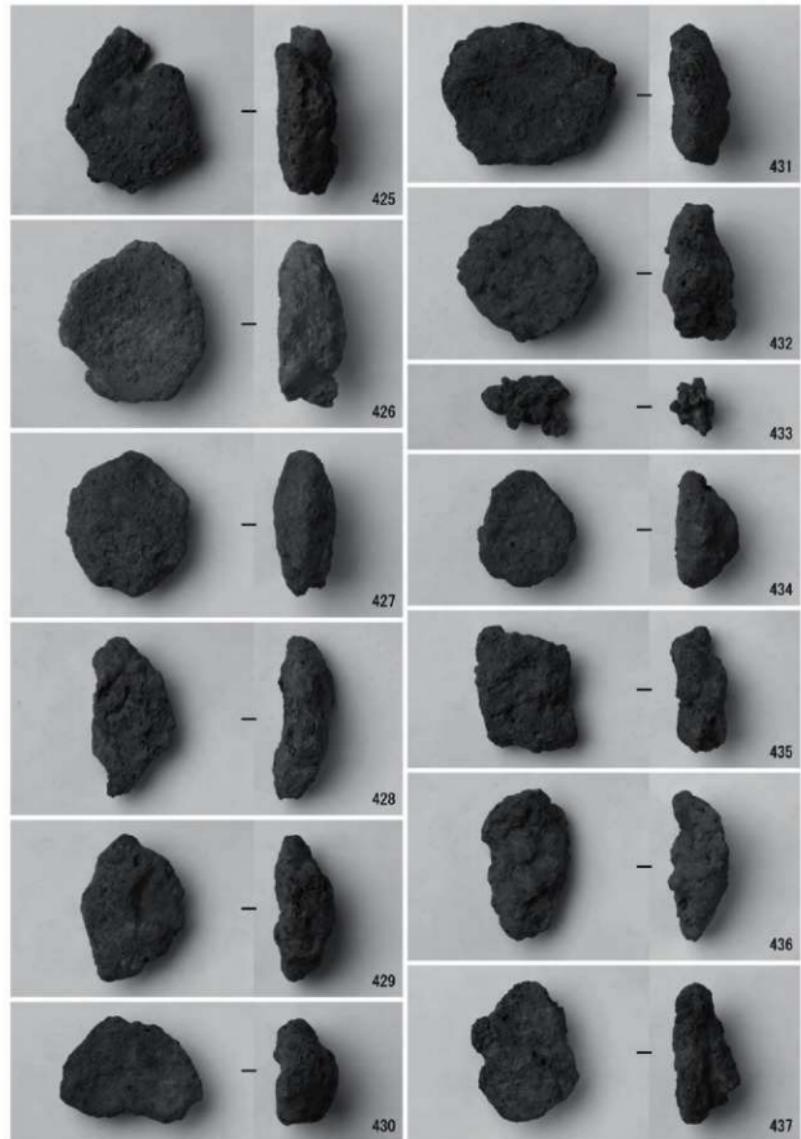
図版二六



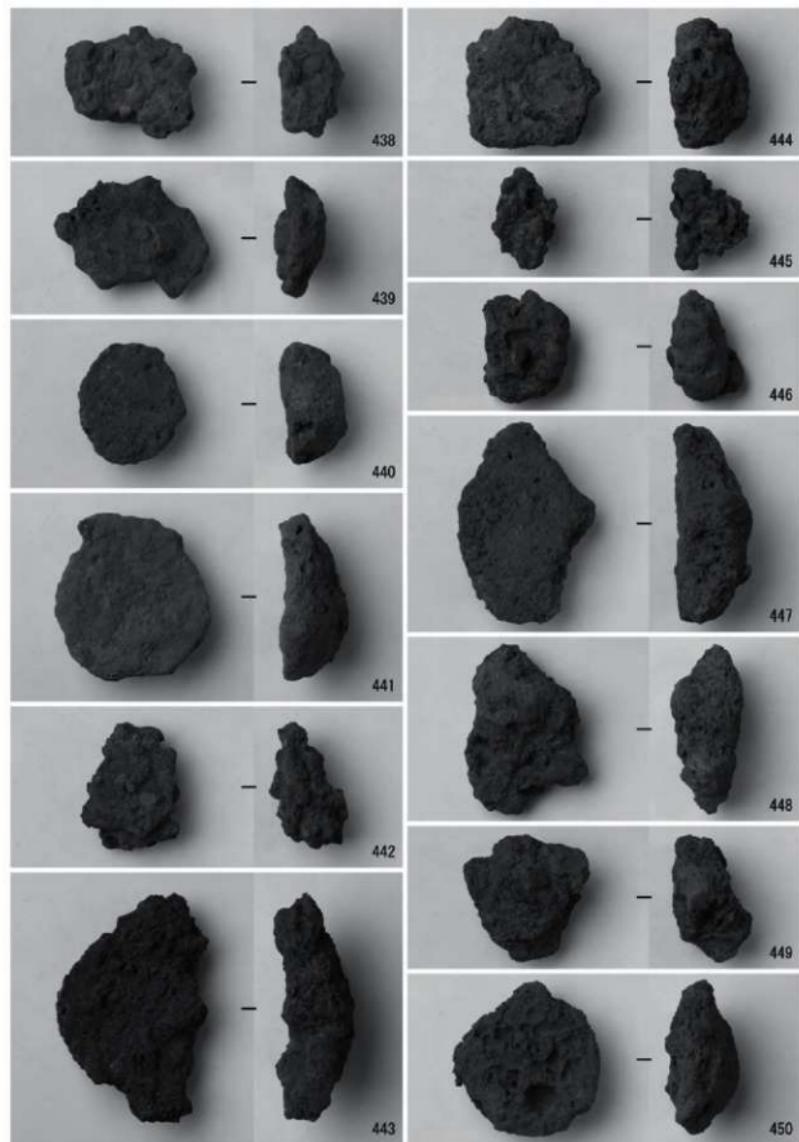
出土遺物 22 (鉄滓 6) (S= 約 1/3)



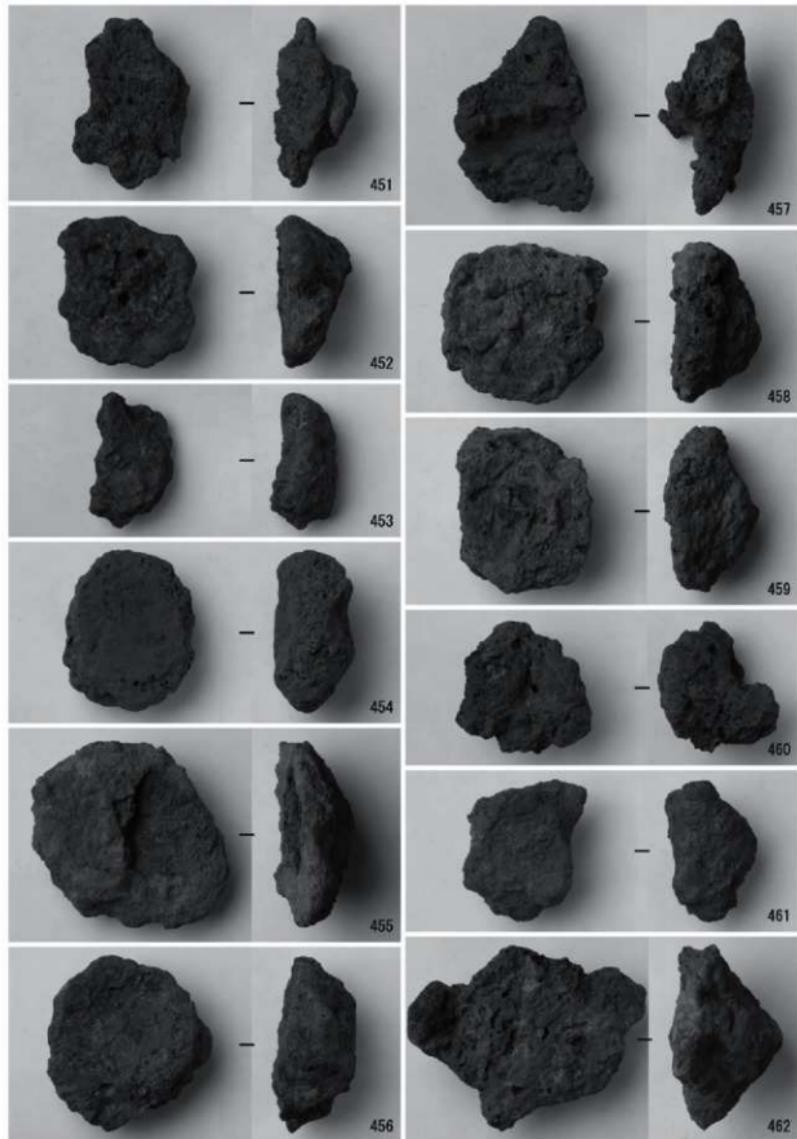
出土遺物 23 (鉄滓 7) (S=約 1/3)



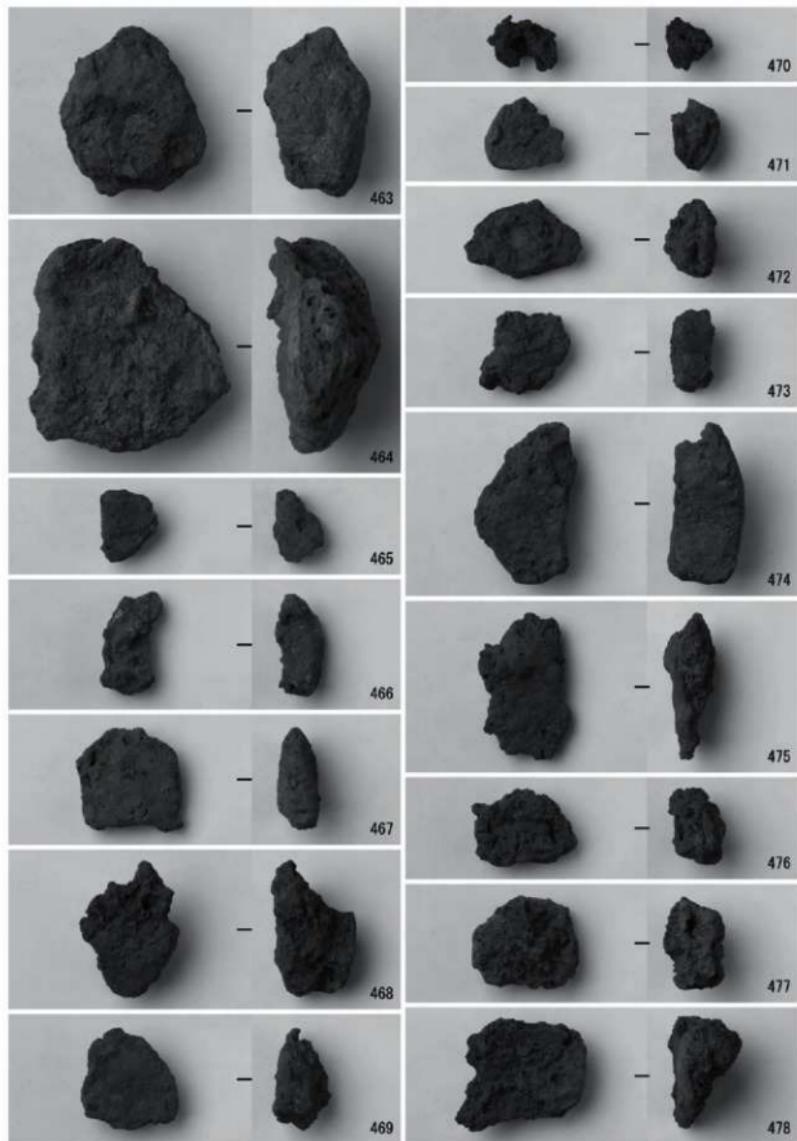
出土遺物 24 (鉄滓 8) (S= 約 1/3)



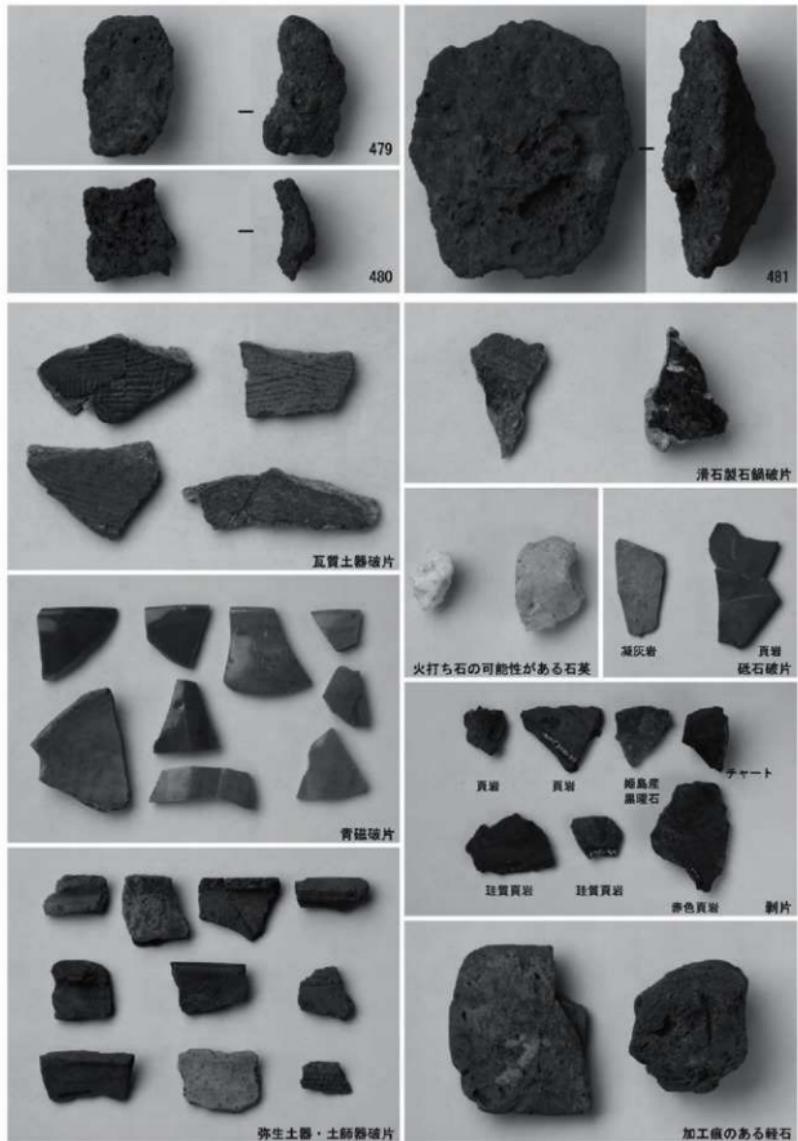
出土遺物 25 (鉄滓 9) (S= 約 1/3)



出土遺物 26 (鉄滓 10) (S= 約 1/3)



出土遺物 27 (鉄滓 11) (S= 約 1/3)



出土遺物 28 (鉄溝 12・実測図未掲載資料) (鉄溝 S= 約 1/3)

## 報告書抄録

ふりがな	とうこうじいせき							
書名	東光寺遺跡							
副書名	一般県道木城高鍋線（板本工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	加藤 敬							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL. 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2011年 3月 25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
とうこうじいせき 東光寺遺跡	みやざきけんこくちぐん 宮崎県久喜湯都 たかのい・とうもろだ 高鍋町持田 あさとうこうじ 字東光寺	45401	32 度 08 分 42 秒 付 近	131 度 31 分 23 秒 付 近	20090601 ～ 20090831	約 650 m <sup>2</sup>	一般県道木城高鍋線（板本工区） 道路改良工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東光寺遺跡	集落	縄文～ 古墳	なし	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器 管玉・石器				
		古代～	鍛冶炉	2 基	土師質土器・黒色土器・瓦質土器・陶磁器・中世須恵器			
		中世	溝	4 条	土鍋・羽口 滑石製石鍋破片再加工品			
					銅錢 鉄器・鉄津	200 点以上の鉄津が出土		

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第207集

## 東光寺遺跡

一般県道木城高鍋線（坂本工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

T E L 0985(36)1171 F A X 0985(72)0660

印刷 株式会社エスアイエス

〒880-0852 宮崎市高洲町50-4

T E L 0985-27-8899 FAX 0985-28-3025

---